

齋宮跡発掘調査報告Ⅱ

柳原区画の調査

出土遺物編

2019

齋宮歴史博物館

齋宮跡発掘調査報告Ⅱ

柳原区画の調査

出土遺物編

2019

齋宮歴史博物館

はじめに

平成27年10月、史跡齋宮跡の多くの関係者が待望していた、平安時代の復元建物を中心とする史跡公園「さいくう平安の杜」が開園しました。この場所は、光仁天皇から桓武天皇の時代にかけて史跡東部で造営された方格地割のほぼ中央の「柳原区画」にあたり、史跡公園整備に先立っての発掘調査とその後の研究により、平安時代のほぼ全部の期間を通して齋宮の「寮庁」として機能したと考えられています。

齋宮歴史博物館は、平成25年度には、この柳原区画で確認された遺構について報告するとともに、この区画の変遷や性格について考察した『齋宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 遺構・遺構総括編』を刊行し、復元整備を行う柳原区画の検討結果を公開しておりますが、それに引き続き、今回はその出土遺物を報告する『出土遺物編』を刊行します。これにより、史跡整備にあわせて当館が進めた柳原区画の発掘調査報告が一応の完結を見ることになるとともに、本書にはあわせて史跡齋宮跡の遺構の年代決定や性格の考証に欠くことのできない、土器の編年の検討案を掲載しています。本書がこれからの齋宮跡の調査研究と保護に活かされることを切に願っています。

最後になりましたが、本報告書の刊行にあたりましては、平素から齋宮跡の調査研究に貴重ご指導をいただいております齋宮跡調査研究指導委員の諸先生方をはじめ、文化庁、明和町などの関係機関や、齋宮跡の発掘調査にご理解とご協力をいただいております地元関係者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

平成31年3月

齋宮歴史博物館

館長 明石典男

凡 例

- 1 本書は、三重県教育委員会が昭和43年度から平成19年度まで、三重県が平成20年度から平成30年度まで文化庁からの国庫補助等を受けて実施した史跡斎宮跡の発掘調査の中で、平成22年度から実施している斎宮跡史跡東部整備事業の主たる事業地である方格地割内の方形区画のひとつである柳原区画の調査成果のうち、出土遺物について総括したものである。
- 2 斎宮跡の方格地割における各区画の名称については、現在の小字名に基づく名称を採用している。
- 3 遺構の時期区分の指標となる出土土器の分類と時期については、「斎宮跡の土器」(『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』斎宮歴史博物館 2001)を踏まえつつ、本書第3章に掲載した最新の編年研究の成果を用いている。
- 4 本書に関連する遺構表示記号は次のとおりである。
SB：掘立柱建物 SD：溝 SE：井戸 SH：竪穴建物 SK：土坑
- 5 遺物の漢字表記については、材質の違いによる漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「碗」、「つき」は「杯」を用いている。ただし参考文献からの引用の場合にはこの限りではない。
- 6 遺物実測図は1/4を基本とし、一部については1/6や1/2を用いた。
- 7 本書の執筆は、斎宮歴史博物館調査研究課の大川勝宏が行った。なお、刊行に向けての出土遺物の整理作業や図版作成にあたり、下記の協力を受けた。
斎宮歴史博物館業務補助職員
八木光代・水木夏美・大橋由紀・杉原泰子・西村秋子・山本達也・西川千晶・森本周子
- 8 本書の執筆にあたっては、「史跡斎宮跡調査研究指導委員会」の指導・助言を受けている。また、本書執筆のための検討には下記の協力・補佐を得た(敬称略)。
山中由紀子・川部浩司・宮原佑治・榎村寛之・泉 雄二・竹内英昭

目次

第1章 序言	
第1節 刊行の方針	1
第2節 刊行に向けての体制	2
第2章 柳原区画の出土遺物	
第1節 建物遺構出土の遺物	3
第2節 土坑・井戸・溝の出土遺物	5
第3節 柳原区画を特徴づける遺物	23
第3章 斎宮跡の土器編年の再検討	
第1節 斎宮跡の土器編年の再検討	46
第2節 土師器供膳具を中心とした斎宮跡の土器の変遷	49
第4章 遺物編総括	
第1節 出土土器群からみる柳原区画	73
第2節 柳原区画を特徴づけるの遺物からみた柳原区画の性格	74

表目次

第1表 斎宮跡調査研究指導委員会委員一覧	2
第2表 出土遺物観察表(1)	29
第3表 出土遺物観察表(2)	30
第4表 出土遺物観察表(3)	31
第5表 出土遺物観察表(4)	32
第6表 出土遺物観察表(5)	33
第7表 出土遺物観察表(6)	34
第8表 出土遺物観察表(7)	35
第9表 出土遺物観察表(8)	36
第10表 出土遺物観察表(9)	37
第11表 出土遺物観察表(10)	38
第12表 出土遺物観察表(11)	39
第13表 出土遺物観察表(12)	40
第14表 出土遺物観察表(13)	41
第15表 出土遺物観察表(14)	42
第16表 出土遺物観察表(15)	43
第17表 出土遺物観察表(16)	44
第18表 出土遺物観察表(17)	45
第19表 土師器供膳具(杯G、杯A・D・中世皿)の径高指数の変遷	47
第20表 斎宮跡出土土器編年表	48・49
第21表 斎宮跡出土土師器・黒色土器類・ロクロ土師器の器種消長表	69
第22表 「2000年編年」と今回試案の比較	70

挿図目次

第1図	柳原区画及び周辺の調査区位置図	3
第2図	建物遺構出土の遺物	4
第3図	斎宮Ⅱ-1期の遺構出土遺物(1)	6
第4図	斎宮Ⅱ-1期の遺構出土遺物(2)	7
第5図	斎宮Ⅱ-1期の遺構出土遺物(3)	8
第6図	斎宮Ⅱ-1期の遺構出土遺物(4)	9
第7図	斎宮Ⅱ-2期の遺構出土遺物(1)	11
第8図	斎宮Ⅱ-2期の遺構出土遺物(2)	12
第9図	斎宮Ⅱ-2期の遺構出土遺物(3)	13
第10図	斎宮Ⅱ-2期の遺構出土遺物(4)	14
第11図	斎宮Ⅱ-3・4期の遺構出土遺物	15
第12図	斎宮Ⅲ-1~3期の遺構出土遺物	17
第13図	斎宮Ⅲ-3期の遺構出土遺物	18
第14図	斎宮Ⅲ-4期の遺構出土遺物(1)	19
第15図	斎宮Ⅲ-4期の遺構出土遺物(2)	20
第16図	斎宮Ⅲ-4期の遺構出土遺物(3)	21
第17図	斎宮Ⅲ-3期・Ⅳ-1期の遺構出土遺物	22
第18図	緑釉陶器・貿易陶磁・硯・製塩土器・小型模造品	24
第19図	墨書土器	26
第20図	刻書土器	28
第21図	金属製品・金属関連遺物・石製品	29
第22図	土師器供膳具の段階と変遷(1)	60
第23図	土師器供膳具の段階と変遷(2)	61
第24図	土師器供膳具の段階と変遷(3)	62
第25図	土師器供膳具の段階と変遷(4)	63
第26図	ロクロ土師器の段階と変遷	64
第27図	黒色土器・京都系土師器の段階と変遷	65
第28図	相伴する須恵器・灰釉陶器類(1)	66
第29図	相伴する須恵器・灰釉陶器類(2)	67
第30図	編年比較資料	68

写真図版目次

P L 1	柳原区画出土遺物(1)	75
P L 2	柳原区画出土遺物(2)	76
P L 3	柳原区画出土遺物(3)	77

第1章 序 言

第1節 刊行の方針

本書は、史跡斎宮跡東部の柳原区画からの出土遺物を総括的に報告するものであり、平成25年度に刊行した『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 遺構・遺構総括編』（以後『遺構編』という）と組になるものである。柳原区画については、すでに『遺構編』の中で、出土遺物の状況も踏まえて、8世紀末からの方格地割の整備後、9世紀前葉以降の斎宮の機構改革により、「斎宮寮庁」の中でも四面庇付建物（正殿）を中心とした斎宮寮の儀礼の場として再整備されたと考え、その後平安時代を通じて「斎宮寮庁」として継続的に機能したとの性格づけを行っている。

本書は、柳原区画の出土遺物の中で、こうした柳原区画の性格や変遷を示す資料を報告するものである。平成12(2000)年度に刊行した『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』（以下『報告Ⅰ』という）で編年基準資料として報告された第20次調査のS K1045とS K1074の出土遺物は、これまでの未報告資料を追加して再掲した。その他、各調査概要報告に掲載済みでも区画の性格を検討する上で必要と判断した遺物を掲載した他は、重複を省くために未報告資料の紹介に重点を置き、各年度の概要報告に既に報告された遺物は省略した。

一方、『遺構編』の刊行後、すでに4年が経過し、斎宮跡の研究、とりわけ研究の基盤となる斎宮跡出土土器類の編年についての整理・検討が進められている。その詳細は第3章に記載しているが、今回の『出土遺物編』を刊行する上で生じた『遺構編』との相違点について下記のとおり明記しておく。

【斎宮跡第Ⅰ期第4段階から第Ⅱ期第1段階の整理】

奈良時代末葉から長岡京期頃にあたるものとして『報告Ⅰ』に掲載された土器編年案（以下「2000年編年」という）では、第Ⅰ期第4段階が設定されていた（以下、記述の煩雑さを避けるために、各段階を「Ⅰ-4期」「Ⅱ-3期」等と表現する）。しかし、本書第3章に示す再検討では、「2000年編年」以後の出土資料を含めてもⅠ-4期を様式内の一段階として純粋に抽出できないため、Ⅱ-1期の古い段階に統合して整理した。そのため、『遺構編』でⅠ-4期とした遺構については、Ⅱ-1期の古相、おおむね長岡京期と重複するものとして捉え直している。

【斎宮跡第Ⅳ期の整理】

「2000年編年」では、平安時代後期後葉から末葉にあたるⅢ-3期までの記述にとどまっていた。しかし、その後にはⅢ-4期が提唱されたこと⁽¹⁾や、南北朝期まで存続したとされる斎宮の実態解明には、第Ⅲ期以降の鎌倉時代に相当する時期についても、今後は取り上げていく必要があることから、第Ⅳ期以降を設定して記載した。

【各段階の細分】

今回の編年案では、試論として第Ⅰ期から第Ⅲ期までの各期をおおよそ数十年から二十五年程度の期間に細分しており、本書で紹介する土器・陶磁器についても可能な限りこの細分に準じた記述を行った。

第2節 刊行に向けての体制

平成25年度の『遺構編』以後の刊行の体制は下記の通りである。

【平成26年度】

館長 伊藤久美子 調査研究課 大川勝宏・穂積裕昌・新名強・伊藤文彦

【平成27年度】

館長 濱口尚紀 調査研究課 大川勝宏・穂積裕昌・伊藤文彦・宮原佑治

【平成28年度】

館長 濱口尚紀 調査研究課 大川勝宏・穂積裕昌・伊藤文彦・宮原佑治

【平成29年度】

館長 明石典男 調査研究課 大川勝宏・穂積裕昌・川部浩司・宮原佑治

【平成30年度】

館長 明石典男 調査研究課 大川勝宏・山中由紀子・川部浩司・宮原佑治

また、本書の刊行にいたるまで、下記の斎宮跡調査研究指導委員会の各委員から、斎宮跡調査研究に関する指導・助言を受けている。

氏名	分野	職名	在任期間
◎渡辺 寛	古代史	皇學館大学名誉教授	S54年度～H10年度、H13年度～
◎八賀 晋	考古学	三重大学名誉教授	H2年度～H27年度
鈴木 嘉吉	建築史	元奈良国立文化財研究所所長	H5年度～H27年度
所 京子	国文学	聖徳学園女子短期大学教授	H7年度～H27年度
佐々木恵介	古代史	聖心女子大学教授	H7年度～
金田 章裕	歴史地理学	京都大学名誉教授	H16年度～
増渕 徹	古代史	京都橋大学教授	H18年度～
浅野 聡	都市工学	三重大学大学院准教授	H20年度～
綿貫 友子	中世史	神戸大学大学院教授	H22年度～
稲葉 信子	文化遺産	筑波大学大学院教授	H24年度～
松村 恵司	考古学	独)奈良文化財研究所所長	H24年度～
黒田 龍二	建築史	神戸大学大学院教授	H28年度～
本橋 裕美	国文学	愛知県立大学准教授	H28年度～
小澤 毅	考古学	三重大学教授	H28年度～
京楽真帆子	女性史	滋賀県立大学教授	H30年度～

第1表 斎宮跡調査研究指導委員会委員一覧

(平成26年度以降在任の委員に限る ◎は委員長、座長経験者を表す)

註

- (1) 「Ⅱ 第143次調査」『史跡斎宮跡平成16年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2006

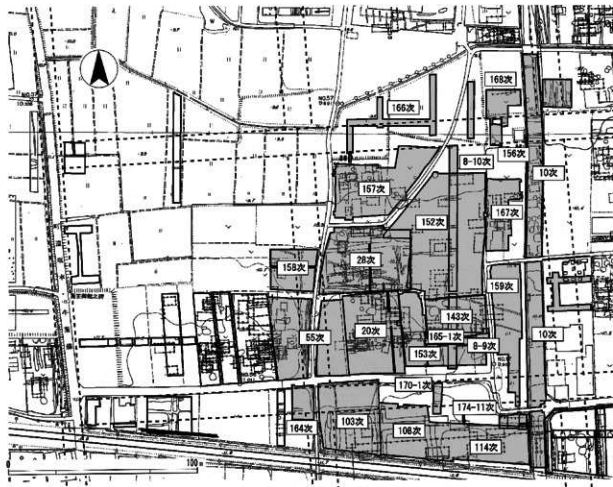
第2章 柳原区画の出土遺物

第1節 建物遺構出土の遺物

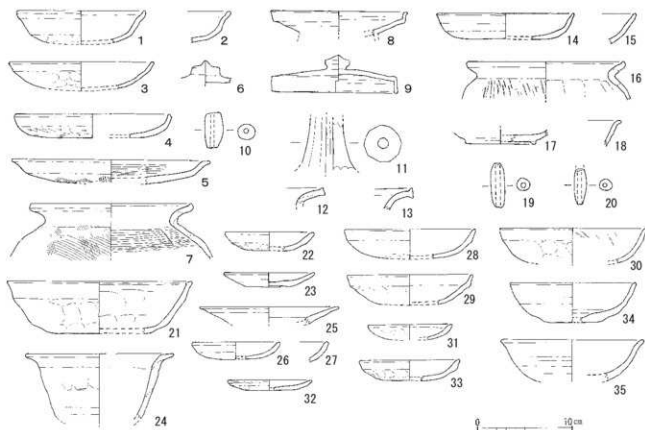
柳原区画は、既に刊行している『遺構編』において、B期とした9世紀前葉以降、四面庇付建物を正殿とし、その後の平安時代のほぼ全期を通じて、斎宮寮の「寮庁」として儀礼や饗応の場としての機能を有してきたと総括している。

本節では、「寮庁」の中核を構成した主要な建物の柱穴から出土した遺物を紹介し、それぞれの時期決定の根拠を示したい。なお、土器類の編年的区分は本書第3章を、各調査次の位置関係等は、第1図を参照されたい。

S B1080出土遺物 (1~10) 第20・153次調査で検出した、B期の西廂殿となる三面庇付建物の柱穴からの出土遺物である。S B1080は大部分が第20次に含まれ、柱穴掘形と柱痕跡の峻別が困難な上、柱穴埋土の重複関係や柱穴の底部の形状から、最低でも2回の建て替えを想定している。出土遺物は、土師器杯A(1・2)や土師器皿A1(4)はⅡ-1期新相頃の型式で、須恵器盤(8)や薬壺蓋(9)は、猿投窯の折戸10号窯式期頃のものともみられる¹¹⁾。一方、土師器椀A2(3)は、Ⅱ-3期の比較的新しい段階のものともみられる。土師器甕A(7)も、口縁端部を内側に巻き込む型式で、(3)と同時期のものと考えられる。こ



第1図 柳原区画及び周辺の調査区位置図 (1:2,000)



第2図 建物遺構出土の遺物（1：4）

S B 1080(1~10)・S B 9003(11~13)・S B 9750(14~20)・S B 9751(21~25・32)・S B 9752(26・27)・S B 9753(28~31・33~35)

れらはS B 1080建て替えの下限を示す遺物であろう。その他、II-1期中相のS H 9001から大量に出土した土錘が、S B 1080の柱穴にも混入している(10)。

S B 9003出土遺物(11~13) 第143・165-1次調査で検出した、B期の東脇殿となる東面庇付建物の柱穴出土遺物で、出土量は少ない。かろうじて図示可能な土師器高杯(11)・甕(12)と須恵器広口壺(13)を示した。高杯は脚部のみだが10面の面取りがあり、脚高も低いもので、II-1期の範疇に収まるものと推定する。

S B 9750出土遺物(14~20) 第152次調査で検出した、C期の正殿となる四面庇付建物の柱穴から出土した遺物で、土師器杯(14・15)・甕A(16)、灰釉陶器碗(17・18)、土錘(19・20)がある。灰釉陶器は角高台の碗など黒笹14号窯式期のもつとみられ、C期は承和六(839)年以降に、度会郡の離宮院に移転した斎宮が再び多気郡に戻された段階と想定しており、年代観上の餽器はないとみられる。

S B 9751出土遺物(21~25・32) 第152次調査で検出した、E期の正殿となる四面庇付建物の柱穴から出土した遺物で、土師器碗C(21)・皿D(22・32)・鉢(24)、ロクロ土師器小皿(23)、灰釉陶器段皿(25)がある。(21・22)はIII-1期の範疇に収まるものである。(25)は黒笹90号窯式から折戸53号窯式にかけてのものだろうか。なお、(24)にはにぶい黄橙色で被熱痕があり、あまり類例のない器種である。

S B 9752出土遺物(26・27) 第152次調査で検出した、F期の正殿となる四面庇付建物の柱穴から出土

した遺物で、図化できるものは少ない。土師器皿D(26・27)はいずれもⅢ-1期新相からⅢ-2期頃のものとみられる。

S B9753出土遺物(28~31・33~35) 第152次調査で検出した、G期の正殿となる、5間×2間の東西棟の柱穴から出土した遺物で、土師器杯D(28・29)・皿D(31・33)・椀C(30)、クワ土師器杯(34)、無釉陶器椀(山茶椀)(35)を図示した。(28・29)はⅢ-3期の範疇のもので、(35)は第3型式の初期山茶椀であろう。

なお、B期正殿のS B9800の時期決定にかかる遺物は第2節(1)を参照されたい。

第2節 土坑・井戸・溝の出土遺物

(1) 齋宮Ⅱ期の遺構出土遺物

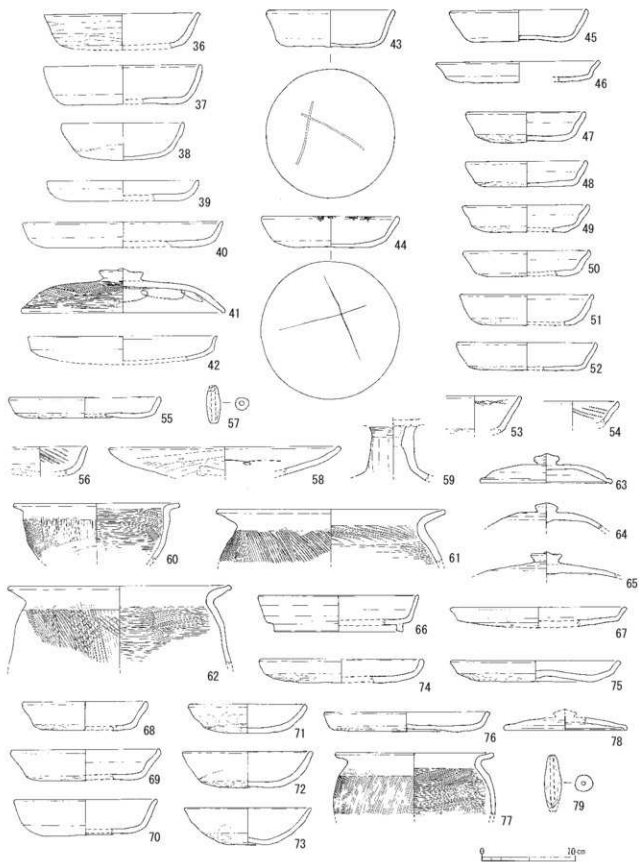
S K0541出土遺物(36~42) 第10次調査で検出した、柳原区画北東隅に位置する4.2m×3.0m、深さ0.15mの方形の土坑である。土師器杯・蓋・高杯・鉢・甕、須恵器蓋・盤・甕が出土している。土師器杯A(36・37)・杯G(38)・皿A1(39・40)・蓋(41)、須恵器無台盤(42)を図示した。(36)は外面を全面ヘラケズリしているが、(37・39・40)は口縁部全体をヨコナデ調整しており、新しい要素を持っている。共伴する(42)は鳴海32号窯などに比較的近い形態を見出すことができる。本遺構は『遺構編』ではⅠ-4期としていたが、本書第3章に示すとおり、Ⅰ-4期はⅡ-1期に統合するので、あらためてⅡ-1期古相に属するものと位置づけたい。

S E0276出土遺物(43~46) 第8-10次調査で柳原区画の中央部南寄り検出し、約2mの深さまで調査されたのち、第152次調査で底まで完掘した井戸で、遺構検出面で直径約2mの不整形円形、深さ0.3m以下で直径1.2mの円形となる。検出面からの深さは4.35mである。第152次調査で底部まで確認した際にはⅡ-1期の土師器杯A・皿A・甕などの小片のみの出土だったが、第8-9次調査では図示した土師器杯A(43~45)・皿A2(46)の完形に近い資料が出土している。(43~45)はいずれも底部から口縁部の立ち上がりが強く、口縁部をヨコナデ調整、底部をナデ調整している。『遺構編』ではⅠ-4期に分類したが、あらためてⅡ-1期古相のものとして位置づけたい。なお、(43・44)は底部外面に「×」字状の焼成後の線刻がある。

S K1079出土遺物(47~67) 第20次調査で検出した、柳原区画南西部に位置する東西5.3m、南北4.1m、深さ0.4mの大型の土坑だが、複数の土坑が重複している可能性がある。土師器杯A(47~54)・皿A(55・56)・高杯(58・59)・鉢(60)・甕C(61・62)、須恵器蓋(63~65)・杯B(66)・無台盤(67)、土錘(57)を図示した。土師器杯Aは、すべて口縁部がヨコナデ調整でやや外傾し、底部はナデ調整する。(53・54)は内面に放射状暗文・螺旋状暗文を施している。鉢(60)は体部外面下半をヘラケズリで成形し、底部が残存しないが平底の鉢になるものだろう。須恵器は、蓋(63)などの形態から折戸10号窯式に相当するものとみられ、土師器の形態とあわせてⅡ-1期中相のものと考えられる。

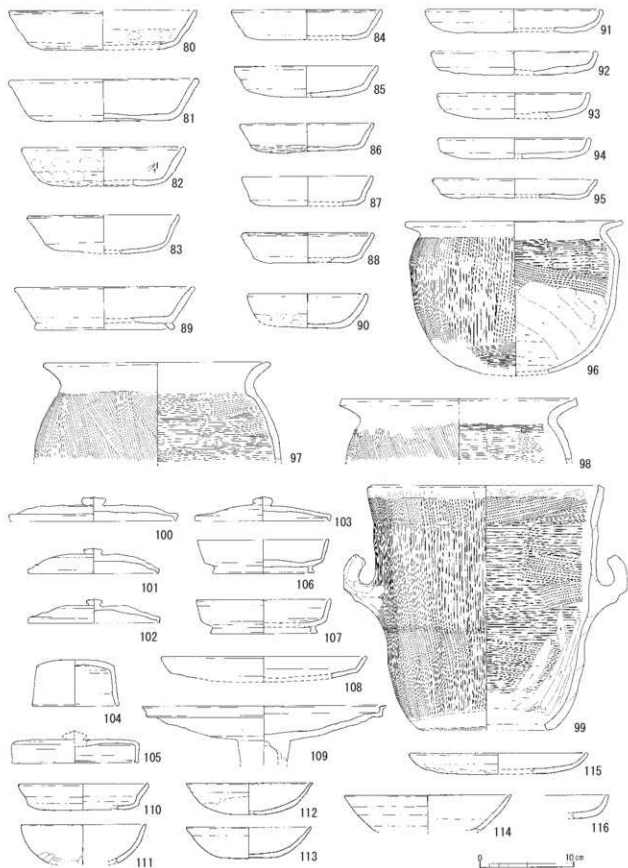
S K1377出土遺物(68~79) 第28次調査の南端で検出した、柳原区画南西部に位置する南北2.6m、東西1.8m、深さ0.3mの土坑である。土師器杯A(68~70)・椀A2(71~73)・皿A(74~76)・甕A(77)、須恵器蓋(78)、土錘(79)を図示した。いずれもⅡ-1期中相頃のものと考えられる。これら土器類の他、鉄製刀子の残欠が出土している。

S K1291出土遺物(80~109) 第28次調査区の南端で検出した、東西約6m、南北5.7m、深さ0.25mの不整形円形の大型土坑である。遺構の形状からみて複数の遺構が重複している可能性がある。整理箱2箱

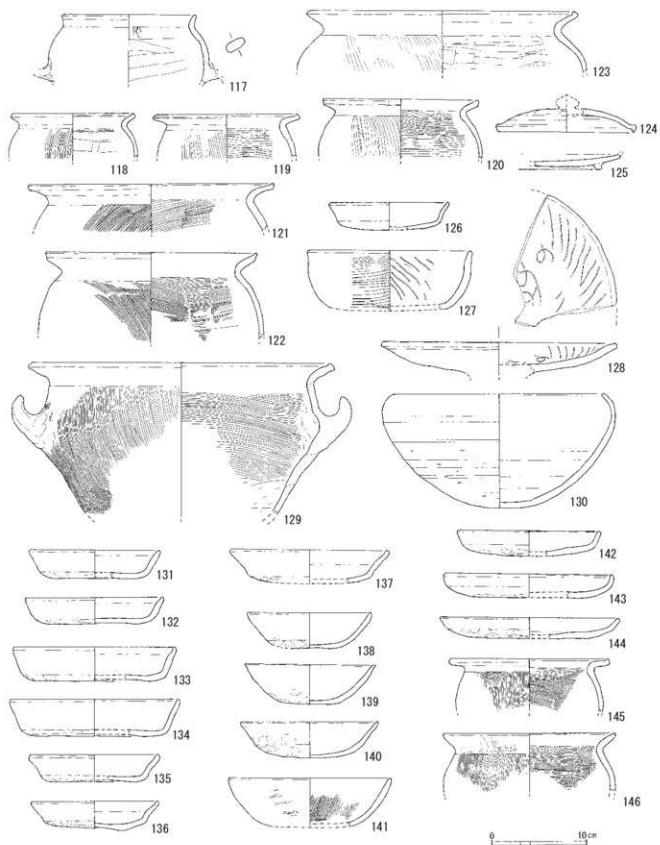


第3図 斎宮Ⅱ-1期の遺構出土遺物(1)(1:4)

S K 0541(36~42)・S E 0276(43~46)・S K 1079(47~67)・S K 1377(68~79)

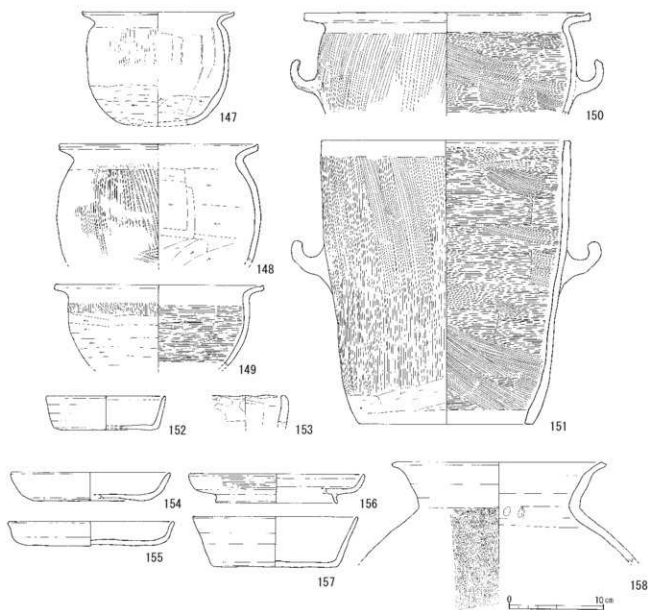


第4図 斎宮Ⅱ-1期の遺構出土遺物(2)(1:4) SK1291(80~109)・SD0535(110~116)



第5図 斎宮Ⅱ-1期の遺構出土遺物(3)(1:4)

S D0535(117~125)・S D0530(126~130)・S K0557(131~146)



第6図 斎宮Ⅱ-1期の遺構出土遺物(4)(1:4) SK0557(147~153)・SD9046(154~158)

分の土器が出土しており、土師器杯A(80~88)・杯B(89)・杯G(90)・皿A(91~95)・甕A(96~98)・瓶(99)、須恵器蓋(100~103)・双耳瓶蓋(104)・葉壺蓋(105)・杯B(106・107)・盤(108)・高杯(109)を図示した。土師器杯Aは、口径16~20cmで器高が4cm以上の大型品(80~83)と、器高が3.5cm以下で口径14~16cmの小型品(84~88)があり、さらに(80・82・86)のように底部をヘラケズリで調整するものと、(81・83~85・87・88)のようにナデ調整するものが混在する。『遺構編』ではⅠ-4期としたが、土師器杯の形状からあらためてⅡ-1期の古~中相の土器群と位置づけたい。須恵器は鳴海32号窯式から折戸10号窯式にかけてのものが混在しているようである。

SD0535出土遺物(110~125) 柳原区画の北東隅交差点となる区画道路の西側溝となる南北溝で、幅1.3m、深さ0.4mの断面が逆台形の溝である。整理箱で1.5箱分の土器類が出土している。土師器杯A(110)・碗A(111~113)・碗B(114)・皿A(115・116)・葉壺(117)・甕A(118~120・122)・甕C(121)・

鍋A(123)、須恵器蓋(124)・杯B(125)を図示した。(112・113)のような土師器椀A2はⅡ-1期古相から出現し、中相になって定着する新器種で、長岡京期に併行して成立すると考えられている。土師器皿(115)の器高が減じ低平化が進んでいることから、Ⅱ-1期の古相から新相までの土器が混在していると考えられる。

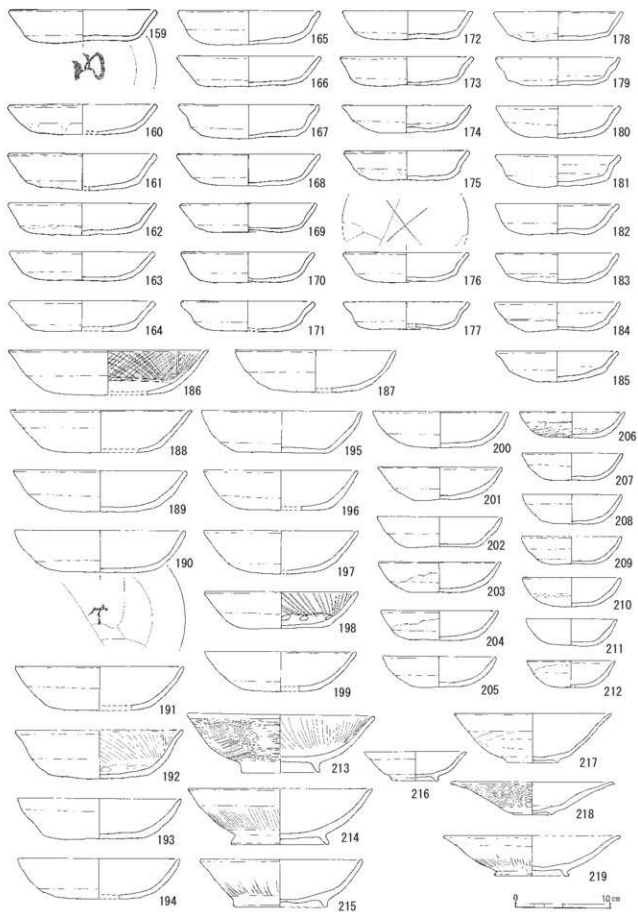
S D0530出土遺物(126~130) S D0530と同様、柳原区画の北東隅交差点部分の、区画道路の南側溝になる東西溝で、幅1.2~1.7m、深さ0.4~0.5mの断面が逆台形の溝である。整理箱で0.5箱分の土器類が出土した。土師器杯A(126)はⅡ-1期新相の形態だが、(130)はいわゆる鉄鉢形で、奈良時代後期にまで遡りうる形態である⁽³⁷⁾。S D0530全体ではS D0535同様、Ⅱ-1期の古相から新相までの時間幅が考えられる。(130)については、出土状況を示す記録はないが、ほぼ完形で、溝の遺構内に溝とは別の埋納のための掘形などは調査写真から看取できないため、溝そのものに伴うとみられ、意図的な埋納が考えられる⁽³⁸⁾。

S K0557出土遺物(131~153) 第10次調査で検出した、柳原区画東辺のほぼ中央に位置する、南北4.3m、深さ0.2mで、東辺は調査区外に続くものの、東西も南北とほぼ同規模の方形とみられる土坑である。堅穴建物の可能性もあるが、『遺構編』では土坑と分類した。整理箱で1.5箱分の土器類が出土している。土師器杯A(131~137)・椀A2(138~140)・椀A1(141)・皿A(142~144)・甕A(145~148)・鉢(149)・鍋B(150)・甕(151)、須恵器杯A(152)、志摩式製塩土器(153)を図示した。その他には、土師器椀B・高杯、須恵器蓋・盤・甕・壺がある。土師器杯Aは、口縁部の立ち上がりが高く、底部をヘラケズリするような(133・134)や、器壁が薄くなり口縁部の外縁化が進む(135~137)と、その中間的な(131・132)が混在する。須恵器杯A(152)は折戸10号窯式期のものだろうか。出土土器はⅡ-1期の古相から新相までを含むとみられる。

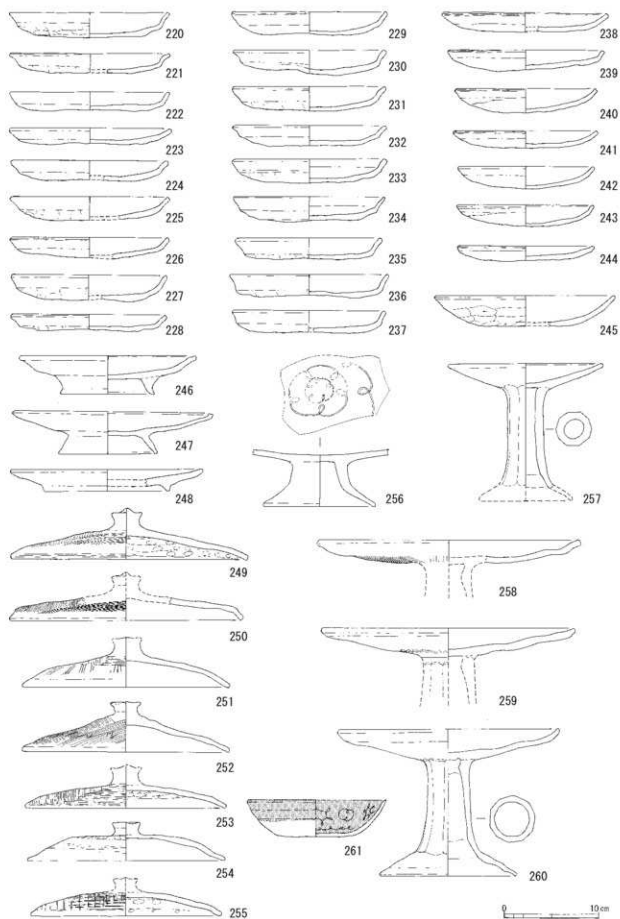
S D9046出土遺物(154~158) 第143・152・165-1次調査で検出した、柳原区画南東部に位置する幅0.8~1.0m、深さ0.3mの断面形が緩い逆台形になる溝である。出土遺物は少ないが、B期正殿のS B9800の柱穴に埋土が掘り込まれており、S B9800の時期決定上、重要な遺構である。土師器杯A(154)・皿A2(155)・皿B(156)、須恵器杯A(157)・甕(158)を図示した。(154)は底部外面をヘラケズリし、(156)は、内外面をヘラミガキする。これらはⅠ-3期新相頃のものの混入かもしれない。一方、須恵器杯A(157)は折戸10号窯式期のものとみられ、S D9046は『遺構編』ではⅠ-4期からⅡ-1期としたが、Ⅰ-3期新相からⅡ-1期に改めて位置づけたい。S B9800は、延暦二十二(803)年頃から天長元(824)年頃までに時期比定しており、矛盾は生じない。

S K1045出土遺物(159~285) 第20次調査で検出した、B期寮庁の西脇殿S B1080の北西脇に位置する大量の土器を廃棄した土坑で、「2000年編年」におけるⅡ-2期の基準資料である。『報告Ⅰ』でも紹介されているが、若干資料を追加して再掲する。東西4.0m、南北3.2m、深さ0.8mの大型の土坑で、地面からほぼ垂直に掘り込まれた形状をしている。これと同様のものに第152次調査のS K9785・9786のように同期の正殿S B9800の柱穴を壊す土坑があげられる。整理箱で40箱という大量の土器類・鉄製品・炭化材が出土している。土師器杯A(159~185)・椀A2(186~212)・椀B(213~219)・皿A(220~245)・皿B(246~248)・蓋(249~255)・高杯(256~260)・甕A(262・263)・甕C(264)・鍋A(265)・鍋B(268)・盤B(266・267)、黒色土器A類杯(261)、須恵器杯A(269~271)・杯B(272~274)・蓋(275~278)・壺L(279・280)・甕(285)、灰軸陶器皿(282・283)・風字硯(284)、緑軸陶器皿(281)を図示した。

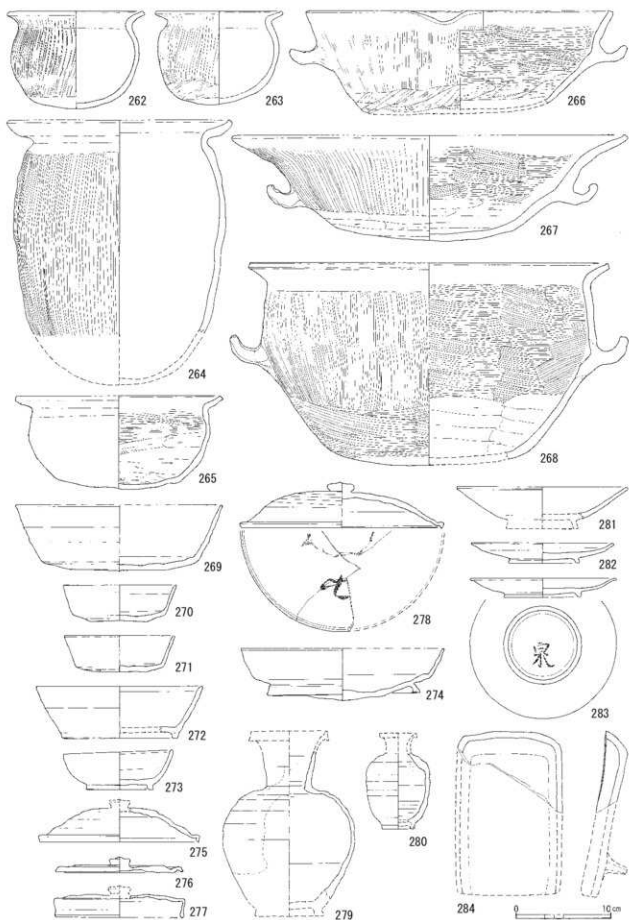
土師器杯Aは、口径12.8~15.6cmの幅があるが、口径14.5cm以上の大型品(159~169)と、それ以下の



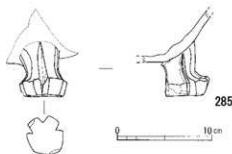
第7図 斎宮Ⅱ-2期の遺構出土遺物(1)(1:4) SK1045(159~219)



第8図 斎宮Ⅱ-2期の遺構出土遺物(2)(1:4) SK1045(220~261)



第9図 斎宮Ⅱ-2期の遺構出土遺物(3)(1:4) SK1045(262~284)



第10図 斎宮Ⅱ-2期の遺構出土遺物(4)
(1:4)

S K 1045(262~284)

小型品(170~185)に、椀A2は口径11.8~21.2cmの幅があり、口径16cm以上の大型品(186~199)とそれ以下の小型品(200~212)に分類できそうである。

S K 1045には精良な胎土で橙色の土師器が多く、台付椀(217~219)や蓋(249~255)のように、同時期の他の遺構ではあまり見られない器種を含んでいる。『報告Ⅰ』での破片数のカウントで土師器の割合は約94%、須恵器・灰軸陶器が約6%となっている。一方、大量の土器が出土した、「内院」鍛冶山西区画のⅡ-3期のS K 2650(44次)では、多彩な施軸陶器等を含みながらも土師器片の割合が約99.6%、官衙城の東加

座区画にあるⅡ-2期のS K 5200(77次)で土師器は約98%、西加座南区画のⅡ-1期のS K 1445(34次)で約98%となっており、S K 1045出土土器は、方格地割の他の区画の土器の大量出土土坑と比べて陶器の割合が高いといえる。具体的な破片数は計測していないが、第152次調査のⅡ-1~2期のS K 9785・9786でも須恵器の出土が目立っている。また、これらの陶器は杯・椀・蓋・高杯などの供膳具が多く、貯蔵具は稀である。こうした状況は、『遺構編』における柳原区画のB期~E期にかけての区画の性格を反映し、「寮庁」での儀礼・饗応に供されたのち廃棄されたものと言えるのではないだろうか。S K 1045からは緑軸陶器も2片出土しているが、これは黒笹90号窯式期のものとみられ、混入と考えられる。S K 1045の土器は、B期寮庁が天長元(824)年以降、斎宮が度会郡の離宮院に移転する前後に廃棄された一群と考えている。

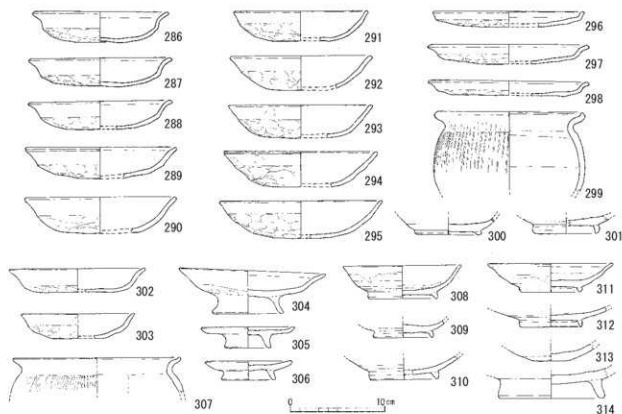
S K 1354出土遺物(286~301) 第28次調査区の中央付近で検出した、南北1.8m、深さ0.25mの楕円形土坑からの出土遺物である。土師器杯A(286~290)・椀A2(291~295)・皿A2(296~298)・甕A(299)、灰軸陶器椀(300・301)を図示した。『遺構編』ではⅡ-2~3期に位置付けているが、土師器供膳具類の形態から、Ⅱ-3期の中相を中心とした時期のものとみられる。相伴する灰軸陶器椀には、角高台のものや三日月高台のものがある。

S E 1295出土遺物(302~314) 第28次調査の北西隅で検出した、東西2.5m、南北2.2mの不整円形の素掘りの井戸である。他の井戸の配置から、開鑿はⅠ-4期まで遡るものと推定しているが、遺構面から約1mの深さまでしか調査しておらず、今回図示した土器群は、井戸の最終埋没時の一括資料とみられる。土師器杯A(302・303)・台付杯(304)・台付小皿(305・306)・甕A(307)、須恵器椀(313)・台付鉢(314)、灰軸陶器椀(308~310)・皿(311・312)を図示した。杯A(302)は口径が14.2cmあり、底部も平たく、Ⅱ-3期の特徴をとどめるが、小型化した(303)や、折戸53号窯式に属する形態の灰軸陶器類も相伴することから、S E 1295の埋没はⅡ-4期に位置づけられるとみられる。

柳原区画では、既報告分をあわせてもⅡ-3~4期も良好な資料が乏しいようである。

(2) 斎宮Ⅲ期の遺構出土遺物

S K 1297出土遺物(315~331) 第28次調査の北西隅で検出した、東西1.8m、南北2.2m、深さ0.4mの不整円形の土坑である。土師器杯D(317)・皿D(315・316)・台付小皿(318~320)・高杯(321)・長頸壺(322)・台付鉢(323)・短頸壺(324)、ロクロ土師器小型杯(325・326)・台付皿(330)、灰軸陶器椀(327~



第11図 斎宮Ⅱ・3・4期の遺構出土遺物（1：4）SK1354(286～301)・SE1295(302～314)

329)、鞆羽杯(331)を図示した。(322)は高杯の可能性もある。共伴する灰軸陶器には、やや腰高の東山72号窯式相当のものが出土しているが、杯D(317)は底部の丸みが強く、Ⅲ-1期でも比較的新しい形態と考えられるとともに、(325・326)のような柱状高台のロクロ土師器はⅢ-2期以降に出現すると考えられる。『遺構編』ではⅢ-1期に区分したが、出土土器には混入の可能性も含めてⅢ-1期新相～Ⅲ-2期の比較的古い段階までの幅が想定される。

SK1048出土遺物(332～364) 第20次調査区の北西隅で検出した、東西2.3m、南北2.3m、深さ0.3mの不整円形土坑である。土器類と金属製熨斗、炭化材が整理箱2箱分出土している。土師器皿D(332～344)・杯D(345・346)・椀C(347)・台付皿(348～350)・台付椀(351)・小型の短頸壺(352)、ロクロ土師器杯(353～355)・台付小皿(356)・台付杯(357)・台付椀(358～360)、灰軸陶器椀(361)、志摩式製塩土器(362・363)、金属製熨斗(364)を図示した。この他にも黒色土器片・緑軸陶器片が混入している。土師器杯Dと皿Dは器形の上ではほぼ同じで、規格の上でも明確な差は無いように見え、Ⅲ-1期新相以降のものと考えられる。製塩土器は小片で、Ⅱ期の破片が混入したのもだろう。金属製熨斗は火皿部が青銅製、柄部が鉄製で、火皿の大部分を欠失している。柄部は三本の錐で固定されており、幅2.4cm、先端にいくと幅1.2cmとなり、木製などの柄が装着されていたものとみられる。金属製熨斗は現時点で全国に16例が知られており、古墳出土のものを除くと、東日本の平安時代の竪穴建物からの出土が多い。熨斗は所謂アイロンとして衣服の調製に用いられたと考えられるほか、『大鏡』第三巻では、太政大臣藤原兼通の寝具を温めるために用いたという記事があり、柳原区画の性格を考える上で示唆に富む。¹⁴⁾

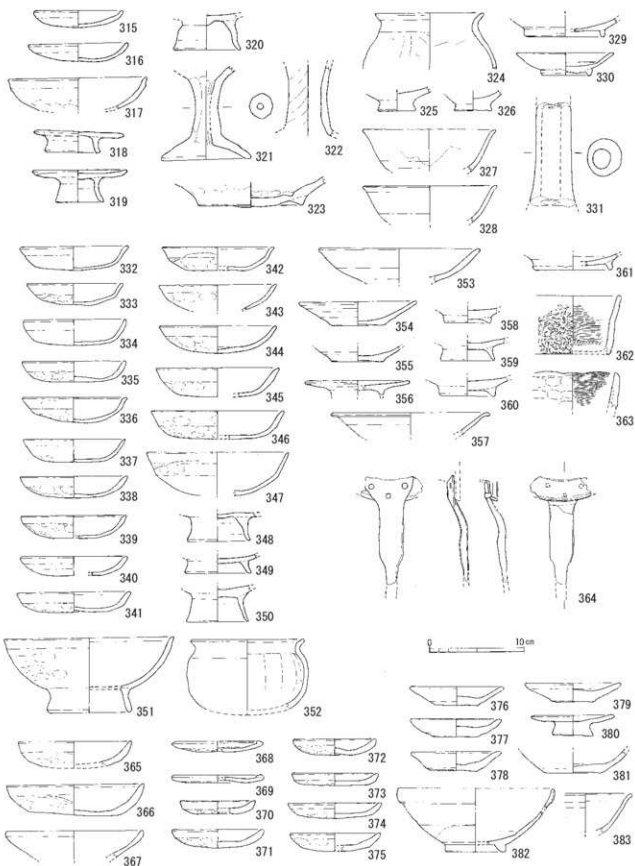
SK1071出土遺物(365~383) 第20次調査の中央やや南寄りで検出した、東西1.4m、南北1.61m、深さ0.25mの楕円形土坑である。土師器杯D(365・366)・皿(368~375)、ロクロ土師器杯(367)・小皿(376~379)・小型杯(380)・杯(381)、白磁碗(382)、無釉陶器碗(383)を図示した。土師器類は、「2000年編年」でⅢ-2期の基準資料とされたSK1074の出土資料とほぼ同形式とみられ、Ⅲ-2期中相以降に位置づけられる。

これらの土師器皿のうち、(368・369)は京都系の所謂「コースター形」の皿を写したものである。「コースター形」の土師器皿は、平安京の土器編年では京V中頃から底部が完全に平坦なものが現れるが、(368・369)のように口縁部を強く内側に折り返すものは京V新段階頃に現れ、11世紀半ばから第3四半期の年代観が与えられている。また、玉縁口縁の白磁碗(382)は、大宰府での分類で白磁XI類に該当するものとみられる。XI類の白磁は、大宰府では10世紀後半から11世紀半ばの標準資料とされ、SK1071出土土器にも11世紀第3四半期を中心とした年代が付与できると考えられる⁽⁵⁾。

SK1074出土遺物(384~432) 第20次調査区の南東隅近くで検出した、東西1.4m、南北1.6m、深さ0.3mの楕円形土坑で、整理箱5箱分の土器類が出土している。「2000年編年」においてⅢ-2期の基準資料とされた土器群である。『報告I』に報告されたものに未報告資料を加えて、土師器碗C(384~389)・皿D(390~396)・杯D(397・398)・台付小皿(399・400)・台付皿(401)・台付碗(402・403)・甕(404・405)、ロクロ土師器小皿(406~409)・台付小皿(410)・小型杯(411~414)・碗B(415)、須恵器甕(416)・鉢(417・418)、灰釉陶器台付鉢(419)・碗(420~426・429)・壺(430・431)・甕(432)、無釉陶器碗(山茶碗)(427・428)を図示した。土師器杯Dの割合が少ない一方、『報告I』でのカウントでも灰釉陶器の出土破片数が全体の60%以上を占めることが知られ、壺類や、他に類例をみない植木鉢状の鉢を伴うことから、特殊な性格を持つ土器群とも考えられる。しかしながら、他の時期の混入は比較的少なく、Ⅲ-2期中相の良好な一括資料である。共存する灰釉陶器は百代寺窯式の碗・深碗で、無釉陶器碗(山茶碗)は第2形式の初期山茶碗である。

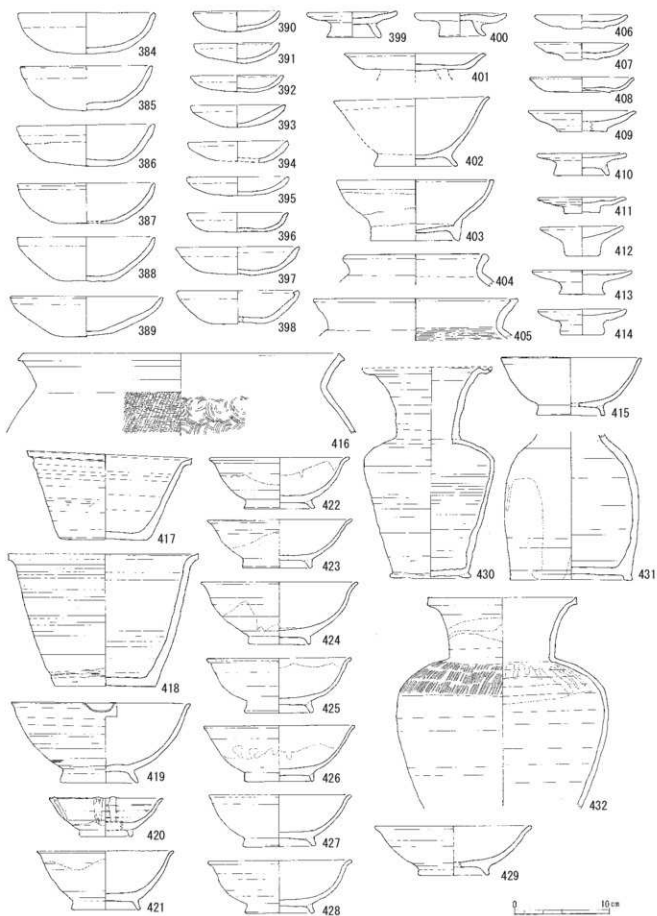
SK0555出土遺物(433~665) 第10次調査で検出した、柳原区画の東辺中央付近に位置する東西2.6m、南北2.4m、深さ0.3mの略円形の土坑である。周辺には同時期の土坑が10基以上密集しているが、まとまった量の出土遺物があるのはSK0555のみである。特に大きな土坑ではないが、整理箱で15箱と圧倒的な出土量となっている。ほぼ皿化した土師器杯D(433~478)・皿(479・480)・碗(481・482)・皿D(483~584)・台付小皿(585~593)・蓋(594・595)・器台あるいは高杯(596~601)、ロクロ土師器杯(602~609)・皿(610)・小皿(611~647)・台付小皿(648~651)・台付杯(652)・短頸壺(653)、土師器甕ないしは鍋(654~657)、土師質土器の盤(658~660)、無釉陶器短頸壺(661)・碗(山茶碗)(662~664)、青磁碗(665)を図示した。その他図示していないが、輪羽口片や鉄片、混入とみられるⅡ期の土器が出土している。

土師器杯Dは、口縁が外傾し、口縁端部が肥厚するⅢ-3期にみられる傾向のもの(433~441)と、口縁端部がやや内湾気味で、先端をヨコナデで尖らせる傾向のもの(442~478)に分けられる。後者には底部を平坦に作るものも多く、Ⅳ期以降の中世的な皿に転換していく過渡的な様相を示していることから、Ⅲ-4期に位置づけられるものと考えられる。杯Dは口径13.1~15.7cm、口径を器高で割った径高指数は0.20となり、同時期の他の土器群とほぼ同じ値となっている。SK0555からはⅢ-4期の終わり頃の遺構としてはロクロ土師器の出土量も多い。斎宮跡では、Ⅲ期終焉後にはロクロ土師器の出土が急速に減少・消失することが知られている。また、外面をへら状工具でケズリ調整する耳皿状の土師器小皿

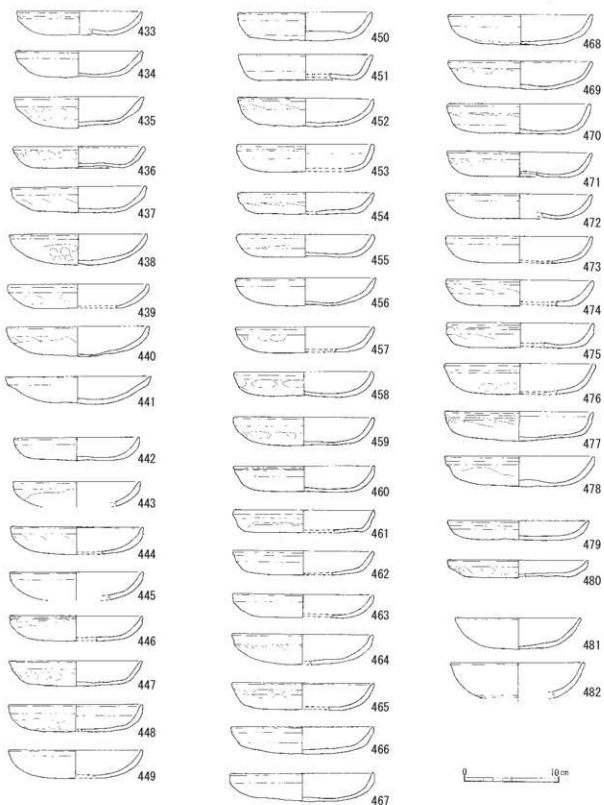


第12図 斎宮Ⅲ-1~3期の遺構出土遺物(1:4)

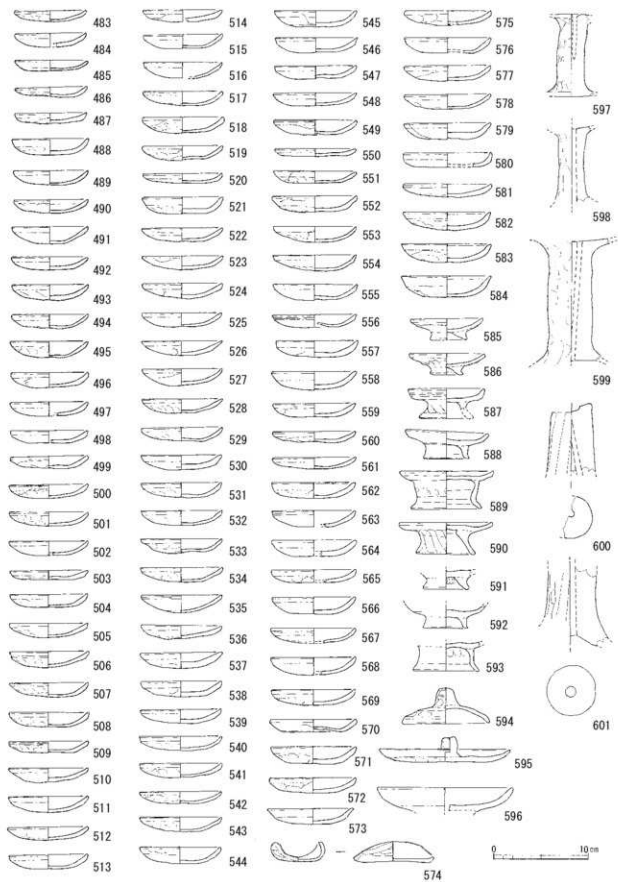
S K 1297(315~331)・S K 1048(332~364)・S K 1071(365~383)



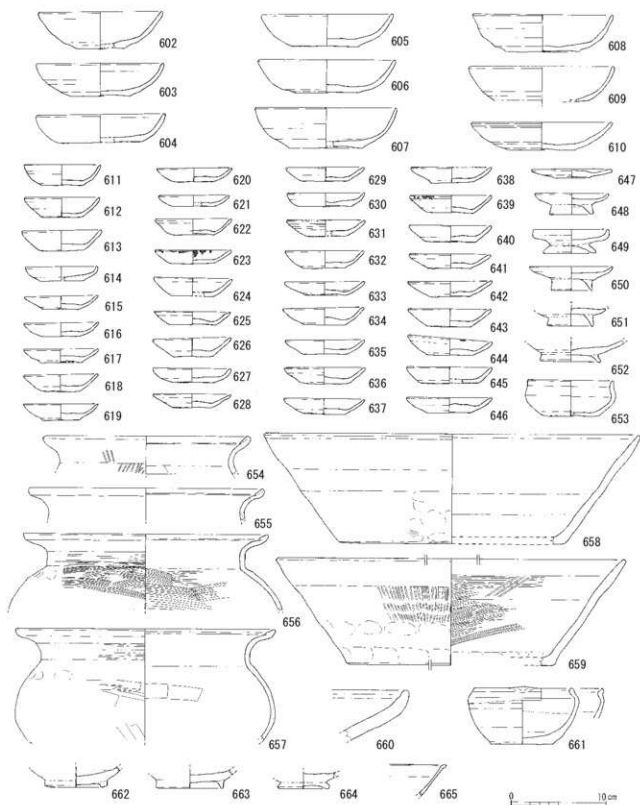
第13図 斎宮Ⅲ-3期の遺構出土遺物（1：4） S K1074(384～432) (416・432は1：6)



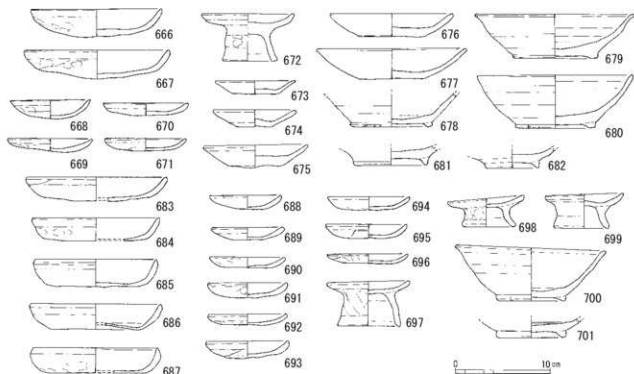
第14図 斎宮Ⅲ-4期の遺構出土遺物(1)(1:4) SK0555(433~482)



第15図 斎宮Ⅲ-4期の遺構出土遺物(2)(1:4) SK0555(483~601)



第16図 斎宮Ⅲ-4期の遺構出土遺物(3)(1:4) SK0555(602~665)



第17図 斎宮Ⅲ-3期・Ⅳ-1期の遺構出土遺物(1:4) SK0547(666~682)・SK0549(683~701)

(574)や、土師器蓋類(594・595)、土師質土器の大型の盤(658~660)など、この時期の類例は少なく、用途が不明な器形もみられる。共存する土師器鉢は、南伊勢系鉢の第1段階a・b型式に、山茶碗は高台の形状から第4~5型式に相当するとみられる。これらのことからSK0555は12世紀後葉から13世紀初頃にかけてのⅢ-4期の良好な資料と考えられる。

SK0547出土遺物(666~682) 第10次調査で、SK0555の北約14mの地点で検出した南北約5.6mの土坑である。調査区東壁沿いでの検出で、東西長や深さはわからない。平面形から複数の遺構が重複している可能性がある。土師器杯D(666・667)・皿D(668~671)・台付小皿(672)、ロクロ土師器小皿(673~675)・杯(676・677)、無釉陶器碗(山茶碗)(678~682)を図示した。山茶碗は渥美系の第1段階2型式に相当するとみられ、SK0547出土土器はⅢ-3期新相からⅢ-4期にかけての幅が考えられる。

(3) 斎宮Ⅳ期の遺構出土遺物

SK0549出土遺物(683~701) 第10次調査で検出した、SK0547のすぐ南に位置する東西2.0m、南北3.3m、深さ0.25mの隅丸長方形の土坑である。整理箱で1.5箱分の土器類が出土している。皿(683~687)・小皿(688~696)・台付小皿(697~699)、無釉陶器碗(山茶碗)(700・701)を図示した。土師器皿は口径が12.8~13.6cmと、Ⅲ-4期としたSK0555の資料と比べて小径化している。口縁端部の内凹化も顕著で、SK0555の資料と比べると後出的なものと考えられることからⅣ-1期に位置づけた。共存する山茶碗は第5~6型式のものであることもこれを裏付けている。

第3節 柳原区画を特徴づける遺物

(1) 緑釉陶器・貿易陶磁(702~720)

緑釉陶器は微細な破片も含めると、柳原区画全体で500片以上出土している。しかし、区画の約80%の面積の調査達成率を考えると、「内院」である鍛冶山西区画や「神殿」の可能性のある西加座南区画・「寮庫」の西加座南区画など、近隣区画と比べても決して多くなく、また優品と言える資料も少ない。その中で第167次調査のS K 10230出土の(702)は、猿投窯の黒笹14号窯式の段階の、内外面に陰刻花文を施した優品である。現在類似の資料は斎宮跡ではS D 0337(9-1次)とS K 2650(44次)出土資料の2点のみである。⁽⁷⁾(703)は香炉等の蓋とみられ、外面に陰刻で文様を表す。

緑釉陶器に比べ、貿易陶磁は多い。(704)は、柳原区画北西部の第157次調査で出土した唐三彩の椀で、黄白色で軟質の素地に緑白黄の釉が施されている。越州窯系青磁(705~707)はいずれも椀で、見込みみに珪砂の目跡が残るが、いずれも緻密な磁胎を持ち茶緑色に良好に発色したもので、大宰府での区分でI類に分類される。第153・157・159次調査と、区画内でも様々な地点で出土している。また、(705)は折戸53号窯式の灰釉陶器椀が共伴し、10世紀前半に位置づけられる。白磁椀(708~713)は薄手の器壁に透明感のある釉が施されており、内面に緻密な劃花文を持つもの(711)や外面に削出して蓮弁を表現したもの(712)がある。大宰府分類のXI類あるいはそれに併行する時期の資料であろう。その他、白磁II・IV・V類の、国内に大量に貿易陶磁がもたらされる段階に位置づけられるもの(714~719)も多い。(720)は第143次で出土した龍泉窯系青磁の小椀である。斎宮のIV-2期に位置づけられる。

(2) 硯(284・721~729)

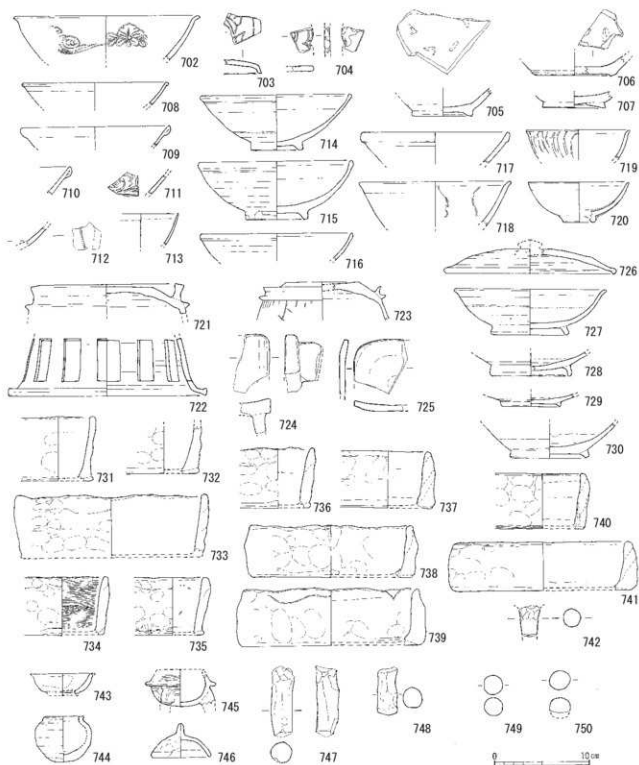
定型硯として、須志器円面硯(721~723)、灰釉陶器風字硯(284・724)・猿面硯(725)がある。(721)はII-2~3期のS K 9818から、(722)はII-1期のS H 9001から、硯(284)はII-2期のS K 1045からの出土である。その他、明らかに転用硯として使用されたとみられるものとして、須志器蓋(726)、灰釉陶器椀(727~729)を挙げたが、柳原区画全体で見ても出土量は少ない。⁽⁸⁾

(3) 製塩土器(153・362・363・731~742)

柳原区画全体で出土したものは、大部分が細片となっているが、比較的元の形状を復元できるものを図示した。山本雅靖氏の形態分類でみると、粘土輪積み手法で口縁部が外傾するAⅢ類(731~736・740)、粘土板一枚作りで胴外面の上部が内湾するBⅢ類(739)、粘土板一枚作りで、口縁部に粘土紐を張り付けるC類(738)に区分でき、それ以外は不明である。(732)がII-1期中相のS H 9001から出土している他はII-3期の土坑から出土したものが多く、(742)は知多式製塩土器の脚部片とみられる。

(4) 小型模造品(743~746)

(743)は第143次調査の包含層から出土した二彩陶器の椀で、軟質の素地に黄色と白色の釉が施されている。(744)は第159次調査の包含層から出土した無釉陶器の短頸壺、(745)は第143次調査の包含層から出土した瓦質土器の三足羽釜、(746)は第143次調査の表土から出土した土師器蓋である。東隣の西加座南区画では大量の小型高杯などが出土しているのに比べ、柳原区画における小型模造品の出土量は少ない。⁽⁹⁾



第18図 綠釉陶器・質易陶磁・硯・製埴土器・小型模造品（1：4）

(5) 墨書土器(159・190・278・283・751~770)・刻書土器類(43・44・176・771~780)

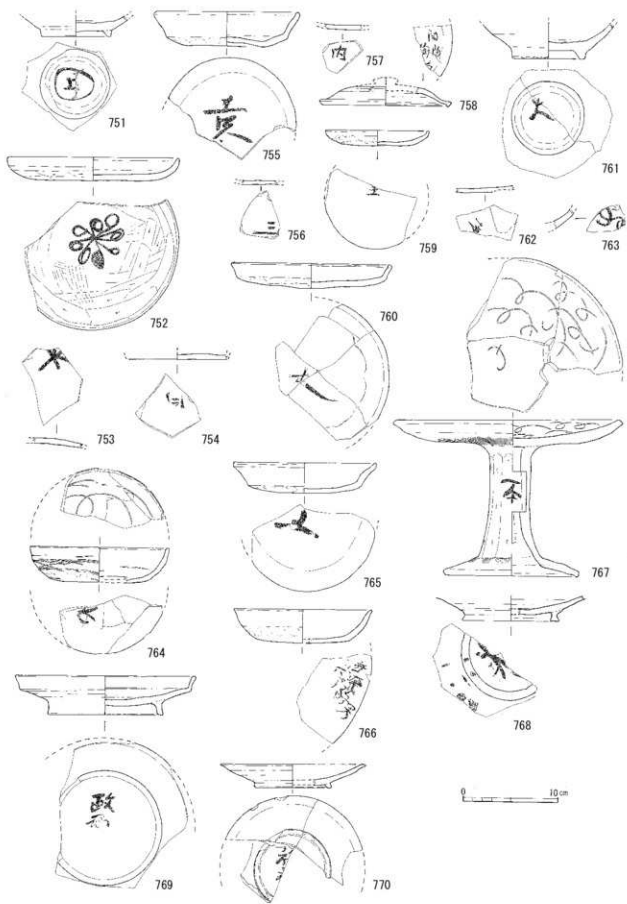
調査次別にみていく。(751)は第10次調査で出土した無釉陶器碗(山茶碗)で、○の中に「上」と墨書する。(752~754)は第143次調査のもので、(752)は土師器皿A1の底部外面に蕨手状の文様を放射状に描く。(755~763)は第152次調査のもので、土師器片に「内」(757)や「三」(756)、「御」あるいは「佛」(762)を墨書したものを以外は明確に判読できない。第153次調査の(760)も土師器皿A2の外面に、第157次調査の(764)も土師器碗A1に漢字とみられる墨書があるが判読できない。第156次調査のSK9689は、柳原区画の北辺区画道路上に掘られたⅡ-2期古相の土器を主体とするが、多数の墨書土器を含んでいる。(765)は土師器杯Aの底部外面に「上」と書いた可能性がある。(766)は土師器碗A1の外面に多数の文字が墨書され、そのいくつかが「奉」「子」と判読できる。(767)は土師器高杯の脚部に「奉」ないしは「本」を、(768)は須恵器盤の外面に「謹」を2か所、高台内側にも漢字を墨書する。第159次調査の(769)はⅡ-2期のSK10108から出土した須恵器盤で、底部に「政口」の墨書がある。「政所」であろうか。(770)は灰釉陶器皿の高台内側に示偏の漢字を墨書する。その他、SK1045から土師器杯の底部外面に「内」あるいは「門」と書いたもの(159)や、須恵器蓋の内面に「九」の可能性のある文字を書いたもの(278)、灰釉陶器皿の底部に「泉」と墨書したもの(283)がある。斎宮の官衙の存在を示す官司名墨書土器は、東の西加座南区画で「官」「府」「大炊」「目代」「少允殿」「寮加」、西加座北区画で「水部」「厨」、北の下園東区画で「殿部」、南東の鍛冶山西区画で「殿」「膳」といった斎宮寮や寮の司などに関連するものがみられるが、柳原区画では第159次調査の「政口」に可能性のあるのみで、区画の性格を明確に示す墨書土器は出土していない。

次に刻書土器類をみると、いずれも記号状のもので、「#」ないしは九字呪法に関連する可能性のあるもの(ドーマン)として(771・775・776・779)がある。その他、「×」あるいは「*」状になるものとして、(777・778)や、SE0276の(43・44)、SK1045の(176)がある。これらは、一種の魔除けに関連する可能性があり、これまでも史跡内の各地で多量に出土している⁽¹¹⁾。(780)は須恵器杯Bの底部に「寶」とみられる文字が印刻されている。

(6) 金属製品・金属関連遺物(364・781~799)

図示できるものは少ないが、第20・143・152次調査等、区画の南部を中心に釘頭⁽¹²⁾の残欠が多量に出土している。第143次調査出土の(781・782)は鉄製鎌で、包含層や表土からの出土だが、形状から古代末期から中世にかけてのものではないかと考えられる。特に(781)は刃の基部を折り返しており、同様の例として斎宮跡では第71次調査や松阪市東沖遺跡⁽¹³⁾からも鎌を数回折り返したものが出土している。他にも津市芸濃町の松山遺跡では刀子や鎌を折り返したものが出土しており⁽¹⁴⁾、いずれも鉄の再加工のための地金とみられている。柳原区画では、金属の冶金や加工に関連するものとして、第20次調査でⅡ-2期のSK1056から輪羽口(799)が、Ⅲ-2期以降のSK1074から鍛冶炉の炉壁とみられる被熱した土塊(798)が出土している他、図示していないが、鋳型等に用いられる真土が第20・143・152次調査など柳原区画の外周的な地点で出土している。柳原区画内では、第157次調査のSK9941が長径1.0m、短径0.35m、深さ約0.1mの舟底状を呈する土坑で被熱痕があり、炭片や焼土片を伴っている事から炉跡と考えられている。こうした小規模な冶金ないしは鍛冶が、区画内の建物造営に伴って行われていた可能性がある。

この他、金属製品としては、第20次調査SK1048出土の熨斗(364)、第143次調査包含層出土の鉄鎌



第19图 墨書土器 (1:4)

(783)、第153次S E 9835出土の火打金(784)、第159次調査出土の銅製精尻(785)、第157次調査の真鍮製(785)、第167次調査の鉛製の不明品(787)がある。

(7) 石製品(800~803)

(800)は紡錘車で、緑灰色の石材によるものである。第167次調査の包含層からの出土で、東の西加座地区や北の下園地区では墳丘が削平された古墳が見つかり、古墳時代までさかのぼる可能性がある。(801・802)は基石とみられる白色の丸石である。(801)はⅡ-1期の第159次調査S D 9907から出土している。同様の丸石は南接する牛葉東区画のⅢ期の遺構から多数出土している。(803)は第8-10次調査で出土した石帯の丸軀で、淡灰黄色の石材を用いている。

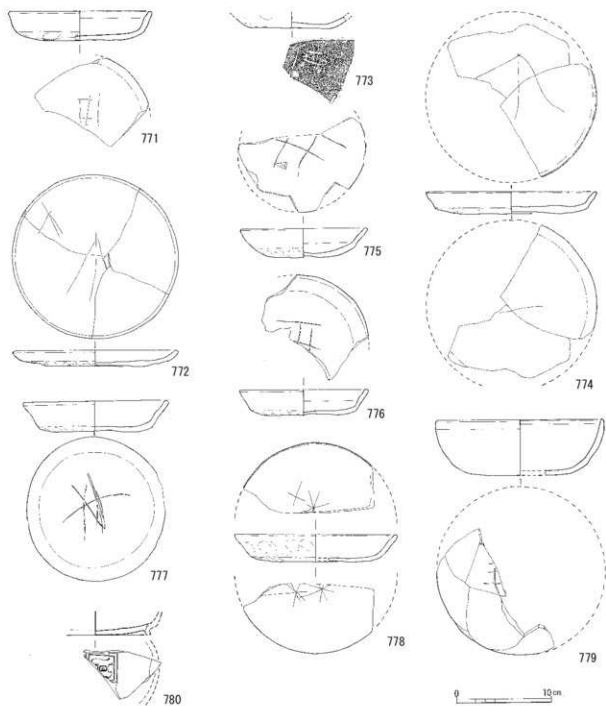
(8) その他の遺物(730・747~750)

(730)は第157次調査の攪乱溝から出土した山茶碗で、内面に漆とみられる黒色の付着物がある。

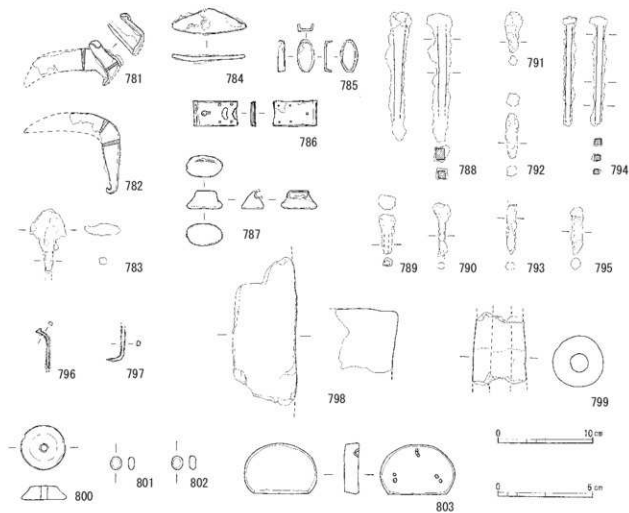
(747・748)は土師質の土製品で、土馬の可能性はある。(749・750)も土師質で中実の土玉状を呈するが、用途等は不明である。

註

- 1) 斎宮跡出土土器の他地域との併行関係を示す上で、東海地方の窯業地と、近畿地方中核部の都城の編年、貿易陶磁の分類は下記を参照した。
 - ・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』愛知県 2015
 - ・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県 2007
 - ・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県 2012
 - ・古代の土器研究会編『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』1992
 - ・小森俊寛『京から出土する土器の編年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7~19世紀—』京都編集工房 2005
 - ・伊藤裕偉「中世伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol.1 三重県史文化研究会 1990
 - ・太宰府市教育委員会編『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』2000
- 2) 堀大介「鉢を模倣した須恵器について」『同志社大学歴史資料館館報 第3号』同志社大学歴史資料館 2000
- 3) 大川勝宏「研究ノート 斎宮跡で出土する瓦鉢類について—斎宮における仏教的要素への視点の形成—」『斎宮歴史博物館研究紀要二十一』斎宮歴史博物館 2013
- 4) 大川勝宏「斎宮跡出土の金属製熨斗」『斎宮歴史博物館研究紀要二十六』斎宮歴史博物館 2017
- 5) 大川勝宏「斎宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究」『斎宮歴史博物館研究紀要十九』斎宮歴史博物館 2011
- 6) 大川勝宏「5 斎宮跡の施軸陶器」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施軸陶器—』古代の土器研究会 1994
- 7) 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘資料選Ⅱ』2010
- 8) 例えば、柳原区画の近隣では、一区画あたりの調査率は低いにも関わらず、少なくとも西加座南区画で12点、西加座北区画で9点、牛葉東区画で21点、鍛冶山西区画で11点の定型磁器が確認されている。
- 9) 山本雅晴「志摩式製塩土器考」『考古学論集 第3集』考古学を学ぶ会 1990
- 10) 大川勝宏「斎宮跡の祭祀と出土遺物」『三重県史 資料編 考古2』三重県 2008
- 11) 前掲(10)
- 12) 三重県埋蔵文化財センター編『下茅原遺跡(第1次・第2次)、東沖遺跡発掘調査報告』2009
- 13) 三重県埋蔵文化財センター 大川操氏のご教示による



第20圖 刻書土器 (1 : 4)



第21図 金属製品・金属関連遺物・石製品（1：4）（803は1：2）

第2表 出土遺物観察表（1）

番号	発祥番号	種類	形状	調査時期	調査層位	調査・出土の状況	出土	構成	材質	検定	備考	
1	309-04	土製拳	鉄A	20	S B 1000	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
2	309-05	土製拳	鉄A	20	S B 1000	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄	鉄	鉄	1.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
3	309-06	土製拳	鉄A 2	20	S B 1000	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
4	309-03	土製拳	鉄A 1	20	S B 1000	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
5	310-01	土製拳	鉄A	20	S B 1000	口縁部コナテ、内面ハテ、内面ヘラミカキ	鉄製	鉄	鉄	1.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
6	309-08	土製拳	鉄	20	S B 1000	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
7	309-07	土製拳	鉄A	20	S B 1000	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
8	309-02	土製拳	鉄	20	S B 1000	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
9	309-11	土製拳	鉄	20	S B 1000	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
10	310-02	土製拳	鉄	20	S B 1000	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
11	311-03	土製拳	鉄A	143	S B 9000	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
12	311-02	土製拳	鉄	143	S B 9000	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
13	311-01	土製拳	鉄	143	S B 9000	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
14	343-01	土製拳	鉄	182	S B 8700	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
15	343-02	土製拳	鉄A	182	S B 8700	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
16	343-04	土製拳	鉄A	182	S B 8700	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土
17	343-03	土製拳	鉄	182	S B 8700	口縁部コナテ、後部外側テ・オサエ、内面テ	鉄製	鉄	鉄	2.0x1.6x0.5	口縁部の凸	後部外側部から2.0cm位の部分出土

第3表 出土遺物観察表(2)

番号	発掘番号	遺物	形状	調査年度	場所・層位	長さ(mm)	調査・調査の特徴	出土	構成	出所	保存度	備考
19	94-15	灰陶器	瓶	152	S 9476/1	口径 2.8 底径 2.8	口縁部コナテ、体部コナテナ。内面に 十字刻印が施される	■	■	頁目 134/6/1	口縁部の一部	赤赤色西銘川産土製
19	94-15	土製土	土製土	152	S 9476/2	土長 4.8 幅 1.9	■	■	ヤ中継	頁目 134/7/2	ほぼ完全	赤赤色西銘川産土製
20	94-17	土製土	土製土	152	S 9476/3	土長 2.9 幅 1.3	■	■	ヤ中継	頁目 134/7/3	全体の約90%	赤赤色西銘川産土製
21	94-41	土製土	瓶C	152	S 9476/1	口径 9.4 底径 5.5	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・口径 10/6/1 内・底径 10/6/1	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
22	94-10	土製土	皿D	152	S 9476/1	口径 8.2	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 13/7/2 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
23	94-46	土製土	中国	152	S 9476/1	口径 9.8	体部コナテ、底面外周	■	■	頁目 134/7/4	全体の約90%	赤赤色西銘川産土製
24	94-42	土製土	瓶	152	S 9476/1	口径 18.4	口縁部コナテ、体部外周ナテ	■	■	外・口径 18/6/1 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
25	94-16	灰陶器	磁器	152	S 9476/1	口径 14.8	口縁部コナテ、体部コナテ、内面に 施す十字刻印が施される	■	■	外・直径 13/7/2 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
26	94-43	土製土	皿D	152	S 9476/1	口径 8.9	口縁部コナテ、体部外周ナテ	■	■	外・口径 10/6/4 内・口径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
27	94-44	土製土	皿D	152	S 9476/1	口径 8.2	口縁部コナテ、体部外周ナテ	■	■	頁目 134/7/5	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
28	94-12	土製土	瓶C	152	S 9476/1	口径 13.8	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・口径 14/6/1 内・底径 10/6/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
29	94-48	土製土	瓶D	152	S 9476/1	口径 13.1	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	頁目 10/6/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
30	94-41	土製土	瓶C	152	S 9476/1	口径 18.4	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ・ハラエ工痕	■	■	頁目 13/6/6	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
31	94-14	土製土	皿D	152	S 9476/1	口径 8.2	口縁部コナテ、体部外周ナテ	■	■	外・口径 10/6/2 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
32	94-13	土製土	皿D	152	S 9476/1	口径 6.8	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・口径 13/6/4 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
33	94-16	土製土	皿D	152	S 9476/1	口径 6.8	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	頁目 9/7/6	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
34	94-47	土製土	瓶	152	S 9476/1	口径 19.2	口縁部コナテ、体部コナテ、底面外 周ナテ	■	■	外・直径 19/6/3 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
35	94-18	土製土	瓶A	10	S K0541	口径 18.4	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 18/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
36	94-18	土製土	瓶A	10	S K0541	口径 18.8	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 18/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
37	94-18	土製土	瓶C	10	S K0541	口径 12.8	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 12/7/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
38	94-18	土製土	皿A 1	10	S K0541	口径 18.9	口縁部コナテ、底面外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 18/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
39	94-18	土製土	皿A 2	10	S K0541	口径 18.9	口縁部コナテ、底面外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 18/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
40	94-18	土製土	皿A 3	10	S K0541	口径 18.9	口縁部コナテ、底面外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 18/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
41	94-18	土製土	皿	10	S K0541	口径 11.4	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 11/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
42	94-46	漢銅器	銅貨	10	S K0541	口径 20.8	口縁部コナテ、体部コナテ	■	■	外・直径 20/6/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
43	R15	土製土	瓶A	810	S E0276	口径 13.1	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 13/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
44	R14	土製土	瓶A	810	S E0276	口径 14.2	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 14/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
45	R15	土製土	瓶A	810	S E0276	口径 14.2	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 14/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
46	R15	土製土	皿A 2	810	S E0276	口径 18.1	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 18/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
47	93-12	土製土	瓶A	20	S K1078	口径 13.3	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 13/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
48	93-14	土製土	瓶A	20	S K1078	口径 12.8	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 12/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
49	93-11	土製土	瓶A	20	S K1078	口径 13.3	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 13/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
50	93-15	土製土	瓶A	20	S K1078	口径 13.3	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 13/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
51	93-17	土製土	瓶A	20	S K1078	口径 13.9	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 13/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
52	93-10	土製土	瓶A	20	S K1078	口径 14.6	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 14/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
53	93-10	土製土	瓶A	20	S K1078	口径 14.6	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 14/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
54	93-11	土製土	瓶A	20	S K1078	口径 14.6	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 14/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
55	93-16	土製土	皿A	20	S K1078	口径 18.8	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 18/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
56	93-11	土製土	皿A	20	S K1078	口径 18.8	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 18/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
57	94-44	土製土	土製土	20	S K1078	口径 3.9	■	■	外・直径 3/6/6 内・底径 3/6/6	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製	
58	93-16	土製土	瓶A	20	S K1078	口径 14.0	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 14/6/6 内・底径 10/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
59	93-19	土製土	瓶A	20	S K1078	口径 8.9	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 8/6/6 内・底径 8/6/6	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
60	94-13	土製土	瓶	20	S K1078	口径 18.3	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 18/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
61	94-13	土製土	瓶C	20	S K1078	口径 23.8	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 23/6/6 内・底径 16/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
62	94-14	土製土	瓶C	20	S K1078	口径 23.2	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 23/6/6 内・底径 16/6/3	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
63	94-16	漢銅器	銅貨	20	S K1078	口径 19.7	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 19/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
64	94-17	漢銅器	銅貨	20	S K1078	口径 19.7	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 19/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
65	94-16	漢銅器	銅貨	20	S K1078	口径 19.7	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 19/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
66	94-19	漢銅器	銅貨	20	S K1078	口径 19.7	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 19/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製
67	94-16	漢銅器	銅貨	20	S K1078	口径 18.1	口縁部コナテ、体部外周ナテ・オサエ、 内面ナテ	■	■	外・直径 18/6/6 内・底径 12/9/2	口縁部のみ	赤赤色西銘川産土製

第4表 出土遺物観察表(3)

番号	発祥地	種別	形状	調査年度	調査者	長さ(mm)	調査・調査の特徴	出土	経緯	出所	現存地	備考
99	006-05	土師器	杯A	29	S.K.1327	口径 17.0 底径 3.0	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	杯 5196/6	全体の約50%	
99	006-06	土師器	杯A	29	S.K.1327	口径 15.5 底径 3.3	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	杯 5196/6	全体の約50%	
100	004-04	土師器	杯A	28	S.K.1327	口径 14.9 底径 2.5	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
11	008-09	土師器	杯A 2	29	S.K.1327	口径 12.7 底径 3.0	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	外 1cm以下の中粒土 内 杯 5196/6	全体の約50%	
12	007-07	土師器	杯A 2	29	S.K.1327	口径 15.4 底径 3.8	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
25	006-06	土師器	杯A 2	29	S.K.1327	口径 13.7 底径 3.3	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	外 1cm以下の中粒土 内 杯 5196/6	全体の約50%	
34	003-03	土師器	皿A	28	S.K.1327	口径 18.0 内径 7.5	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
75	008-02	土師器	皿A	29	S.K.1327	口径 17.6 底径 2.2	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
76	006-04	土師器	皿A	29	S.K.1327	口径 17.1 底径 2.1	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	2cm以下の中粒土	全体の約50%	
77	006-04	土師器	皿A	29	S.K.1327	口径 16.4 底径 2.2	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1.5cm以下の中粒土	全体の約50%	
79	006-11	滑石器	蓋	28	S.K.1327	口径 12.7 底径 1.2	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ、上面に磨削跡がある	産	産	直径 1.5cm/厚 1.0cm	全体の約50%	
79	006-11	土師器	土師	29	S.K.1327	口径 11.8 底径 1.8	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
80	010	土師器	杯A	29	S.K.1329	口径 16.8 底径 4.1	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	杯 5196/6	口縁部のみ	
81	002-03	土師器	杯A	29	S.K.1329	口径 16.4 底径 4.4	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	中粒土 直径 7.0cm/厚 1.0cm	全体の約50%	
82	001-08	土師器	杯A	29	S.K.1329	口径 16.9 底径 4.1	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	杯 5196/6	全体の約50%	
83	001-08	土師器	杯A	29	S.K.1329	口径 17.4 底径 4.1	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
84	010	土師器	杯A	29	S.K.1329	口径 15.6 底径 3.2	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	杯 5196/6	口縁部のみ	
85	001-07	土師器	杯A	29	S.K.1329	口径 16.0 底径 3.2	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	杯 5196/6	口縁部のみ	
86	017	土師器	杯A	29	S.K.1329	口径 13.8 底径 3.1	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	杯 5196/6	全体の約50%	
87	010	土師器	杯A	29	S.K.1329	口径 13.8 底径 3.2	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	杯 5196/6	全体の約50%	
88	017	土師器	杯A	29	S.K.1329	口径 13.7 底径 3.2	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	杯 5196/6	口縁部のみ	
89	002-01	土師器	杯B	29	S.K.1329	口径 16.8 底径 4.6	口縁部コナテ、体部内面ナテ、胎付跡	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
90	001-04	土師器	杯G	29	S.K.1329	口径 12.3 底径 3.5	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	直径 10.0cm/厚 1.0cm	全体の約50%	
91	011	土師器	皿A 1	29	S.K.1329	口径 18.4 底径 2.5	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	中粒土	全体の約50%	
92	016	土師器	皿A 1	29	S.K.1329	口径 17.4 底径 2.5	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	中粒土	全体の約50%	
93	001-06	土師器	皿A 1	29	S.K.1329	口径 15.9 底径 3.2	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	中粒土	口縁部のみ	
94	001-06	土師器	皿A 1	29	S.K.1329	口径 16.4 底径 2.2	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	直径 7.0cm/厚 1.0cm	口縁部のみ	
95	010	土師器	皿A 2	29	S.K.1329	口径 17.2 底径 2.1	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	杯 5196/6	全体の約50%	
96	002-03	土師器	皿A	29	S.K.1329	口径 17.6 底径 10.3	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
97	010	土師器	皿A	29	S.K.1329	口径 23.8 底径 3.0	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	口縁部のみ	
98	012	土師器	皿A	29	S.K.1329	口径 20.6 底径 8.4	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	中粒土	口縁部のみ	
99	002-01	土師器	皿A	29	S.K.1329	口径 24.0 底径 7.9	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
100	014	滑石器	蓋	29	S.K.1329	口径 17.6 底径 2.8	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	直径 10.0cm/厚 1.0cm	全体の約50%	
101	014	滑石器	蓋	29	S.K.1329	口径 15.8 底径 2.6	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	直径 10.0cm/厚 1.0cm	全体の約50%	
102	014	滑石器	蓋	29	S.K.1329	口径 14.0 底径 2.6	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	口縁部のみ	
103	014	滑石器	蓋	29	S.K.1329	口径 14.0 底径 2.6	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	直径 10.0cm/厚 1.0cm	口縁部のみ	
104	001-05	滑石器	蓋	29	S.K.1329	口径 13.7 底径 2.5	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	直径 10.0cm/厚 1.0cm	全体の約50%	
105	001-05	滑石器	蓋	29	S.K.1329	口径 13.7 底径 2.5	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	直径 10.0cm/厚 1.0cm	全体の約50%	
106	012	滑石器	蓋	29	S.K.1329	口径 13.8 底径 2.6	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	直径 10.0cm/厚 1.0cm	全体の約50%	
107	001-02	滑石器	蓋	29	S.K.1329	口径 14.0 底径 2.5	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	直径 10.0cm/厚 1.0cm	全体の約50%	
108	013	滑石器	蓋	29	S.K.1329	口径 17.5 底径 2.6	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	直径 10.0cm/厚 1.0cm	全体の約50%	
109	015	滑石器	蓋	29	S.K.1329	口径 17.6 底径 6.0	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	直径 10.0cm/厚 1.0cm	全体の約50%	
110	004-04	土師器	杯A	10	S.O.0508	口径 13.5 底径 3.2	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
111	004-02	土師器	杯A	10	S.O.0508	口径 13.1 底径 4.2	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
112	004-01	土師器	杯A	10	S.O.0508	口径 13.2 底径 3.4	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
113	004-03	土師器	杯A	10	S.O.0508	口径 13.8 底径 3.3	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
114	004-02	土師器	杯B	10	S.O.0508	口径 17.4 底径 3.8	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1.5cm以下の中粒土	全体の約50%	
115	004-05	土師器	皿A 1	10	S.O.0508	口径 17.2 底径 2.2	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	全体の約50%	
116	004-06	土師器	皿A 1	10	S.O.0508	口径 17.1 底径 2.3	口縁部コナテ、底面内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	口縁部のみ	
117	004-06	土師器	蓋	10	S.O.0508	口径 13.8 底径 2.2	口縁部コナテ、体部内面コナテ、内面ナテ	産	産	1cm以下の中粒土	口縁部のみ	

第6表 出土遺物観察表(5)

番号	発祥地	種別	形状	調査年度	調査者	重量(g)	調査・検出の特徴	出土	経緯	出所	現行所	備考
188	R77	土師器	杯A	20	S-A156	19.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約50%	
189	R78	土師器	杯A	20	S-A156	14.0	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	埼玉県 10Y10/4	ほぼ完全	
190	R80	土師器	杯A	20	S-A156	13.9	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	中野県 5Y10/9	全体の約80%	
191	R74	土師器	杯A	20	S-A156	13.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約50%	
192	R79	土師器	杯A	20	S-A156	13.4	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	ほぼ完全	
193	R87	土師器	杯A	20	S-A156	13.4	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約50%	調査者不明の杯類不足
194	R30	土師器	杯A	20	S-A156	13.4	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	埼玉県 10Y10/4	既	
195	R71	土師器	杯A	20	S-A156	13.0	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約80%	
196	R68	土師器	杯A	20	S-A156	13.2	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	ほぼ完全	調査対象に「*」字次の標記
197	R71	土師器	杯A	20	S-A156	12.9	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約30%	
198	R68	土師器	杯A	20	S-A156	12.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	既	
199	R50	土師器	杯A	20	S-A156	12.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	既	
200	R4	土師器	杯A	20	S-A156	12.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	既	
201	R30	土師器	杯A	20	S-A156	12.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	埼玉県 10Y10/4	既	
202	R68	土師器	杯A	20	S-A156	12.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	既	
203	R77	土師器	杯A	20	S-A156	12.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約50%	
204	R30	土師器	杯A	20	S-A156	12.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	既	
205	R47	土師器	杯A	20	S-A156	12.7	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	既	既	
206	R63	土師器	杯A 2	20	S-A156	12.1	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 12Y10/9	全体の約20%	
207	R84	土師器	杯A 2	20	S-A156	11.9	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 10Y10/9	全体の約50%	
208	R62	土師器	杯A 2	20	S-A156	11.1	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約20%	
209	R68	土師器	杯A 2	20	S-A156	11.1	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 10Y10/9	全体の約50%	
210	R85	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.9	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 10Y10/9	全体の約50%	調査対象に調査者不明の杯類不足
211	R45	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.7	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 12Y10/9	全体の約20%	
212	R88	土師器	杯A 2	20	S-A156	11.5	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 23Y10/9	全体の約20%	
213	R8	土師器	杯A 2	20	S-A156	11.2	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 10Y10/9	既	
214	R41	土師器	杯A 2	20	S-A156	11.1	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約40%	
215	R41	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	既	
216	R87	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.7	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 10Y10/9	既	
217	R30	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.7	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 10Y10/9	既	
218	R87	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.7	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 10Y10/9	既	
219	R29	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.6	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約50%	
220	R138	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.2	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約20%	
221	R130	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.1	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 23Y10/9	全体の約20%	
222	R5	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.1	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約50%	
223	R129	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.2	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 23Y10/9	全体の約50%	
224	R113	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.9	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	既	
225	R114	土師器	杯A 2	20	S-A156	11.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	埼玉県 10Y10/4	全体の約80%	
226	R138	土師器	杯A 2	20	S-A156	11.9	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約50%	
227	R125	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.4	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 10Y10/9	既	
228	R17	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.5	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	既	
229	R51	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.5	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	ほぼ完全	
230	R13	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.2	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 10Y10/9	既	
231	R47	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.2	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	既	
232	R134	土師器	杯A 2	20	S-A156	10.2	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約50%	
233	R29	土師器	杯B	20	S-A156	10.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約50%	
234	R20	土師器	杯B	20	S-A156	10.8	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 23Y10/9	既	
235	R3	土師器	杯B	20	S-A156	10.2	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 12Y10/9	既	
236	R37	土師器	杯B	20	S-A156	10.3	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 12Y10/9	全体の約20%	
237	R2	土師器	杯B	20	S-A156	10.4	口縁部3コナテ、体部内面ナテ、オヤシ、内面ナテ	既	既	群馬県 5Y10/9	全体の約80%	調査対象に調査者不明の杯類不足

第8表 出土遺物観察表(7)

番号	発祥地	種別	形状	調査年度	発掘・発見	土層(m)	調査・調査の特徴	出土	構成	出所	現存地	備考
268	R117	土師器	甕	20	S・K1545	ⅠB 27.8 ⅠC 27.4	口縁部コナテ、底部外周コナテハツキ コナテ、内面コナテコナテ、下コナテコナテ	泥	赤	古川集積 1970/4	全体の約95%	
269	R20	渡部器	杯A	20	S・K1540	ⅠB 27.7 ⅠC 27.7 ⅠD 27.8	口縁部コナテ、底部外周コナテアリ	泥	赤	古川 9/1/2	全体の約95%	
270	R10	渡部器	杯A	20	S・K1543	ⅠB 27.8 ⅠC 27.8	口縁部コナテ、底部外周コナテアリ	泥	赤	古川 9/1/2	全体の約90%	
271	R127	渡部器	杯A	20	S・K1540	ⅠB 27.4 ⅠC 27.8	口縁部コナテ、底部外周コナテアリ	泥	赤	古川 13/6/2	口縁部のみ	
272	R21	渡部器	杯A	20	S・K1543	ⅠB 27.5 ⅠC 27.8	口縁部コナテ、胎付真直	泥	赤	長門寺 9/1/2	全体の約90%	
273	R6	渡部器	杯B	20	S・K1500	ⅠB 27.4 ⅠC 27.4	口縁部コナテ、底部外周コナテアリ、胎付真直	泥	赤	長 8/1/1	全体の約90%	
274	R12	渡部器	杯B	20	S・K1543	ⅠB 27.4 ⅠC 27.4	口縁部コナテ、底部外周コナテアリ、胎付真直	泥	赤	長 8/1/1	全体の約90%	
275	R13	渡部器	甕	20	S・K1543	ⅠB 27.8 ⅠC 27.8	口縁部コナテ、底部外周コナテアリ、内面コナテ	泥	赤	古川 13/6/2 内、西原集 13/5/2	全体の約90%	
276	R9	渡部器	甕	20	S・K1543	ⅠB 27.4 ⅠC 27.4	口縁部コナテ、底部外周コナテアリ、内面コナテ	泥	赤	長 7/1/1	全体の約90%	
277	R11	渡部器	甕	20	S・K1543	ⅠB 27.4 ⅠC 27.4	口縁部コナテ、底部外周コナテアリ、内面コナテ	泥	赤	古川 13/6/2 胎、西原集 13/5/2	全体の約95%	
278	R7	渡部器	甕	20	S・K1543	ⅠB 27.2 ⅠC 27.2	口縁部コナテ、底部外周コナテアリ、内面コナテ	泥	赤	古川 13/6/2	内面に磨痕、胎付真直	
279	R23	渡部器	甕	20	S・K1543	ⅠB 27.2 ⅠC 27.2	口縁部コナテ、底部外周コナテアリ	泥	赤	古川 13/6/2	胎付真直	
280	R22	渡部器	甕	20	S・K1543	胎付 2.8 胎付 4.2	口縁部コナテ、胎付真直	泥	赤	長 8/1/1	全体の約90%	胎付真直
281	R18	瓦輪器	皿	20	S・K1545	ⅠB 27.8 ⅠC 27.8	口縁部コナテ、胎付真直、胎付真直	泥	赤	古川 13/6/2 胎、西原集 13/5/2	口縁部のみ	
282	R15	瓦輪器	皿	20	S・K1545	ⅠB 27.8 ⅠC 27.8	口縁部コナテ、胎付真直	磁質	赤	長 13/6/1 胎、西原集 13/5/2	胎付真直	
283	R4	瓦輪器	皿	20	S・K1545	ⅠB 27.8 ⅠC 27.8	口縁部コナテ、胎付真直	磁質	赤	古川 13/6/2 胎、西原集 13/5/2	口縁部のみ	
284	R43	瓦輪器	高脚碗	20	S・K1540	ⅠB 27.8 ⅠC 27.8	口縁部コナテ、胎付真直	磁質	赤	古川 13/6/2 胎、西原集 13/5/2	全体の約90%	
285	R134	瓦輪器	甕	20	S・K1545	ⅠB 27.8 ⅠC 27.8	口縁部コナテ、胎付真直	磁質	赤	長 13/6/2	胎付真直	
286	000-02	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.0 ⅠC 16.2	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	1m以下0.6m程度	全体の約90%	内面に胎付真直
287	000-01	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.0 ⅠC 16.2	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	1.5m以下0.6m程度	全体の約90%	
288	000-03	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.7 ⅠC 16.7	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	胎 2.9/2/2	全体の約90%	
289	000-05	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.7 ⅠC 16.7	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	古川集積 1970/4	全体の約90%	
290	000-06	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.7 ⅠC 16.7	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	胎 2.9/2/2	全体の約90%	
291	000-07	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.7 ⅠC 16.7	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	1m以下0.6m程度	全体の約90%	
292	000-08	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.7 ⅠC 16.7	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	胎 2.9/2/2	全体の約90%	
293	000-09	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.7 ⅠC 16.7	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	胎 2.9/2/2	全体の約90%	
294	000-14	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.7 ⅠC 16.7	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	胎 2.9/2/2	全体の約90%	
295	000-04	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.9 ⅠC 16.9	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	胎 8/1/6	全体の約90%	
296	000-01	土師器	皿A	28	S・K1264	ⅠB 16.8 ⅠC 16.8	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	胎 8/1/6	全体の約90%	
297	000-03	土師器	皿A	28	S・K1264	ⅠB 16.4 ⅠC 16.4	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	胎 8/1/6	全体の約90%	
298	000-02	土師器	皿A	28	S・K1264	ⅠB 16.8 ⅠC 16.8	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	胎 8/1/6	全体の約90%	
299	000-04	土師器	皿A	28	S・K1264	ⅠB 16.2 ⅠC 16.2	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	古川集積 1970/4	全体の約90%	
300	000-05	瓦輪器	甕	28	S・K1264	胎付 6.8 胎付 1.9	口縁部コナテ、胎付真直、胎付真直	泥	赤	古川 13/6/2 胎、西原集 13/5/2	全体の約90%	
301	000-06	瓦輪器	甕	28	S・K1264	胎付 6.3 胎付 1.9	口縁部コナテ、底部外周コナテアリ、胎付真直	泥	赤	古川 13/6/2	胎付真直	
302	000-04	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.2 ⅠC 16.2	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	1m以下0.6m程度	全体の約90%	
303	000-05	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.8 ⅠC 16.8	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	古川集積 13/6/2	全体の約90%	
304	000-01	土師器	胎付鉢	28	S・K1264	ⅠB 16.7 ⅠC 16.7	口縁部コナテ、胎付真直	泥	赤	古川集積 1970/4	全体の約90%	胎付真直
305	000-02	土師器	胎付小皿	28	S・K1264	ⅠB 9.4 ⅠC 9.4	口縁部コナテ、胎付真直	泥	赤	古川集積 13/6/2	全体の約90%	
306	000-03	土師器	胎付小皿	28	S・K1264	ⅠB 8.9 ⅠC 8.9	口縁部コナテ、胎付真直	泥	赤	古川集積 1970/4	全体の約90%	
307	000-06	土師器	杯A	28	S・K1264	ⅠB 16.4 ⅠC 16.4	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	古川集積 13/6/2	口縁部のみ	
308	000-08	瓦輪器	甕	28	S・K1264	ⅠB 16.2 ⅠC 16.2	口縁部コナテ、胎付真直、胎付真直	泥	赤	古川 13/6/2 胎、西原集 13/5/2	全体の約90%	
309	000-10	瓦輪器	甕	28	S・K1264	胎付 6.1 胎付 1.8	口縁部コナテ、底部外周コナテ、胎付真直	泥	赤	古川 13/6/2	底部外周のみ	
310	000-10	瓦輪器	甕	28	S・K1264	胎付 6.9 胎付 1.9	口縁部コナテ、底部外周コナテ、胎付真直	泥	赤	古川 13/6/2	胎付真直	
311	000-09	瓦輪器	甕	28	S・K1264	胎付 6.1 胎付 1.8	口縁部コナテ、底部外周コナテ、胎付真直	泥	赤	古川 13/6/2	胎付真直	
312	000-11	瓦輪器	甕	28	S・K1264	胎付 6.2 胎付 1.8	口縁部コナテ、底部外周コナテ、胎付真直	泥	赤	古川 13/6/2	胎付真直	
313	000-10	瓦輪器	甕	28	S・K1264	胎付 6.2 胎付 1.8	口縁部コナテ、底部外周コナテ、胎付真直	泥	赤	古川 13/6/2	胎付真直	
314	000-07	渡部器	胎付鉢	28	S・K1264	胎付 11.0 胎付 3.1	口縁部コナテ、底部外周コナテ、胎付真直	泥	赤	古川 13/6/2	胎付真直	
315	010-01	土師器	皿D	28	S・K1267	ⅠB 9.4 ⅠC 9.4	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	胎付真直	胎付真直	
316	010-02	土師器	皿D	28	S・K1267	ⅠB 10.4 ⅠC 10.4	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	胎付真直	胎付真直	
317	010-03	土師器	杯D	28	S・K1267	ⅠB 16.8 ⅠC 16.8	口縁部コナテ、底部外周コナテ、オヤシ、内面ナテ	泥	赤	胎付真直	胎付真直	

第10表 出土遺物観察表(9)

番号	発祥地	種別	形状	調査年度	調査・発掘	長さ(mm)	用途・構造的特徴	出土	経過	出所	現行所	備考
368	005-17	土師器	豆	20	S.K.1021	口径 8.4 底径 3.1	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	長岡 13/9/10	口縁部のみ	京都高コスター館
369	005-18	土師器	豆	20	S.K.1021	口径 9.7 底径 3.6	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	長岡 10/9/10	口縁部のみ	京都高コスター館
370	005-17	土師器	豆	20	S.K.1021	口径 7.8 底径 3.4	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	上ノ川 10/9/10 一瀬 13/5/17	口縁部のみ	
371	005-10	土師器	豆	20	S.K.1021	口径 9.5 内径ナテ	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	中々	中々	既 8/10/16	全体の約60%	
372	005-16	土師器	豆	20	S.K.1021	口径 8.5 底径 3.1	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	新藤 10/9/10	全体の約60%	
373	005-16	土師器	豆	20	S.K.1021	口径 6.8 底径 1.5	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	上ノ川 10/9/10	全体の約60%	
374	005-14	土師器	豆	20	S.K.1021	口径 8.8 内径ナテ	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	上ノ川 7/9/16	全体の約60%	
375	005-15	土師器	豆	20	S.K.1021	口径 9.4 底径 3.4	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	長岡 13/5/15 一瀬 13/5/17	全体の約60%	
376	005-10	ロコ土師器	小皿	20	S.K.1021	口径 8.8 底径 2.0	体部コナテ、底部外周内凹	既	既	長岡 10/9/14	全体の約70%	
377	005-11	ロコ土師器	小皿	20	S.K.1021	口径 8.9 底径 1.9	体部コナテ、底部外周内凹	既	既	既 5/9/16	全体の約65%	
378	005-12	ロコ土師器	小皿	20	S.K.1021	口径 8.0 底径 2.0	体部コナテ、底部外周内凹	既	既	長岡 10/9/14	全体の約65%	
379	005-16	ロコ土師器	小皿	20	S.K.1021	口径 8.8 底径 2.0	体部コナテ、底部外周内凹	既	既	上ノ川 10/9/10 一瀬 13/5/17	全体の約65%	
380	005-13	ロコ土師器	小皿	20	S.K.1021	口径 8.3 底径 2.2	体部コナテ、底部外周内凹	既	既	既 7/9/10	既	
381	005-15	ロコ土師器	椀	20	S.K.1021	口径 8.8 底径 3.1	体部コナテ、底部外周内凹	既	既	長岡 10/9/14	底部のみ	
382	219-15	白磁	椀	20	S.K.1021	口径 16.7 底径 5.8	体部コナテ、体部下縁下方コナテより数ミ、下縁、上縁、前出筋、内面に線刻	既	既	既 10/16/11 既 10/16/11	両面全体	ナカノ葛城窯跡(個人)
383	005-10	特殊陶器	椀	20	S.K.1021	口径 10.2 底径 4.2	口縁部コナテ、体部コナテ	中々	既	長岡 13/5/17	口縁部の一帯	
384	R17	土師器	椀C	20	S.K.1024	口径 14.3 内径ナテ	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	外 上ノ川 7/9/16 内 上ノ川 10/9/10	ほぼ完全	
385	R19	土師器	椀C	20	S.K.1024	口径 13.9 底径 4.7	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	上ノ川 10/9/10	全体の約70%	
386	R40	土師器	椀C	20	S.K.1024	口径 14.0 内径ナテ	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	外 上ノ川 7/9/16 内 上ノ川 10/9/10	口縁部のみ	
387	R38	土師器	椀C	20	S.K.1024	口径 14.3 底径 4.2	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	既 7/9/10	全体の約70%	
388	R41	土師器	椀C	20	S.K.1024	口径 14.3 内径ナテ	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	既 10/9/10	全体の約60%	
389	R39	土師器	椀C	20	S.K.1024	口径 13.9 底径 4.2	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	中々	既	既 5/9/16	全体の約60%	
390	R15	土師器	皿D	20	S.K.1024	口径 9.0 内径ナテ	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	中々	既	長岡 13/5/17	既	
391	R19	土師器	皿D	20	S.K.1024	口径 8.5 底径 2.0	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	中々	既	長岡 10/9/10 一瀬 13/5/16	全体の約60%	
392	R26	土師器	皿D	20	S.K.1024	口径 9.8 底径 1.7	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	上ノ川 10/9/14	全体の約60%	
393	R17	土師器	皿D	20	S.K.1024	口径 10.0 底径 3.4	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	中々	既	上ノ川 8/9/16	全体の約60%	
394	R25	土師器	皿D	20	S.K.1024	口径 10.4 底径 3.3	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	中々	既	上ノ川 10/9/10	既	
395	R13	土師器	皿D	20	S.K.1024	口径 10.0 底径 2.0	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	中々	既	既 13/5/17	全体の約60%	
396	R30	土師器	皿D	20	S.K.1024	口径 10.0 底径 2.0	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	既	既	上ノ川 7/9/10	全体の約60%	
397	R38	土師器	椀D	20	S.K.1024	口径 13.9 底径 2.8	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	中々	既	上ノ川 13/5/14	全体の約70%	
398	R37	土師器	小皿	20	S.K.1024	口径 10.8 底径 3.4	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	中々	既	長岡 13/5/17	全体の約60%	
399	R19	土師器	椀付小皿	20	S.K.1024	口径 8.3 底径 2.7	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ、椀付	中々	既	上ノ川 10/9/10	全体の約60%	
400	R15	土師器	椀付小皿	20	S.K.1024	口径 8.8 底径 2.6	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ、椀付	中々	既	長岡 10/9/10	口縁部のみ	
401	R48	土師器	椀付豆	20	S.K.1024	口径 14.4 底径 1.8	口縁部コナテ、体部内面ナテ	中々	既	長岡 13/5/17	口縁部のみ	
402	R11	土師器	椀付椀	20	S.K.1024	口径 14.0 底径 3.4	口縁部コナテ、体部内面ナテ、椀付	中々	既	上ノ川 10/9/14	全体の約70%	観察済み
403	R22	土師器	椀付椀	20	S.K.1024	口径 13.8 底径 3.5	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ、椀付	既	既	長岡 13/5/17	全体の約60%	全体に磨き上げ
404	R42	土師器	椀	20	S.K.1024	口径 14.4 底径 4.4	口縁部コナテ、体部内面ナテ・オナテ、内面ナテ	中々	既	上ノ川 10/9/14	口縁部のみ	
405	R43	土師器	椀	20	S.K.1024	口径 17.4 底径 4.6	口縁部コナテ、体部内面縁部ナテ、内面縁部、上ノ川	中々	既	上ノ川 13/9/14	口縁部のみ	
406	R13	ロコ土師器	小皿	20	S.K.1024	口径 8.9 底径 1.5	体部コナテ	既	既	既 7/9/16	口縁部のみ	
407	R14	ロコ土師器	小皿	20	S.K.1024	口径 8.8 底径 1.7	体部コナテ、底部外周内凹	中々	既	上ノ川 7/9/16	口縁部のみ	
408	R24	ロコ土師器	小皿	20	S.K.1024	口径 10.8 底径 1.8	体部コナテ、底部外周内凹	既	既	外 上ノ川 13/5/11 内 上ノ川 10/9/14	全体の約60%	
409	R29	ロコ土師器	小皿	20	S.K.1024	口径 11.3 底径 2.1	体部コナテ、底部外周内凹	中々	既	上ノ川 13/5/15	全体の約60%	
410	R35	ロコ土師器	椀付小皿	20	S.K.1024	口径 8.1 底径 2.3	体部コナテ、底部外周内凹、椀付	中々	既	既 13/5/15	全体の約60%	輪郭のみを写す
411	R11	ロコ土師器	小皿	25	S.K.1024	口径 8.8 底径 1.6	体部コナテ、底部外周内凹	既	既	長岡 13/5/15	全体の約60%	
412	R34	ロコ土師器	小皿	20	S.K.1024	口径 8.3 底径 3.1	体部コナテ、底部外周内凹	既	既	外 上ノ川 10/9/10 内 上ノ川 10/9/10	全体の約60%	
413	R32	ロコ土師器	小皿	20	S.K.1024	口径 10.3 底径 2.4	体部コナテ、底部外周内凹	既	既	上ノ川 7/9/16 一瀬 13/5/17	全体の約60%	
414	R12	ロコ土師器	小皿	20	S.K.1024	口径 8.1 底径 2.7	体部コナテ、底部外周内凹	中々	既	長岡 7/9/14	口縁部のみ	
415	R47	ロコ土師器	椀	20	S.K.1024	口径 14.8 底径 6.1	口縁部コナテ、体部内面コナテ、体部内面内凹、椀付	既	既	長岡 13/5/17	全体の約60%	
416	R49	滑石器	椀	20	S.K.1024	口径 46.0 底径 12.8	口縁部コナテ、体部コナテ後縁部平、丹ナ4ミ、内面縁部内凹のみナテ	既	既	既 8/11/1	口縁部のみ	
417	R10	特殊陶器	椀	20	S.K.1024	口径 19.0 底径 13.4	口縁部コナテ、体部内面高コナテ、外縁部一帯ハツカテ、底部外周縁部	中々	既	上ノ川 10/9/10	底部の一帯を写す	

第14表 出土遺物観察表(13)

番号	発祥地	種別	形状	調査年度	調査者	長さ(mm)	調査・調査の特徴	出土	経緯	出所	現行所	備考
568	017-01	土師器	皿口	10	S-K0051	口徑 5.8 底径 1.3	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 8196/6	宮城の90%	
569	02-07	土師器	皿口	10	S-K0052	口徑 6.0 底径 1.6	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 8196/6	宮城の90%	
570	015-05	土師器	皿口	10	S-K0053	口徑 6.9 底径 1.3	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 8196/4	宮城の10%	
571	02-10	土師器	皿口	10	S-K0054	口徑 6.9 底径 1.6	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 8196/3	宮城の90%	
572	02-08	土師器	皿口	10	S-K0055	口徑 6.9 底径 1.6	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 8196/6	宮城の90%	
573	026-05	土師器	皿口	10	S-K0056	口徑 6.9 底径 1.7	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
574	029-20	土師器	皿口	10	S-K0057	口徑 6.9 底径 2.1	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 1096/2	宮城の90%	
575	019-11	土師器	皿口	10	S-K0058	口徑 6.9 底径 1.5	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 8196/6	宮城の90%	
576	021-06	土師器	皿口	10	S-K0059	口徑 9.0 底径 1.2	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
577	021-06	土師器	皿口	10	S-K0060	口徑 9.0 底径 1.6	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
578	021-07	土師器	皿口	10	S-K0061	口徑 9.0 底径 1.5	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
579	027-01	土師器	皿口	10	S-K0062	口徑 9.0 底径 1.8	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
580	019-06	土師器	皿口	10	S-K0063	口徑 9.1 底径 1.8	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
581	027-03	土師器	皿口	10	S-K0064	口徑 9.1 底径 1.4	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 1096/4	宮城の90%	
582	027-13	土師器	皿口	10	S-K0065	口徑 9.2 底径 1.9	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 1096/3	山形宮	
583	008-08	土師器	皿口	10	S-K0066	口徑 9.3 底径 1.3	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 1096/4	宮城	
584	008-09	土師器	皿口	10	S-K0067	口徑 9.3 底径 2.2	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ	甍	真	群 1096/4	山形宮	
585	010-01	土師器	餅付小皿	10	S-K0068	口徑 7.4 底径 2.1	口縁部コナテ、餅付高台、内面に布目状	甍	真	群 1096/3	山形宮	
586	012-10	土師器	餅付小皿	10	S-K0069	口徑 7.7 底径 2.3	口縁部コナテ、餅付高台、内面に布目状	甍	真	群 1096/2	宮城	
587	010-02	土師器	餅付小皿	10	S-K0070	口徑 7.8 底径 2.1	口縁部コナテ、餅付高台、内面ナテ、裏面にシボリ目	甍	真	群 1096/4	宮城の90%	
588	010-06	土師器	餅付小皿	10	S-K0071	口徑 8.5 底径 2.0	口縁部コナテ、餅付高台、内面ナテ	甍	真	群 1096/6	宮城の90%	
589	008-10	土師器	餅付小皿	10	S-K0072	口徑 8.9 底径 2.0	口縁部コナテ、餅付高台、内面ナテ、裏面にシボリ目	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
590	028-01	土師器	餅付小皿	10	S-K0073	口徑 8.9 底径 2.4	口縁部コナテ、餅付高台、内面ナテ、裏面にシボリ目	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
591	019-13	土師器	餅付小皿	10	S-K0074	口徑 4.8 底径 2.1	口縁部コナテ、餅付高台	甍	真	群 1096/3	高台跡のみ残存	
592	026-06	土師器	餅付小皿	10	S-K0075	口徑 4.8 底径 2.5	内面ナテ、餅付高台	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
593	026-07	土師器	餅付小皿	10	S-K0076	口徑 6.7 底径 2.1	内面ナテ、餅付高台	甍	真	群 1096/4	高台跡のみ残存	
594	027-10	土師器	蓋	10	S-K0077	口徑 9.0 底径 3.6	口縁部コナテ、体部外面ナテ、オヤシ、内面ナテ、紐付つまみ	甍	真	群 1096/4	宮城の90%	
595	011-02	土師器	蓋	10	S-K0078	口徑 10.8 底径 2.7	口縁部コナテ、体部ナテ、オヤシ、紐付つまみ	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
596	013-04	土師器	蓋	10	S-K0079	口徑 9.1 底径 2.5	口縁部コナテ、体部ナテ	甍	真	群 1096/3	群居の90%	
597	018-08	土師器	蓋	10	S-K0080	口徑 9.7 底径 2.8	口縁部コナテ、体部ナテ	甍	真	群 1096/6	群居のみ残存	群居跡 #800の器身
598	016-13	土師器	蓋	10	S-K0081	口徑 9.7 底径 2.7	口縁部コナテ、体部ナテ	甍	真	群 1096/6	群居のみ残存	群居跡 #700の器身
599	020-07	土師器	蓋	10	S-K0082	口徑 10.2 底径 4.7	口縁部コナテ、体部ナテ	甍	真	群 1096/3	群居のみ残存	群居跡 #800の器身
600	024-01	土師器	蓋	10	S-K0083	口徑 7.3	外縁ヘラウツリ	甍	真	群 1096/3	群居跡のみ	群居跡 #400の器身
601	019-01	土師器	蓋	10	S-K0084	口徑 8.4	外縁ヘラウツリ、内面ナテ	甍	真	群 1096/6	群居跡のみ	群居跡 #1100の器身
602	027-07	土師器	杯	10	S-K0085	口徑 10.0 底径 4.0	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/4	宮城の90%	
603	027-02	土師器	杯	10	S-K0086	口徑 10.4 底径 3.4	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
604	027-04	土師器	杯	10	S-K0087	口徑 10.8 底径 3.6	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
605	027-08	土師器	杯	10	S-K0088	口徑 10.3 底径 3.4	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
606	027-10	土師器	杯	10	S-K0089	口徑 14.3 底径 3.8	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/4	宮城の90%	
607	019-01	土師器	杯	10	S-K0090	口徑 14.7 底径 4.3	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/4	宮城の90%	
608	019-08	土師器	杯	10	S-K0091	口徑 14.7 底径 3.8	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 8197/6	宮城の90%	
609	020-06	土師器	杯	10	S-K0092	口徑 14.8 底径 3.6	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
610	006-16	土師器	杯	10	S-K0093	口徑 14.8 底径 3.9	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 8197/6	宮城の90%	
611	026-04	土師器	小皿	10	S-K0094	口徑 8.1 底径 2.2	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/4	宮城の90%	
612	025-04	土師器	小皿	10	S-K0095	口徑 8.1 底径 2.1	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
613	021-10	土師器	小皿	10	S-K0096	口徑 8.4 底径 2.2	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/6	宮城の90%	
614	017-13	土師器	小皿	10	S-K0097	口徑 7.8 底径 1.8	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/6	宮城の90%	
615	025-11	土師器	小皿	10	S-K0098	口徑 7.8 底径 1.4	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/6	宮城の90%	
616	020-17	土師器	小皿	10	S-K0099	口徑 7.7 底径 1.4	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/3	宮城の90%	
617	026-05	土師器	小皿	10	S-K0100	口徑 7.7 底径 1.4	口縁部コナテ、底面内凹	甍	真	群 1096/4	宮城の90%	

第17表 出土遺物観察表(16)

番号	発掘調査号	遺物	形状	調査年度	調査者・発掘者	位置(座)	調査・出土の状況	調査・出土の状況	出土	現行所蔵	備考
718	070-10	白磁	瓶	159	古田繁	1区 19.7 埋深 4.8	修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7 新 1397/7	口縁部の1/4
719	079-04	白磁	瓶	143	S-K9216	1区 11.9 埋深 3.6	修理口コウナク、外面に黒瓦文	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	口縁部の1/2
720	079-01	青磁 磁器土器	瓶	143	S-K9308	1区 10.8 埋深 3.6	修理口コウナク、黒瓦文、黒瓦線	焼成	窯	京都府 京大 1397/7 新 1397/7	口縁部の1/4
721	082-08	清漆器	内面焼	153	S-K9316	1区 10.7 埋深 3.2	修理内面口コウナク、黒瓦文、黒瓦線、修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	中中窯	京都府 京大 1397/7	口縁部の1/2
722	099-31	清漆器	内面焼	143	S-H9001	1区 17.4 埋深 3.2	内面口コウナク、瓦割かし	窯	窯	京都府 京大 1397/7 新 1397/7	修理部の1/2
723	082-07	清漆器	内面焼	153	古田繁	1区 12.4 埋深 3.6	修理口コウナク、黒瓦文、瓦割かし	窯	窯	京都府 京大 1397/7	口縁部の1/4
724	087-08	清漆器	黒字線	143	古田繁	1区 11.1 埋深 3.6	修理口コウナク、黒瓦文、瓦割かし	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	口縁部の1/2
725	087-06	清漆器	黒字線	143	S-K9327	1区 11.1 埋深 3.6	修理口コウナク、黒瓦文、瓦割かし	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約1/2
726	111-03	清漆器	黒字線	143	S-H9001	1区 17.4 埋深 3.6	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約1/2
727	005-03	灰釉磁器	黒字線	187	S-91057	1区 15.8 埋深 4.8	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7 新 1397/7	全体の約2/3
728	004-04	灰釉磁器	黒字線	187	S-91057	1区 15.8 埋深 4.8	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7 新 1397/7	全体の約1/4
729	018-01	灰釉磁器	黒字線	153	S-K9358	1区 15.8 埋深 13.3	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の1/2
730	014-01	陶器	瓶 (山瀬焼)	157	S-03666	埋深 7.7 埋深 4.2	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の約1/2
731	111-03	灰釉土器	土器土器	143	古田繁	1区 17.4 埋深 3.6	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	中中窯	中中窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
732	111-01	灰釉土器	土器土器	143	S-H9001	1区 17.4 埋深 3.6	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	中中窯	中中窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
733	100-02	灰釉土器	土器土器	152	S-K9378	1区 17.4 埋深 6.3	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	中中窯	中中窯	京都府 京大 1397/7 新 1397/7	修理部の約1/2
734	100-04	灰釉土器	土器土器	152	S-K9378	1区 17.4 埋深 6.3	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	中中窯	中中窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
735	100-03	灰釉土器	土器土器	152	S-K9378	1区 17.4 埋深 6.3	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	中中窯	中中窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
736	100-05	灰釉土器	土器土器	152	S-K9378	1区 17.4 埋深 6.3	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	中中窯	中中窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
737	084-07	灰釉土器	土器土器	157	S-K9350	1区 17.4 埋深 6.3	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	中中窯	中中窯	京都府 京大 1397/7	口縁部の1/4
738	014-02	灰釉土器	土器土器	157	S-K9350	1区 17.4 埋深 6.3	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	中中窯	中中窯	京都府 京大 1397/7	口縁部の1/2
739	014-01	灰釉土器	土器土器	157	S-K9350	1区 17.4 埋深 6.3	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	中中窯	中中窯	京都府 京大 1397/7	口縁部の1/4
740	004-06	灰釉土器	土器土器	157	S-K9350	1区 17.4 埋深 6.3	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	中中窯	中中窯	京都府 京大 1397/7	口縁部の1/2
741	000-06	灰釉土器	土器土器	152	S-K9378	1区 17.4 埋深 6.3	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	中中窯	中中窯	京都府 京大 1397/7	口縁部の1/2
742	100-01	灰釉土器	土器土器	152	S-K9378	1区 17.4 埋深 6.3	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	中中窯	中中窯	京都府 京大 1397/7	口縁部の1/2
743	111-03	二色 土器土器	瓶	143	古田繁	1区 6.9 埋深 2.2	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約1/2
744	071-01	陶器	短頸瓶	159	古田繁	1区 6.9 埋深 2.2	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約1/2
745	111-01	瓦葺土 土器土器	三足石鉢	143	古田繁	1区 11.1 埋深 3.6	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約1/2
746	087-09	土器 土器土器	瓶	143	赤土	埋深 7.4 埋深 3.2	外面ナデ、オヤシ、内面ナデ	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約2/3
747	087-04	土器 土器土器	土高下	143	赤土	埋深 7.4 埋深 3.2	外面ナデ、オヤシ	窯	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
748	087-06	土器 土器土器	土高下	143	赤土	埋深 7.4 埋深 3.2	外面ナデ、オヤシ	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
749	087-07	土器 土器土器	土高下	143	S-H9001	埋深 2.0	外面ナデ	窯	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約1/2
750	087-08	土器 土器土器	土高下	143	S-H9001	埋深 2.0	外面ナデ	窯	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約1/2
751	088-02	陶器 磁器土器	瓶 (山瀬焼)	119	TKR 677 赤土	埋深 7.0 埋深 3.0	修理内面口コウナク、修理内面口コウナク、修理内面口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の約1/2
752	087-03	陶器 磁器土器	瓶 A.1	143	S-K9354	1区 10.3 埋深 3.0	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約2/3
753	111-06	清漆器	瓶	143	S-H9001	1区 17.4 埋深 3.6	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
754	111-08	清漆器	瓶 A.1	143	S-K9378	1区 17.4 埋深 3.6	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
755	087-01	土器 磁器土器	瓶 A.1	152	S-K9378	1区 15.3 埋深 3.6	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約2/3
756	040-02	土器 磁器土器	瓶 B.7	152	S-K9378	1区 15.3 埋深 3.6	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
757	040-03	土器 磁器土器	瓶 B.7	152	S-K9378	1区 15.3 埋深 3.6	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
758	040-04	土器 磁器土器	瓶 B.7	152	S-K9378	1区 15.3 埋深 3.6	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
759	040-01	土器 磁器土器	瓶 B.7	152	S-K9378	1区 15.3 埋深 3.6	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
760	014-04	土器 磁器土器	瓶 B.7	152	S-K9378	1区 15.3 埋深 3.6	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	焼成	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の一部
761	040-06	陶器 磁器土器	瓶 (山瀬焼)	152	S-03665	1区 15.3 埋深 3.0	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約2/3
762	087-02	土器 磁器土器	瓶 B.7	152	古田繁	1区 15.3 埋深 3.0	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約2/3
763	040-05	陶器 磁器土器	瓶 (山瀬焼)	152	古田繁	1区 15.3 埋深 3.0	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約2/3
764	000-08	土器 磁器土器	瓶 A.1	152	S-K9327	1区 14.4 埋深 3.7	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の約1/2
765	005-03	土器 磁器土器	瓶 A.1	156	S-K9383	1区 15.3 埋深 3.2	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	修理部の約1/2
766	001-01	土器 磁器土器	瓶 A.1	159	S-K9389	1区 14.4 埋深 3.8	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	口縁部の1/2
767	004-01	土器 磁器土器	瓶 A.1	156	S-K9389	1区 14.4 埋深 3.8	修理口コウナク、修理口コウナク、修理口コウナク	窯	窯	京都府 京大 1397/7	全体の約2/3

第18表 出土遺物観察表(17)

番号	登録番号	器物	形状	調査時期	出土層位	重量(g)	調査・検出の特徴	出土	構成	出所	検出層	備考	
769	005-02	漆器類 埴輪土器	壺	150	S-K366	軒柱 10.4 底径 2.7	体部コウナデ、底壁内面コウナデ、 胎内面	甞	甞	巨摩産 10V9E/2	溝針径の1/3	外壁に厚層「目」 内面胎面に厚層「肥」 内面胎面胎内面	
770	009-01	漆器類 埴輪土器	壺	150	S-K310	口径 10.0 底径 4.2	体部コウナデ、底壁内面コウナデ、 胎内面	甞	甞	巨白 15V1/1	全体の約1/3	外壁に厚層「目」 内面胎面に厚層「肥」	
771	006-04	漆器類 埴輪土器	皿	150	S-K10	口径 15.1 底径 3.5	体部コウナデ、胎内面	甞	甞	甞産 巨白 23V1/ 胎 1-15(1)産 13V1/3	全体の約1/3	底壁内面に厚層、胎内平 滑	
771	006-05	漆器類 埴輪土器	鉢A	150	S-K10	口径 14.0 底径 3.1	口縁部コウナデ、体部内面ナデ、オサエ、 内面ナデ	甞	甞	胎 23V1/3	全体の約1/3	底壁内面に「目」 厚層の 底壁内面	
772	008-01	漆器類 埴輪土器	鉢A	150	S-K378	口径 16.9 底径 3.2	口縁部コウナデ、体部内面ナデ、オサエ、 内面ナデ	甞	甞	甞産 13V1/3	ほぼ完全	外壁に10条、内面に20 条の縦筋	
773	041-01	漆器類 埴輪土器	鉢A?	150	S-K376	口径 15.0 底径 3.5	体部内面ナデ、オサエ、内面ナデ	甞	甞	胎 31V1/6	ほぼ完全	ほぼ完全、外壁に厚層「目」 厚層「肥」 厚層「目」	
774	017-01	漆器類 埴輪土器	鉢A?	150	S-K338	口径 17.0 底径 2.5	口縁部コウナデ、体部内面ナデ、オサエ、 内面ナデ	甞	甞	胎 31V1/6	口縁部の1/4	内面に10条、内面に20 条の縦筋 厚層「目」 厚層「肥」	
775	014-02	漆器類 埴輪土器	鉢A	150	S-K395	口径 13.4 底径 3.0	口縁部コウナデ、体部内面ナデ、オサエ、 内面ナデ	甞	甞	特産産 31V1/6	全体の約1/3	厚層「目」 厚層「肥」	
776	014-01	漆器類 埴輪土器	鉢A	150	S-K395	口径 13.6 底径 3.2	口縁部コウナデ、体部内面ナデ、オサエ、 内面ナデ	甞	甞	胎 23V1/6	全体の約1/3	厚層「目」 厚層「肥」	
777	001-02	漆器類 埴輪土器	鉢A	150	S-K390	口径 16.4 底径 3.3	口縁部コウナデ、体部内面ナデ、オサエ、 内面ナデ	甞	甞	胎 23V1/6	完全	底壁内面に底壁内面	
778	031-01	漆器類 埴輪土器	鉢A	150	S-K330	口径 17.0 底径 2.9	口縁部コウナデ、体部内面ナデ、オサエ、 内面ナデ	甞	甞	胎 31V1/6 ～産産 23V1/6	口縁部の1/3	内面に10条、内面に20 条の縦筋 厚層「目」	
779	005-02	漆器類 埴輪土器	鉢A	150	S-K300	口径 17.0 底径 3.0	口縁部コウナデ、体部内面ナデ、オサエ、 内面ナデ	甞	甞	胎 31V1/6	全体の約1/3	底壁内面に底壁内面	
780	019	漆器類 埴輪土器	鉢B	20	S-K132	口径 - 底径 -	体部コウナデ、底壁内面コウナデ、 胎内面	甞	甞	巨摩産 10V9E/2	底壁の一部	底壁内面に「目」 厚層「肥」	
781	-	漆器類	鉢類	140	古物類	口径 6.2 底径 2.4	-	-	-	-	-	胎内面に厚層とするため 胎内「肥」	
782	-	漆器類	鉢類	140	古物類	口径 6.2 底径 2.4	-	-	-	-	-	-	
783	-	漆器類	鉢類	140	古物類	口径 6.8 底径 2.2	高脚式、中国の鉢類	-	-	-	-	全体の約1/3	-
784	-	漆器類	片打盆	180	S-K368	直径 7.0 厚 2.8	高脚部が若干フラクになる	-	-	-	-	ほぼ完全	-
785	001-01	漆器類	煎餅用	180	S-K10	直径 7.0 厚 2.8	-	-	-	-	-	ほぼ完全	-
786	019-05	漆器類	煎餅用 平皿	180	S-K10	直径 7.0 厚 2.8	2枚の皿裏面で構成、丸縁の平・角縁の 平	-	-	-	-	完全	-
787	014-04	漆器類	煎餅用 平皿	180	S-K10	直径 7.0 厚 2.8	-	-	-	-	-	表面は厚 煎餅用	-
788	009-06	漆器類	煎餅用	140	S-K900	直径 13.0 厚 1.2	煎餅用。調整をし厚に作り出す	-	-	-	-	-	-
789	009-01	漆器類	煎餅用	140	S-K900	直径 4.8 厚 1.8	煎餅用	-	-	-	-	-	-
790	009-05	漆器類	煎餅用	140	S-K900	直径 4.8 厚 1.8	煎餅用	-	-	-	-	-	-
791	009-03	漆器類	煎餅用	140	S-K900	直径 4.4 厚 2.0	煎餅用	-	-	-	-	-	-
792	009-04	漆器類	煎餅用	140	S-K900	直径 4.8 厚 1.6	煎餅用	-	-	-	-	-	-
793	009-06	漆器類	煎餅用	140	S-K900	直径 5.2 厚 1.0	煎餅用	-	-	-	-	-	-
794	009-07	漆器類	煎餅用	140	S-K900	直径 5.2 厚 1.0	煎餅用	-	-	-	-	-	-
795	009-02	漆器類	煎餅用	140	S-K900	直径 5.0 厚 1.4	煎餅用	-	-	-	-	-	-
796	012-02	漆器類	煎餅用	160	S-K312	直径 10.2 厚 0.4	煎餅用	-	-	-	-	-	-
797	009-08	漆器類	煎餅用	160	S-K321	直径 10.2 厚 0.9	煎餅用	-	-	-	-	-	-
798	006-02	土器類	伊達?	20	S-K135	直径 10.5 底径 6.0	平面的面が崩れ、縁を割るため 断面に凹凸がある	甞土にスカー小石・ 土層片を多く含む	-	胎 31V1/6 ～15(1)産 31V1/6	不明	-	
799	001-01	土器類	碓氷口	20	S-K108	直径 7.0 厚 5.0	表面は平滑、φ1.5mm程度の 土にスカー1cm程度 の小石を含む	甞	甞	巨白 31V1/ ～15(1)産 31V1/6	不明	-	
800	012-07	石製	煎餅用	180	石製	直径 3.4 厚 1.4	外壁を研製	-	-	-	-	研製	-
801	001-02	石製	碓氷口	180	S-K960	直径 1.5 厚 0.6	煎餅用内面に研製	-	-	巨白 13V1/1	完全	-	
802	111-04	石製	碓氷口	140	古物類	直径 1.0 厚 0.7	煎餅用内面に研製	-	-	巨白 13V1/2	完全	-	
803	019-19	石製	石製 丸盤	8-10	石製	直径 4.0 厚 0.7	煎餅用への研製跡の凹凸	-	-	ほぼ完全	完全	-	

第3章 斎宮跡の土器編年の再検討

第1節 斎宮跡の土器編年の再検討

(1) 再検討に至る経緯

土器編年の確立は発掘調査による史跡の実態解明の基本的作業のひとつである。史跡斎宮跡におけるこれまでの土器編年を振り返ると、まず昭和59(1984)年に発表された「斎宮跡の土器」において、飛鳥時代から平安時代を、生産地の編年研究が進む須恵器・灰釉陶器を伴する、比較的良好な一括出土資料に基づいて11期に細分したものが示された⁽¹⁾。さらに平成13(2001)年刊行の『報告Ⅰ』では新出の資料も踏まえ、各段階設定の基準資料の器種構成や土器型式の変遷を示すとともに、近畿地方の都城遺跡の編年との併行関係にも言及した編年案(いわゆる「2000年編年」)が示されている⁽²⁾。

しかしながら、第1章でも述べたように「2000年編年」以後、すでに数々の課題が提示されている。この「2000年編年」をベースにして平成12(2000)年10月に開催したシンポジウム「斎宮の土器・みやこの土器」の中で、各段階の実年代観、器種の分化、都城の土器の影響と斎宮独自に発展した要素の区分などの認識について都城研究者側からいくつかの疑問が呈され、特に奈良時代から平安時代ははじめの「2000年編年」でいうⅠ-2期からⅡ-1期にかけて、都城編年との齟齬が指摘されている⁽³⁾。その後、斎宮側の研究者からもⅠ-3期の基準資料の実年代観の問題や⁽⁴⁾、Ⅰ-4期を独立した段階として設定し難い点が指摘されている⁽⁵⁾。また、新出の出土資料を踏まえ、Ⅲ-3期の細分や、「2000年編年」で示されていなかったⅢ-4期やⅣ期の提唱がなされ⁽⁶⁾、斎宮跡で充分整理されてこなかった貿易陶磁の出土状況を検証する中で、平安時代後半にあたるⅢ期の実年代観の疑問点が示されている⁽⁷⁾。

史跡斎宮跡の実態解明調査は、史跡東部の方格地割の解明により、平安時代の資料が蓄積してきたこと、また平成28年度策定の「史跡斎宮跡発掘調査基本方針」に基づき、今後は史跡西部の飛鳥・奈良時代の解明に重点を置くとしていることから、ひとつの過渡期を迎えているともいえる。今回「柳原区画」の遺物編を刊行するにあわせ、今後の調査研究の進展に資することができるよう、「2000年編年」の課題を少しでも整理しておきたい。

(2) 既存の報告書との整合性

遺構の時期決定の大きな根拠となる土器編年の変更により、既存の報告との不整合が懸念される。平成26(2014)年に刊行した『遺構編』で報告した遺構の時期区分は、段階表記こそ「2000年編年」に拠っているが、今回の土器編年の再検討で柳原地区の遺構の変遷そのものが変更を求められるようになったわけではない。また、『遺構編』刊行の段階で先に触れたような「2000年編年」の年代観に対する課題を踏まえ、特にⅢ期については実年代観を調整しており、大きな不整合には至らない。『遺構編』でのⅠ-4期からⅡ-1期にかけての時期としたA期の遺構は、方格地割成立期のものと位置づけており、一部を除きおおむね桓武朝のものとみてよいと考えられることから、後述する奈良時代の土器の年代観の修正の影響はほとんどないと言える。

一方、平安時代の「内院」と推定される「鍛冶山西区画」「牛葉東区画」を包括的にまとめた

第19表 土師器供諸具（杯G、杯A・D・中世皿）の径高指数の変遷

土師器 杯G

期・相		遺構名 () 内は調査回数			計測 個体数	径高指数
杯G	直前期	—	S H8925 (141)		1	0.36
	I-1期	古相	S H7095 (102-5)	S K7096 (102-5)	7	0.35
		新相	S K1255 (27)	S B1615 (30)	S B4728 (71)	10
	I-2期	古相	S K5102 (70-1)	S K5632 (82)	11	0.30
		新相	S B4463 (67)	S B4497 (71)	S B7105 (102-5)	4
	I-3期	古相	S B7445 (111-1)	S K10213 (167)	2	0.28
		中相	S B3920 (59)	S K4498 (68)	7	0.26
		新相	S K1098 (21-1)	S K4130 (62)	S K6210 (88)	18
	II-1期	古相	S K6225 (88)	S K6226 (88)		
		中相	S K8134 (127)	S K8294 (130)	5	0.28
	II-2期	古相	S H9001 (143)		3	0.29
		新相	S K9785 (152)	S H11805 (187-6)	2	0.27
	II-2期	古相	S K5200 (77)	S K9786 (152)	4	0.24

土師器 杯A・D・中世皿

期・相		遺構名 () 内は調査回数			計測 個体数	径高指数	
杯A	I-1期	古相	S H0059 (4)		1	0.30	
		新相	S B1615 (30)		1	0.35	
	I-1~2期	古相	S B6125 (87)		2	0.29	
		新相	S K8621 (137)		7	0.23	
	I-2期	古相	S K5102 (70-1)		7	0.23	
		新相	S K4499 (68)	S K4497 (71)	S K4749 (71)	9	0.24
	I-3期	古相	S B6105 (87)		S K10213 (167)	9	0.21
		中相	S B3900 (59)		S K4498 (68)	7	0.21
		新相	S K1098 (21-1)	S K4130 (62)	S K6210 (88)	22	0.21
	II-1期	古相	S K4148 (62)	S K5072 (75)	S K5343 (79)	29	0.22
		中相	S K10248 (168)	S K8294 (130)			
		新相	S B4392 (66)	S D7478 (111-2)	S H9001 (143)	61	0.23
	II-2期	古相	S K1445 (34)	S K9785 (152)	S H10885 (187-6)	47	0.23
		新相	S K1045 (20)	S K5200 (77)	S K9786 (152)	30	0.23
	II-3期	古相	S K10502 (177)		8	0.20	
		中相	S K7430 (109)	S K10247 (168)	S K10325 (173)	34	0.22
		新相	S E4050下層 (61)	S K2650 (44)	S K6743 (98)	66	0.21
	II-4期	古相	S E6920上層 (99)	S K7930 (119)	S K6792 (124)	118	0.21
		中相	S E7060 (104)	S K8842 (140)	S K9933 (157)	27	0.22
		新相	S X6666 (95)	S K7030 (103)		103	0.20
杯D	III-1期	古相	S E4050中層 (61)		S K7040 (103)	S K8066 (124)	
		中相	S K8071 (124)		S K8073 (124)		
		新相	朝見SK48		S E4050上層 (61)	12	0.22
	III-2期	古相	S E2000 (31-4)		6	0.24	
		中相	S K8407 (133)		4	0.25	
		新相	S E8391 (133)	土坑1・2 (162-3)		14	0.24
	III-3期	古相	S K1074 (20)	S K1730 (32)	7	0.24	
		中相	S X3665 (56)	S K9926 (157)	9	0.23	
		新相	S K6658 (95)	S K7305 (108)	S K7651 (114)	21	0.25
	III-4期	古相	S K9940 (157)	S K9026 (143)	130	0.25	
新相		S K6163 (87)	S K0247 (118)	S K8110 (125-1)	9	0.20	
中世皿	IV-1期	古相	S K9990 (158)				
		新相	S D4495 (68)	S K7873 (118)	S E8010 (118)	31	0.20
	IV-2期	古相	S E9014 (143)	S K9826 (153)			
		新相	S X6533 (93)	S X6652 (96)	S K9035 (143)	45	0.20
	IV-3期	古相	S D9652 (155-5)	S K10114 (159)			
		新相	S K3414 (54)	S X6976 (101)	8	0.23	
V-1期	古相	S K6692 (87-1)		9	0.23		
V-2期	古相	S E7560 (110-2)		5	0.27		

第20表 斎宮跡出土土器編年表

関連事項	美年代	段階区分	主要資料	都城編年	推定編年
大来皇女が伊勢に向う(674)	620			飛鳥Ⅰ	
	630		SB4466(67)	北野SK3170	
	640			北野SK3097	
	650			飛鳥Ⅱ	Ⅲ-2 I-101
	660		SB2235(38) SK7496(110-1)		
	670		SB6706(37-2) SH8586(137) SH8925(141)	飛鳥Ⅲ	Ⅲ-3 I-17
	670		SK3003(85-6)		
	680	古	SB0059(4) SK7095(102-5) SD8902(141)	飛鳥Ⅳ	Ⅲ-4 I-41
	690	I-1			
	700	新	SK1255(27) SB1619(30) SB4743(71)	飛鳥Ⅴ	
斎宮を築くに准じる(701)			平城Ⅰ	Ⅲ-5 C-2	
710					
720	古	SK3102(70-1) SB5632(82)	水滸SF8 水滸SF11	平城Ⅱ	
730	I-2	新	SB4403(67) SK4469(768) SB7105(102-5) 水滸SF35	平城Ⅲ	Ⅳ-1 I-25
740		古	SB7448(111) SK1021(187) SK8105(87)	平城Ⅳ	
750		古	SB3920(38) SK4468(68)	平城Ⅴ	Ⅳ-2 NN-32
760	I-3	中	SK8228(88) SK8210(94) SK1099(21-1) SK1301(62) SK4220(88) SK6226(86) SK4505(89) SK8222(88) SK8675(132)	平城Ⅵ	
770	新	SK4589(89) SK3068(75) SK134(127) SK2829(130)			
780	古	SK8030(88) SK3072(75) SK3343(79) SK10248(168)			
790	I-1	中	SB4481(97) SK4318(91-2) SB3005(56) SB4392(66) SH9001(143) SD7478(111-2)	平城Ⅶ	Ⅳ-3 O-10
800	新	SK1445(34) SD3730(57) SH10885(187-6) SK9785(152)		K-7	
810					
820	古	SK1049(20) SK3200(77) SK9786(152)		新	
830	I-2	新	SK6753(98) SK10502(177) SK1423(29-44) SK10247(168)		V-1 K-14
840					
850	古	SK7430(106) SK7011(103) SK10325(173)		古	
860					
870	I-3	中	SK2695(44) SE4050下層(61) SE6920上層(99) SK2650(44) SK7930(118) SK6792(124)	京Ⅲ	V-2 K-90 (前半)
880	新	SK8295(130) SK8842(140)			
890	古	SK8071(86) SK8308(130) SK8528(136) SK9930(157)		V-3 K-90 (後半)	
900	古	SK7090(103) SK8860(154) SB10152(167) SX6666(95) SX6600(94) SK4238(63)		新	
910					
920	I-4	新	SE4050中層(61) SK7040(103) SK8071(124)		Ⅵ-1 O-53
930	古	SD6730(98-124) SK8066(124) SK8071(124) SK8073(124)			
940					
950					
960	古	(前期2次SK48) SE4050上層(61)		京Ⅳ	山形編
970					
980	I-1	中	SE2000(31-4) SD3890(58) SK7770(116-2)	新	Ⅵ-2 H-72 第1型式
990					
1000	古	SK8407(133)			
1010					
1020	古	SE9335(133) 王坑1-2(162-3)			
1030	I-2	中	SE7600(113) SK1074(20) SK1730(32)	京Ⅴ	Ⅵ-3 百代寺 第2型式
1040					
1050	古	SE8391(133)			
1060					
1070	古	SE8391(133)			
1080	I-3	古	SE0720(15) SK10115(163)	京Ⅵ	第3型式
1090					
1100	古	SK8686(95) SK7651(114) SK10138(165-1)			
1110					
1120			SK9028(143)		

	1130	Ⅲ-3	新	SD10117下層(171)							
第ニ豊陵造営(1143) 第の内院神庭造営(1144) 第の内院殿舎・門・具屋・果樹等造営 (1153)	1140			SD9052(90)	SD2475(37-4)	SK9033(143)		原Ⅵ	中		第4型式
	1150										
造伊勢斎宮御内中御(1167) 平行光の成功申文(1168)	1160	Ⅲ-4		SK2480(37-4)	SK6183(87)	SK8110(125-1)	SK9890(158)		新		
	1170			SK0555(10)							
このころ西行が斎宮の荒廃を詠う (1177~1180) 大中臣氏による造斎宮書外院の成功 (1187)	1180			SE1904(54)	SE1904(54)	SK9027(143)					第6型式
	1190			SK1873(118)	SE9014(143)	SK3826(153)			古		
菅子内親王の群行(1264) 菅子斎王の退下(1272)	1200	Ⅳ-1		SE475(71)							
	1210			SD4495(68-71)	SH9462(146)						
	1220			SK7420(107)				原Ⅶ	中		第6型式
	1230			SK8140(87)	SK7668(118)	SK9035(143)					
	1240	Ⅳ-2		SK10114(159)							
	1250			SX8533(83)	SX8534(93)	SX8975(101)					
	1260								新		第7型式
	1270			SK8573(83)	SK6976(101)	SK9039(123-6)					
	1280	Ⅳ-3									
	1290			SK3414(54)					古		
	1300										第8型式
	1310			SK8892(97-1)				原Ⅷ	中		
祥子内親王の卜定(1333)	1320	V-1									
	1330								新		
	1340										
	1350										
	1360										

(太字は「2000年編年」の基準資料、斜字は参考資料)

『報告Ⅰ』では、「2000年編年」に基づく遺構の時期区分を行っているが、今回の編年案の再検討でも、光仁朝での「鍛冶山西区画」を中心とした酒人内親王のための斎宮造営、桓武朝での東西5区画、南北4区画の方格地割の造営という解釈は変わらず、既存の報告に大きな変更はないと考えている。

第2節 土師器供膳具を中心とした斎宮跡の土器の変遷

(1) 編年案の作成

「2000年編年」までは、他時期の混入がなく（あるいは少ない）、器種構成が比較的豊富な一括資料を、共伴する須恵器・灰釉陶器等の生産地の年代観に基づいて年代決定し、これを各段階の基準資料として段階表記を行ってきた。具体的には飛鳥時代から平安時代までの斎宮跡の土器の流れは第Ⅰ期から第Ⅲ期に大別し、さらに第Ⅰ期で4段階、第Ⅱ期で4段階、第Ⅲ期で3段階の段階区分がなされている。

これにより、基本的な土器の構成と変遷の概要は押さえられてきたが、生産と消費の実年代のズレや、大量消費財的な器種と耐久財として使用される器種の間を生じる生産から廃棄までの時間差を考慮できていないことが課題であった。そのため、まず斎宮跡で最も大量に出土し、消費量（出土量）が多く、生産地での型式変化にいち早く反応すると考えられる土師器供膳具の型式変化をとらえた編年を構築することとした。その上で、絶対年代が推定できる資料の検証や、須恵器・灰釉陶器等の編年にみる生産地の年代観との整合性の検証を行うこととした。この手順によるため、「2000年編年」では、須恵器・灰釉陶器が共伴し、比較的器種のバリエーションが多いものを中心に基準資料を選別しているが、今回は須恵器等を共伴しない比較的出土量が少ない

ものでも一括性が高いものは検討の俎上に置いている。

「杯A」や「皿B」といった器種名は都城との整合性の問題はあるものの、「2000年編年」で示されたものを基本とし、修正・加除の必要性があるものはその都度細分・修正した。今回は土師器の型式変化を中心に記載するため、文中の器種名は断りが無い限り土師器を示している。

従来の段階による、例えば「第1期第3段階」（以後も便宜的に「I-3期」などと表記する）という表現は、様式的な把握の上で抜本的な変更の必要性はないと考え、基本的に「2000年編年」を踏襲して各内容の検討を行い、約20～30年幅を目安に各段階の時間的細分を試みた。その際には、土師器の主要器種である「杯A」などの口径や径高指数（器高÷口径）といった形態上の変化や、前段階の形式の混在状況を加味して資料の検討を行った。

「2000年編年」からの今回の大きな変更点は、これまでの研究を踏まえ、I-4期はII-1期の古相に編入し、III期は4段階に再編したことである。また、これまで示されてこなかったIV期以降をあらためて明示した。そして、検討した一括資料群の実年代を、文献史料の記録や遺構の解釈により、可能な限り付与する試みを行った。以下、各期別に順を追って記述する。

（2）斎宮跡第I期の土器

《直前期》

斎宮に先行する、7世紀半ばのものと思われるSB2235(39次)・SX7496(110-1次)からは在地色の強い須恵器杯Hを伴って甕A・Cが出土している。甕Aはやや縦長のプロポーションで、頸部の屈曲が弱く口縁端部をわずかに上へ引き上げる。SB2235・SX7496からは土師器供膳具は共伴していないが、多気都城まで広げて斎宮周辺のこの時期の土師器をみると、明和町の北野遺跡や戸峯古墳群、多気町の河田古墳群・倉懸古墳群などで、椀形を呈する杯Gの他、高杯、鉢、直口壺、甕A・C、鍋、甕がみられる。SB2235・SX7496の資料は、これらと型的にも器種構成的にも一連のものと考えられる。斎宮において、この時期に相当する土師器供膳具の良好な資料は乏しいが、やや後出とみられる7世紀第3四半期から斎宮I-1期にかけての資料としてSH8925(141次)があげられる。この段階には古墳時代から継続する型式である杯Gや旧来の甕Aを伴って、蓋の口縁にかえりを持つ須恵器杯Aや、わずかながら内面に放射状暗文を持つ土師器皿（杯C?）が出現している点が、古墳時代の当地域の土器様式からの過渡期的な様相を示しており、現時点では仮に斎宮「直前期」の一群としてとらえておきたい。

《斎宮I-1期》

比較的精良な胎土と、暗文を持つ土師器が定着するI-1期のものとしては、古相にSB0059(4次)、SK7095(102-5次)、SD8902(141次)が、新相に「2000年編年」でI-1期の基準資料としたSK1255(27次)、SB1615(30次)の他、SB4743(71次)があげられる。土師器供膳具には、直前期にはなかった杯Aや杯B1・B2・C、椀A、皿A1・B・C、高杯といった新しい器種が出現するが、いずれも畿内中央部の土器様式に含まれる器形であり、I-1期の段階でこれらを受容したといえる。また、色調は黄褐色系で、胎土に砂粒を多く含む在来系の杯Gと比べ、赤みがあった橙色を呈し、胎土も精良で、外面をヘラミガキ、内面に放射状や螺旋状の暗文を持つものがある。管見の限りでは畿内産のものではなく、胎土・焼成などからすべて在地産とみるのが妥当であろう。

器形の変化をみると、杯Gでは口径が11～12cmほど、器高値を口径値で割った径高指数が0.35～0.34で、仮に「直前期」に位置づけたSH8925の資料が口径11.0cmで径高指数0.36であるのに比べると、わずかに低平になっている。杯Aは、平坦な底部から口縁部が鋭角的に大きく立ち上がり、口径約18～22cmと大ぶり、径高比は0.30から0.35とまばらである。そのため、この時期では一定した傾向を把握できていないが、後述するように杯類は低平化が進むようになる。この段階の一括資料には杯Aを含まないものも多い。I-1期の資料は「2000年編年」策定以降もまだ資料の蓄積をみておらず、また既出のものも堅穴建物出土のものが中心であるため、現状では、斎宮そのものの土器の把握ができていないと言え難いかもしれない。

一方で、この段階に出現する杯Cは、飛鳥地域で見られる杯Cと親和性の高い器種で、SB4743の資料からは、少なくとも口径11～13cmの小型品と、16～18cmの大型品に分化していることがうかがえる。このような土師器供膳具における同一器形での法量分化も、I-1期になって認められる事象である。

共存する須恵器は、斎宮周辺の窯跡は未発見ながらも、大部分が器形や胎土から、在地系のものが大半を占めると考えられるが、SB1615には美濃須衛窯産の可能性を指摘される資料も含まれている。¹⁸¹

《斎宮 I-2期》

この期も二段階に分けて考える。古相には「2000年編年」の基準資料であるSK5102(70-1次)やSB5632(82次)を、新相にはSB4435(67次)・SB4463(67次)・SK4499(68次)・SB7105(102-5次)を挙げた。この期からは口縁部が内湾する皿A1、高台がつく杯B・皿B(口縁が内湾するB1、外側にのびるB2も含む)、杯Cを低平化した皿C、蓋が新たに揃い、器種の多様化と畿内中央部の都城的な様式の定着の段階といえる。また、SK5102やSK7220(107次)のように、この時期に埋設したとみられる遺構の中には土器の出土量が多いものがみられ、相対的に土器の消費量が増すと推測している。

杯Gは古相・新相とも径高指数が0.30、杯Aも古相0.23、新相0.24と、器形上の変化は見られないが、古相のものは、杯Aなどの精製品の外面をヘラミガキで調整するが、新相には杯・皿の底部をヘラケズリ調整(いわゆるe手法)するものが卓越してくる。これは都城編年の平城IIから平城IIIへの流れにも整合している。

法量分化については、古相のSK5102で、杯A1には口径17～18cmの大型品と13cm台の小型品、その間の15cm台の中型品に分けることは可能であるが、新相の資料では大中の2種類のサイズ以外は確認できなくなる。

古相に属するSK5102は、土師器供膳具に杯A・B・C・G、皿A・B、高杯、蓋と多彩な内容を持つが、第30図に示すように、多くの器種にわたり、平城IIの基準資料である長屋王邸宅跡SD4750の資料との親和性が高いと考えている。SK5102の土師器には内面の放射状暗文が一段しかないこと、口縁内面の連弧状暗文がみられないことから、長屋王邸の資料より一段階新しいとみる見解もあるが、¹⁹斎宮の土師器には搬入品ほとんどみられないことや、基本的に斎宮跡の土師器供膳具に二段放射暗文を持つものはないことから、両者は時期的にかなり接近したものとみて大きな問題はないと考える。

『続日本紀』によれば、養老五(721)年に皇太子首皇子(のちの聖武天皇)の息女である井上

内親王の斎王就任が決まり、神亀四(727)年には、伊勢斎宮に着任している。また、これにあわせるように、養老二(718)年に斎宮寮の公文にはじめて印を用い、神亀四(727)年には斎宮寮の官人121人を補任、天平二(730)年には、以後の斎宮の年料は官物を用い、神宮神戸の庸・調を充当することを禁じる勅が出されるなど、機構・財政面の整備も進み、井上内親王の斎王着任にあたっては周到な準備が為されたとみるのが自然であろう。I-2期古相に始まる都城的な器種の増加と定着、量的な増加は、720年代のこうした斎宮整備と連動したものとみられ、I-2期のはじまりも720年を大きくは遡らない時期とみられる。この時期には周辺地域の関連資料として、明和町の水池遺跡の土師器焼成坑出土資料が挙げられる。水池遺跡の土師器焼成坑から出土した土師器は、内面に放射状・螺旋状の暗文を持つ精製土器の割合が高いとされ⁽⁹⁾、斎宮との強い関係がうかがわれる。水池遺跡からは16基の焼成坑が見つまっているが、出土土師器はS F 8の資料のようにI-1期の新相にさかのぼる可能性があるものを含むものの、大部分はI-2期に属し、I-3期以降のものは確認されていない。こうした水池遺跡の短期間の消長も井上斎王の斎宮整備に係る状況を反映するものと考えられる。

I-2期に共存する須恵器も、前代同様に窯跡が判明していない在地系のものが多いとみられるが、古相のS K 5102には猿投窯産の可能性のある短頸壺を伴っている。

《斎宮 I-3期》

この期は三段階に分けているが、古・中相とみられる資料は少ないため、今後増加する資料の状況によっては古・中相は分離すべきではないかもしれない。また、斎宮の奈良時代の中枢部があったとみられる史跡西部から離れた地点の資料が多いことから、斎宮土器編年の段階設定としては依然課題が残っている。

古相にはS B 7445(111次)・S K 10213(167次)の、中相にはS B 3920(59次)・S K 4498(68次)の資料を挙げた。新相になると一転して資料は急激に増加をする。S K 1098(21-1次)・S K 4130(62次)・S K 4585(69次)の他、S K 6210・6220・6225・6226など鍛冶山地区の第88次調査で検出した土坑群の資料がこれにあたる。

I-3期は、皿Cの消失、杯B・Cの減少、杯・碗の外表面調整がヘラケズリを主体とすることからうかがわれる製作上の省力化など、I-2期に比べ後退的要素が多い。杯Gの径高指数は古～新相で0.26～0.28、杯AでI-3期を通して0.21と、いずれも前代より低平化が進んでいる。法量分化については、杯Aでは口径20cmを超える大型、約16～18cmの中型、14cm以下の小型に分けられるが、これらの境界は前段階に比べると不明瞭になっている。

古相に位置づけたS K 10213出土の杯Aには、口径20.9cm、器高4.0cmで、外面をヘラミガキし、内面に一段の放射状暗文と口縁部に連弧状暗文、見込みに螺旋暗文を施す資料がある。これは形態や大きさ、調整手法の上で、平城Ⅲ新相の基準資料であるS K 820の中に酷似したものを見つけることができる(第30図参照)。このS K 10213の杯Aは、橙色を呈する在地の胎土によるもので、I-3期の古相は8世紀の半ば頃のものともみられる。S K 10213の杯Gは径高指数が0.30ほどで、I-2期と変わらないが、杯Aは、径高指数が平均0.21と、I-2期よりも低平化が進んでおり、後出的といえる。

中相とみられる資料は特定しがたい。史跡中央部の第59次調査で検出した堅穴建物S B 3920や、史跡北西部のS K 4498の資料を想定しているが、土師器供膳具では新相と明確に区別ができない。

S B 3920や、それと隣接するほぼ同時期とみられる S B 3900(59次)から仏器写しの須恵器鉢や土師器鉢が出土し、伊勢大神宮寺の排除など、当地域からの仏教色の排除が徹底されていく光仁朝以前にさかのぼる可能性が想定できること⁽¹¹⁾、共存する須恵器杯Bに美濃須衛窯編年のIV期第1小期後半(8世紀前葉)の基準資料である老洞1号窯でのみ認められる資料があることから⁽¹²⁾、仮に8世紀第3四半期頃のものともみておきたい。この時期に該当する称徳朝は、文献記録上では斎王が選ばれておらず、斎宮の空白時期でもあった可能性が高い。

I-3期新相には、「2000年編年」でこの段階の基準資料としてきたS K 1098やS K 6210が含まれる。「2000年編年」ではこれらの基準資料に伴う須恵器の中に、美濃須衛窯のIV期第1~2小期に位置づけられるものがあり、これらは、先にみた『続日本紀』天平二(730)年の勅によって斎宮が国家財政の下で運営されることになった反映として、美濃須衛窯産のものが導入されるようになったとみて、天平二(730)年から宝亀元(771)年頃まで、平城Ⅲ・Ⅳに併行するものとされた⁽¹³⁾。しかし、その後の研究により、これらの土器群には猿投窯編年のV期古段階新相から中段階のものが少なからず見い出せ、「2000年編年」でのI-3期の基準資料と、それと時期的に併行するとみられる鍛冶山地区の土器群は、光仁朝での斎宮造営に関わるものと指摘されるようになった⁽¹⁴⁾。全ての資料を確認できてはいないが、I-3期新相に併行するとみられる遺構の分布をみると、史跡東部からの出土量・遺構数がともに多く、特に光仁朝に新規に「内院」が造営される鍛冶山地区周辺からの出土量が極めて多い⁽¹⁵⁾。このようにS K 1098・6210を代表とする土器群は、宝亀元(770)年に光仁が即位し、宝亀二(771)年酒人内親王を斎王として派遣するため、鍛冶正気太王を斎宮造営に派遣(『続日本紀』)した頃以降のものとも見た方が、史料とも整合するものと考えられる。

I-3期新相の土器群については、かつて「法量の上で大きな変化は見られないが」としながら、土師器杯類を中心に、暗文の多用や外面調整がヘラミガキかヘラケズリかといった点で奈良時代中期の土器を新旧2段階に分ける案が提唱されていた⁽¹⁶⁾。しかし、新旧とされた土器群がきわめて接近した場所で見つまっていること、調整手法を除く形態・法量の上で差異が認められないことから、段階を分けるほどの時間差を想定することは難しいと考えられる。

美濃須衛窯系の須恵器については、先述の第59次調査のS B 3900・3920のやや大型で底部に丸みを持つ須恵器杯や、老洞窯産とみられる「美濃」刻印土器をはじめとして、生産地編年で8世紀前葉にあたるIV期第1小期に分類されるものが多い。これは、すでに指摘されているように、先述の天平二年の勅とは無関係ではないだろう。一方、土器全体の出土量が増加するI-3期新相になると、大型の杯・蓋・皿・盤・甕・鉢類を伴うことが知られている。延長五(927)年編纂の『延喜斎宮式』「諸国送納調備条」では、美濃国に陶器六百九十六口が課せられ、また、「供新嘗料条」では主神司および殿部司に壘・平居瓶・都波波・匳・小环・陶白・管环・陶碗・多志良加・瓶・陶鉢・盤・高环・酒蓋・叩盆を、水部司には埴・陶碗・臼・盤を、殿部司には池由加・由加・匳・瓶・缶・叩盆を、薬部司には陶埴・叩盆・陶手洗・陶碗・盤を美濃国が充当するとされていることも、少なくとも9世紀あるいはそれにさかのぼる須恵器の供給の状況を反映しているものだろう。特に、この中の壘・多志良加・瓶・池由加・由加・缶などは大型の貯蔵具にあたる⁽¹⁷⁾と考えられている。出土土器を遺構内で評価する際、生産地での焼成後、当地に運ばれるまでの時間差、使用開始から廃棄に至るまでの時間差を考慮する必要がある。このような耐久財とし

で使われたであろう大型品は、特にその時間差が大きくなるものと推定できる。Ⅰ-Ⅲ期新相の土器群の多くが光仁朝の斎宮造営に関連すると仮定すると、鍛冶山地区周辺で大量に出土する美濃須衛窯の大型品は、斎宮造営にあたり新たに都城から持ち込まれた、あるいは既設の斎宮施設から回収して造営段階にまとめて廃棄した可能性が考えられ、供膳具など消費から廃棄のサイクルが短い土器との時間差が生じていることが想定できる。

《Ⅰ-Ⅳ期の再検討》

「2000年編年」では、平城Ⅴに併行し、光仁朝から長岡京期を経て、延暦四(785)年に紀作良を造斎宮長官として、桓武朝の斎王朝原内親王の斎宮を造営(『続日本紀』)するまでの段階として、Ⅰ-Ⅳ期を設定しており、美濃須衛窯のⅣ期第3小期、猿投窯では折戸10号窯式期に相当するとされた。しかし、Ⅰ-Ⅳ期の基準資料とした第69次調査のS E 4580や、これとほぼ同時期とされるS K 4585には、明らかに折戸10号窯式期に併行するとみられる須恵器は含まれていない。さらに、土師器杯A類は外面をヘラケズリするものに加え、口縁部を広くヨコナデする、いわゆるe手法のものが現れている。この土器群については、後出のⅡ-Ⅰ期への形態変化が漸進的で、かねてより独立した段階とすることに疑義が呈されてきた¹⁹⁾。S E 4580の杯Aの径高指数は0.24~0.26で、Ⅰ-Ⅲ期の平均より立ち上がりの強いものとなっている。これは、たとえ底部はヘラケズリしても、口縁部を強くヨコナデすることで、底部から口縁部を強く立ち上げているため、杯Aだけでなく皿A2にも同様の形態変化がみられる。さらにこの手法はⅡ期の杯Aの形態を規定していくことから、この土師器製作技法の転換を土器様式の転換点とみる方が、様式論的に明快に理解できる。そのため、今回の編年案では、「2000年編年」でのⅠ-Ⅳ期は、Ⅱ-Ⅰ期の古相に含まれるとして様式観の修正を行った。

(3) 斎宮跡第Ⅱ期の土器

《斎宮Ⅱ-Ⅰ期》

Ⅱ-Ⅰ期の古相(Ⅱ-Ⅰ期を含む)から、口縁部をヨコナデして成形・調整する杯Aや皿A2などのように、成形技法の簡素化や小型化による大量生産への対応がうかがえる。Ⅰ-Ⅲ期新相の実年代観が光仁朝期以降と考えられることから、Ⅱ-Ⅰ期古相の実年代観は、方格地割の本格的な造営に入るとともに、官人も急増したとみられる延暦四(785)年以降に位置づけられる。

Ⅱ-Ⅰ期に入ると、杯Bが大幅に減少、杯Cが消失し、杯Gも大きく減少する。一方、杯Aと同様に口縁をヨコナデして外反させる皿A2や、口径14cm前後で底部外面をヘラケズリあるいはナデ調整し、底部から丸みのある腰部が立ち上がる椀A2が現れるなど、これまでの器種構成とは大きく変化しており、新しい段階に移行したとみてよい。

供膳具の主体となる杯Aの径高指数は0.22~0.23で、前段階より口縁の立ち上がりが大きいプローションになる。これは先述のとおりe手法の盛行に伴う変化である。法量は前代より小型化が進み、口径約14~17cmと18cm以上のおよそ二つの法量に分化するが、両者に明確な区別はつけにくい。杯Gは、Ⅰ-Ⅲ期で0.30であった径高指数が0.27~0.29になり、器高を減じている。

Ⅱ-Ⅰ期は暫定的に三段階に細分している。古相は杯Aや皿A2にe手法が現れ、底部から腰部にかけてシャープに立ち上がるようになる一方で、杯・皿の外面をヘラケズリするものも共存する段階である。椀A2が出現するのは、古相の中でもやや新しいとみられるS K 6030(86次)

からである。S K 6030の椀A 2は、口径が約13.5cmで底部をヘラケズリする。同様の形態は都城の長岡京期の遺構に見られ、S K 6030資料は、これを写したものとみてよい。これがⅡ-1期古相の実年代のひとつの根拠である(第30図参照)。また、煮炊具ではあるが、甕Aの底部外面がハケメのみの調整から、ヘラケズリが導入されるようになる。

中相は、杯・皿類のヨコナデが強くなることで器壁が薄くなる。良好な一括資料であるS H 9001(143次)でみると、杯Aで口径約12cmから約18cmと、全体に小型化が進行するが、明瞭な法量分化は認められない。椀A 2が増加し、本格的に定着するのはこの段階からである。供膳具ではないが、平底で底部外面をヘラケズリする鉢が現れるのもこの頃とみられる。

新相になると杯Aの口縁部はさらに外に広がるようになる。良好な一括資料であるS K 1445(34次)でみると、杯Aの口径は12.3~16.5cm、径高指数で0.23とさらに小型化傾向が進む。

Ⅱ-1期の土師器に相伴する須恵器は、本書掲載のⅡ-1期中相のS K 1291(28次)に折戸10号窯にみられる双耳瓶蓋(104)や、中相のS H 9001以降から、鳴海32号窯式期の有台盤や折戸80号窯式期の笠形の形状になる杯蓋など、猿投窯産須恵器の増加が目立つ。

《斎宮Ⅱ-2期》

Ⅱ-1期から、さらに杯Aの口縁の外傾化と小型化が進む。二段階に細分している。

古相には、「2000年編年」のⅡ-2期の基準資料であるS K 5200(77次)とS K 1045(20次)の他、S K 9786(152次)がある。これらの杯Aの口径はおおよそ13~17cm、径高指数は平均でいずれも0.23~0.24となり、口縁の外傾化の進行以外はⅡ-1期と大きな変化はない。古墳時代以来、斎宮跡の土器様式の一面をなしてきた杯Gは、径高指数が0.23とさらに低平化が進み、古相以後は椀A 2と器形・焼成の上で区別が無くなくなる。内外面の装飾である暗文は、杯Aには施されなくなり、椀A 2と一部の皿・高杯類のみになる。

S K 9786は、柳原区画のB期の寮庁正殿の柱穴を壊して掘削されている。B期の正殿は、延暦二十二(803)年から大同三(808)年頃にみられる史生四員の増員(『日本紀略』)や、炊部司への主典の設置(『日本後紀』ほか)などの斎宮寮の機構改革に伴い「寮庁」正殿として設置され、天長元(824)年に斎宮が度会郡離宮院に移転(『類聚国史』)された以後解体されたと考えている。そのため、S K 9786の土器群は、天長元年を少し遡る頃から直後の時期のものともみられる。

新相になると、当該期にあてたS K 6753(98次)やS K 10502(177次)の杯Aの口径は13~16cm、径高指数で0.20~0.22と小型化、低平化が一段と進む。この変化は、これら新相の土器群が、承和六(839)年に度会斎宮が火災に遭い、ふたたび多気郡のこの地が「常斎宮」と定められた(『続日本後紀』)以後のものと考えられ、古層との間のわずかではあるが時間差に起因する可能性がある。他にも、古相からの変化としては、全体に占める割合はわずかだが、内面のみを黒化処理するA類の黒色土器が一定量みられるようになる。

相伴する陶器類には、在地系とみられる須恵器や折戸10号窯式の須恵器に加え、Ⅱ-2期古相のS K 1045から黒笹14号窯式の灰釉陶器の椀・皿が伴うようになる。平安京で灰釉陶器が出現するのは京Ⅱ期新段階とされており、斎宮でも都城とほとんど時間差なく、灰釉陶器の導入が始まったことがわかる。

《斎宮Ⅱ-3期》

三段階に細分している。杯Aをみていくと、古相がS K 7430(109次)・7017(103次)・10325

(173次)で口径が13~16.5cm、径高指数が平均で0.22、中相がSK2650(44次)・6792(124次)・6743(98次)で口径13~16.5cm、径高指数が0.21、新相がSK8529(136次)・8842(140次)・7930(119次)で口径が13~16.5cm、径高指数が0.21と大きな変化はないようにみえる。しかし、新相になると口径が14cm台のものが多く、画一化と低平化が進み、器壁も薄くなるとともに、口縁部のヨコナデ範囲が狭くなる傾向にある。この結果、杯Aと椀A2は形態的に接近していくことになる。同様に皿類も、口縁部を内弯気味につくるA1と、外反させるA2の区別が不明瞭になっている。暗文は、土師器では基本的に椀A2の内面に粗い放射状・螺旋状暗文を施すのみになる。

供膳具以外では、甕Cは減少するとともに短胴化が進み、甕Aとの区別が不明瞭になる。また、甕・鍋ともに口縁端部の肥厚が進む。

黒色土器には、A類の中に杯Aに高台をつける台付椀Aが、II-3期古相からあらわれる。

共伴する陶器類をみると、古相ではSK7430・SK10325で、折戸10号窯式の須恵器に伴って、黒笹14号窯式の角高台の灰釉陶器椀が出土するが、中相のSK2650・SE6920上層(99次)では三日月高台の灰釉陶器椀が含まれるようになる。

緑釉陶器は、II-3期の古相から中相の時期にかけて、猿投窯産のものを中心にみられるようになる。混入を除き、現時点で東海地方の瓷器系の緑釉陶器を含む最も古い遺構は、SK2695(44次)・7430で、端反口縁に角高台を持つ椀や、陰刻花文や輪状のつまみを有する蓋がみられる。椀類は猿投窯の黒笹14号窯式の製品を焼成する窯跡から素地がみつかる型式で、ほぼ同型の端反口縁の椀は、平安京の京II期新相の冷泉院や淳和院の遺構から出土しているものである。II-3期の古相から中相は、9世紀の第3四半期を中心とした時期に想定しているので、灰釉陶器と比べ、生産地や平安京などと比べると、現時点では緑釉陶器は都城にやや遅れて出土するようになる¹⁹⁹。

灰釉陶器の増加に伴い、貯蔵具を除き須恵器は著しく減少するが、中相を中心とするSK2650には、これまでみられなかった口縁部をまっすぐ外方へ伸ばす無台椀風の杯や、灰釉陶器や緑釉陶器を模倣したとみられる稜椀形の杯Bがみられる。焼成がやや軟質で、底部を回転ヘラケズリするなどの特徴を有しているが、現在のところ産地を特定することができない。

《斎宮II-4期》

供膳具はさらなる小型化が進む段階で、二段階に細分している。古相のSK7030(103次)、SX6666(95次)では、杯Aの口径が11.5~15cm、径高指数で0.22と、前代から小型化が進むとともに、椀A2とは基本的に峻別ができなくなる。また、それとともに内面装飾の暗文もみられなくなる。新相はSE4050中層(61次)、SK7040(103次)・8066(124次)・8071(124次)等でみると、口径11.5~15cm、特に11~12cm台のものが中心となり(SK8066で95%)、径高指数0.20と急速に小型化と画一化が進む。底部のナデ調整が雑になり、やや丸底化する。

供膳具以外の土師器では、甕Cが完全に消失し、甕Aも球胴化するとともに口縁部を内側に丸めた形状で、外面上半を粗いタテハケ、下半をヘラケズリするものになる。II-1期以来続いてきた平底の鉢もII-4期を最後にみられなくなる。

陶器類の共伴関係をみると、古相のSK10152から、折戸53号窯式のものともみられる灰釉陶器椀が含まれはじめ、黒笹14・90号窯式の段階よりも生産地と消費地の時間差が縮まるようである。緑釉陶器は猿投窯の黒笹90号窯式期のものが依然多いが、新相には近江産のものが現れる。一方、

須恵器は貯蔵具以外ほとんどみられない。また、新相から回転台成型によるいわゆる「ロクロ土師器」の椀がごくわずかに出現するが、丁寧に成型した角高台をもち、Ⅲ-1期以降に増加する「ロクロ土師器」と同じ系譜上に置けるかはさらなる検討が必要である。

Ⅱ-4期の実年代観については、すでに「2000年編年」において、基準資料とした地鎮遺構とみられるS X 6666・6900(99次)の土器群に、「延喜通寶」が複数枚共伴し、それより確実に新しい銭貨がみられないことから、延喜年間(907~922年)頃にあてている(第30図参照)。今回の試案においても基本的な変更はなく、Ⅱ-4期古相は、おおむね10世紀第1四半期の年代を与えられると考えている。さらに、Ⅱ-4期新相の土器群のうち、第98・124次調査のS K 8066・8071等の土器群は、鍛冶山西区画の「内院」の内部を細分する区画溝を埋めており、鍛冶山西区画の「内院」廃絶時の土器群である。これらの遺構では炭化材も出土しており、延喜二十二(922)年の斎宮寮失火の記事(『扶桑略記』)や、承平三(933)年に斎宮修造の記事(『類聚符宣抄』)が関連すると考えられることから、10世紀第2四半期を中心とする時期のものとみた。

(4) 斎宮跡第Ⅲ期の土器

《斎宮Ⅲ-1期》

Ⅲ期は、土師器供膳具の小型化や画一化等の変化が進行した後の、土器様式の大きな変革の時期である。Ⅱ期にみられた杯・椀・皿(有台のものも含む)による供膳具の構成が、皿化した杯Dと、小皿にあたる皿D、および丸みのある体部をもつ椀C・台付椀に再編される。また、土師器杯・皿の胎土への砂粒の混入が多くなり、橙色が主体的だったⅡ期の土師器から白~灰白色がかったものが主体的になる。この段階での土師器の生産遺構は明らかでないが、土師器の原材料である粘土の供給や焼成技術に、ひいては供給そのものに何らかの変化があったことがうかがわれる。

Ⅲ-1期は三段階に細分しているが、全体に良好な資料が少ない。古相は「2000年編年」でも基準資料としていたS E 4050上層(61次)の他にはほとんど見当たらず、近傍から松阪市の朝見遺跡第2次調査のS K 48の資料を援用した⁽²⁹⁾。杯Aに代わり主要器形となった杯Dでみると、口径10.5~15cmで、その中でも11~13cmのものが多く、大小の規格の区別は明瞭ではない。径高指数は、Ⅱ-4期の杯Aと器高はほとんど変わらないが、口径が減じたことで0.22となっている。また、S E 4050上層からは、Ⅱ期にはなかった丸みのある体部を持つ椀Cと、これに高台を付けた台付椀や、ロクロ土師器の杯Aと台付杯・小皿・台付小皿といった新器種が現れる。

中相は、「2000年編年」の基準資料であるS E 2000(31-4次)で、杯Dの口径は11~14.5cm、径高指数で0.24と器高を増す傾向にある。中相に属するとみられる第59次調査のS D 3890出土の土器群は、第116-2次調査のS K 7770とともに、方格地割西隣にある広頭地区の方形区画外周の区画溝からの資料であり、壺・鉢などの大型器を含む被熱した緑釉陶器や、広口壺・短頸壺などといった灰釉陶器の貯蔵具など、通常の土器廃棄土坑とは性格の異なる一括資料である。『日本紀略』には、天元四(981)年に斎宮寮の雑舎十三宇が火災にあった記事がみられ、記録に残る火災であったこと、第59次調査では焼土も見つかっていることから、S D 3890の土器群はこの火災後の廃棄品と推定され、Ⅲ-1期中相に10世紀第4四半期頃の実年代が与えられると考えた。⁽²³⁾

新相も資料は少ない。S K 8407(133次)では杯Dで口径12.5~13.5cm、径高指数で0.25弱とや

や器高増の傾向にある。

共存する陶磁器類は、古相のS E 4050上層から腰高の灰釉陶器深碗がみられ、猿投窯では東山72号窯式に相当する。同時期の朝見遺跡S K 48でも、猿投窯の広久手30号窯類似品など東山72号窯式の灰釉陶器深碗を伴っていることから、Ⅱ-4期同様、生産後に比較的早い搬入から廃棄のサイクルがうかがえる。中相には、S E 2000にみられるように土師器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器（近江産）といった多彩な台付碗形態が出揃う。

ロクロ土師器は、柱状高台を持つものを除き、ほぼすべての器種が出揃う。当地のロクロ土師器については、生産地や技術的系譜など不明な点が多いが、胎土や焼成の特徴から複数のグループに区分できるようであり、今後の詳細な検討が待たれる。

《斎宮Ⅲ-2期》

Ⅲ-1期以降、依然として資料は少なく、今回三段階に分けているが、杯Dや皿Dの形態的な変化は乏しい。古相としたS E 8391(133次)や、まだ暫定的な整理の段階で、未報告の第162-3次調査の土坑1・2の杯Dは、口径11.5~15cmで、その中でも13~14cmに分布の中心があり(約64%)、径高指数は0.24である。この土坑1・2には、在来のもとの胎土・焼成は同じだが、明らかに形態の異なる、平安京編年の京Ⅳ期新段階~Ⅴ期古段階の、いわゆる「て」の字口縁の土師器皿に親和性のあるものが含まれており、11世紀第1四半期に位置づけた(第30図参照)。また、同様に古相のS E 8391(133次)の台付小皿の中に、口縁端部を内側に屈曲させたものがあり、これも平安京の京Ⅴ期古段階頃の皿を意識した可能性がある。

中相のS K 1074(20次)・1730(32次)は、「2000年編年」のⅢ-2期の基準資料でもある。杯Dの口径は12~16cmで、その中でも12~13cm台のものが多い(約71%)、径高指数は0.24、新相のS X 3665(56次)、S K 9926(157次)で、杯Dの口径はおおむね14~15.5cm、径高指数0.23である。中相から新相の間ではあまり大きな形態変化はみられない。供膳具以外では、球胴化した甕Aの体部外面上半のハケメがいつそう粗くなり、時には省略される傾向にある。

古相のS E 8391や、中相に相当するS E 7600(133次)では、Ⅲ-1期に引き続いて、土師器台付碗の他に、灰釉陶器の碗・深碗、無釉陶器である山茶碗、黒色土器A・B類の台付碗といった多彩な台付碗に加えて、さらにロクロ土師器の碗Bが加わる。この碗Bは陶器と判断しそうな堅緻な焼成で、器壁も薄い。緑釉陶器碗はこの段階には混入以外みられなくなり、ロクロ土師器碗Bは同時期の灰釉陶器の形態を写すことを強く志向しているものとみられるが、Ⅲ-1期新相に現れ、遅くともⅢ-2期内には消失する短命な器種である。同様のものに柱状高台を持つロクロ土師器小型杯がある。これはⅢ-2期古相に出現し、遅くともⅢ-3期古相には、出土量が大幅に減少し消失していく。このようにⅢ-2期の土師器供膳具は、その前後と比較しても形態的な特徴・変化に乏しいが、各種碗形土器・陶器や、ロクロ土師器に特徴づけられる段階と言えるだろう。

Ⅲ-2期に共存する陶磁器には、古相から東山72号窯式や百代寺窯式期の灰釉陶器碗・深碗や、第2型式の初期の山茶碗を伴っている。山茶碗はⅢ-2期新相に一般的となり、この段階には灰釉陶器はほとんど姿を消している。また、中相のS E 7600やS K 1071(20次)からは、大宰府の陶磁器分類で10世紀後半から11世紀中頃の標準資料である白磁Ⅹ類とされる玉縁口縁の碗が共存する¹⁰⁾。

Ⅲ-1~2期の土器類は良好な一括資料が少ないが、注意しておきたいのは、井戸一括の資料

が多いことであろう。Ⅲ-1～2期は、遺構の面でも史跡東部の方格地割の東2列分が衰退し、鍛冶山西区画の「内院」も消失する段階であり、その一方で、史跡中央部の方格地割西隣の広頭・東裏地区等で新たな区画の造営がみられる。このような斎宮の施設の変化が、土器量の減少、土器群の構成の変化、井戸への土器の廃棄といった事象に関連する可能性は高い¹²⁰。土器の出土量が増加に転じるとみられるのは、Ⅲ-2期新相以降である。中央の政治の実権が院(上皇)に移り、その息女が斎王とされたことにより、斎宮が中世に至る再生を果たしたとみなされる時期と一致する¹²¹。

《斎宮Ⅲ-3期》

院政期に入り、Ⅲ-2期新相から引き続いて、土師器を中心に土器類の出土量が増加に転じる段階で、二段階に区分している。杯Dでみると古相のSK6658(95次)・7305(108次)・7651(114次)・9940(157次)で、口径はおよそ13～15cmで、その中でも13cm台に分布の中心があり(約62%)、径高指数は0.25、新相ではSK9026(143次)・9028(143次)で口径12.5～16cmで、13～14cm台に分布の中心があり(約77%)、径高指数は0.25である。杯DはⅢ-2期に比べて器高が増す傾向で、底部の丸みが強くなるため、碗Cとの区別が無くなり、Ⅲ-3期の中で両者は統合されていく。また、杯Dには口縁部の先端を強くヨコナデするため、口縁部直下が肥厚するものがある。

前代までに比べると総体的に土器の出土量が増えるが、良好な一括資料は方格地割中核部の「内院」牛葉東区画や「療行」柳原区画周辺に多い。特に「内院」ではひらがな墨書土器を含み、土器片が区画溝を充填するように大量に出土する例がある。








































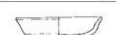






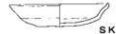

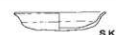



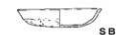
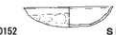

新相にかかるSK9026から、いわゆる「コースター形」の京都系土師器皿が出土しており、平安京の編年で京VI期(11世紀末～12世紀第3四半期)に相当すると考えられる。また、共存する山茶碗が第3～4型式のものであることから、Ⅲ-3期新相を、12世紀第2四半世紀を中心とした時期に位置づけた。

Ⅲ-3期には黒色土器はなくなり、代わって新相から瓦器碗・小皿が少量みられるようになる。



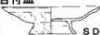











































《斎宮Ⅲ-4期》

第143次調査の概要報告で提唱され、以後慣例的に設定されてきた段階である。Ⅳ-1期以降は、クロ土師器が消滅していき、土師器の器種も整理・淘汰され、中世的な土器様式に転換していきが、典型的な中世土師器皿と、昭和59年度の「斎宮跡の土師器」に提示された平安時代末期の杯との型式差を埋める段階と認識されている¹²²。



















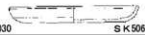



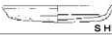





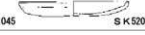
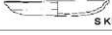








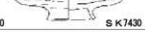












杯Dは、SK0247(118次)・6163(87次)・8110(125-1次)・9980(158次)で、口径13.5～16cmで、14cm台から15.5cmまでの間に分布の中心がある(約78%)。径高指数0.20となり、口径の拡大に伴い、杯が皿化することで再び低平化に転じる。Ⅲ-3期に引き続き口縁部直下が肥厚するものが残る。本書掲載の第10次のSK0555出土資料は、本段階最新相の良好な一括資料といえる。第4型式の山茶碗や、南伊勢系土師器鍋の編年で第1段階b型式の資料を共存することから、Ⅲ-4期の下限を示す資料で、Ⅲ-4期全体は12世紀第3四半期から第4四半期に位置づけられる。SK0555には、底部が平坦化し、そこから内弯気味に口縁部が立ち上がる土師器杯がある。この杯を杯Dとみるか中世的な皿とみるかで、SK0555の資料は、将来的にはⅢ-3期の最新相とするか、あるいはⅣ-1期に含めて再編されるべきかもしれない。一方、SK0555にはクロ土師器杯や小皿がかなり含まれていることも注意される。

直前期	7C前	杯G  河田C-19号墳				
	7C中	 SH8925				
I-1期	古	 SK7095	 杯A SH0059	 杯C SH0059	SH0059	
	新	 SB1615	 SB1615	 SB4743	 杯B2 SB1615	 杯B1 SB1615
I-2期	古	 SK5102	 SK5102	 SB5632	 SK5102	 SK5102
	新	 SK4497	 SK4497	 SK4497	 SK4497	
I-3期	古	 SB6405	 SB7445			
	中	 SK4498	 SK4498	 SB3920	 SB3920	
	新	 SK6620	 SK6225	 SK6620	 SK1098	 SK1098
II-1期	古	 SK8294	 SE4580	杯A  SK6030		
	中	 SH9001	 SH9001	 SH9001		
	新	 SH10885	 SK1445	 SK1445		
II-2期	古	 SK5200	 SK5200	 SK5200		
	新	 SK10502		 SK6753		
II-3期	古	 SK7430		 SK7430		
	中	 SK7930		 SK6792		
	新	 SK8308		 SK8308		
II-4期	古	 SB10152	 SB10152	台付椀  SK8546		











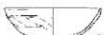


















第22図 土師器供膳具の段階と変遷(1)(1:6)

II-4期	新	 S K 8073	 S K 8073	 台付皿 S D 6750	
III-1期	古	 杯 D 新見 S K 48	 皿 D S E 4050上層	 S E 4050上層	 S E 4050上層
	中	 S E 2000	 S E 2000	 S D 3890	 S E 2000
	新	 S K 8407	 S K 8407		 S K 8407
III-2期	古	 S E 8391	 S E 8391		 S E 8391
	中	 S E 7600	 S K 1074		 S E 7600
	新	 S K 1730	 S K 1730		 S E 0720
III-3期	古	 S K 10138	 S K 10138		
	新	 S K 9026	 S K 9026		
III-4期		 S K 9990	 S K 9990		
IV-1期	古	 S K 9820	 S K 9820		
	新	 S D 4495	 S D 4495		
IV-2期	古	 S K 9035	 S K 9035		
	新	 S X 6534	 S X 6534		
IV-3期	古	 S K 8039	 S K 8039		
	新	 S K 3414	 S K 3414		
V-1期		 S K 6692	 S K 6692		
V-2期		 S E 7560	 S E 7560		

第23図 土師器供膳具の段階と変遷(2)(1:6)

直前期	7C前						
	7C中						
I-1期	古						
	新	 天王山 S K 303					
I-2期	古	 S B 5632	 S K 5102	 S K 5102	 S K 5102		
	新	 S K 4497	 S K 4497	 S B 4463	 S B 4463		
I-3期	古	 S B 6105	 S B 6105				
	中		 S B 3920		 S B 3920		
	新	 S K 6220	 S K 6220		 S K 6225		
II-1期	古	 S K 6030	 S K 5068	 S K 5068			
	中	 S B 4392	 S H 9001	 S H 9001			
	新	 S H 1445	 S H 1445	 S H 1445	 S K 9785		
II-2期	古	 S K 1045	 S K 5200	 S K 5200	 S K 1045		
	新	 S K 10502	 S K 10502	 S K 6753			
II-3期	古	 S K 7290	 S K 7430	 S K 7430	 S K 7430		
	中	 S K 7390	 S K 2650	 S K 2650	 S K 2650		
	新	 S K 8308	 S K 8308	 S K 8308	 S K 8842		
II-4期	古	 S K 7030	 S B 10152				























第24図 土師器供膳具の段階と変遷 (3) (1:6)

II-4期	新	 SK8073	 SD6750	杯B2  SD6750	 SK8073
III-1期	古	碗C  SE4050上層		 SE4050上層	
	中	 SE2000		 SE2000	
	新	 SK8407			 SE9835上層
III-2期	古	 SE8391		 SE8391	 162-3次土坑1・2
	中	 SK1074		 SK1074	 SK1074
	新	 SE0720		 SK1730	 SK1730
III-3期	古	 SK6658		 SK9028	
	新				
III-4期				 SK0555	
IV-1期	古				
	新				
IV-2期	古			 SK9035	
	新				
IV-3期	古				
	新				
V-1期					
V-2期					

第25図 土師器供膳具の段階と変遷(4)(1:6)

II-3期	中								
	新								
II-4期	古								
	新			椀A S K 8066					
III-1期	古	杯A S E 4050上層	台付杯 S E 4050上層		小皿 S E 4050上層	台付小皿 S E 4050上層			
	中	S E 2000			S E 2000	S E 2000			
	新			椀B S K 8407					
III-2期	古	S E 8391	S E 8391	S E 8391	S E 8391	S E 8391	S E 8391	小型杯(柱状高台) S E 8391	
	中	S E 7600		S E 7600	S E 7600	S K 1074	S K 1074		
	新		S K 1730		S K 1730	S K 1730	S K 9926		
III-3期	古	S K 10138	S K 9028		S K 9028	S K 9028	S K 10138		
	新	S K 9026			S D 10117下層	S D 10117下層			
III-4期		S K 0555	S K 2480		S K 2480	S K 0555			
IV-1期	古				S K 7873				
	新								
IV-2期	古								
	新								
IV-3期	古								
	新								


























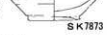
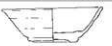







第26図 ロク口土師器の段階と変遷(1:6)

		黒色土器A類碗			
II-1期	新		S K 3730		
II-2期	古		S K 9786		
	新		S K 1045	黒色土器A類台付碗A	
II-3期	古		S K 2695	黒色土器A類台付碗A	S E 4050下層
			S K 2650		
	中		S E 7060		
			S K 8308		
II-4期	古				S E 4050下層
	新				
III-1期	古	黒色土器A類台付碗B		S K 8407	
		黒色土器B類台付碗			
	中		S E 2000		S E 2000
					
新					
III-2期	古		S E 8391		
			S E 8391		
	中		S K 1730		S D 7307
III-3期	古		S E 8391		
	新		S K 9026	瓦器	S K 9026
III-4期	古		S K 9026		S D 3062
			S K 9027		
IV-1期	古				S K 7873
	新				

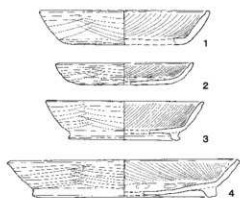
第27図 黒色土器・京都系土師器の段階と変遷（1：6）

直前 7C前 7C中	河田C-19号墳					
	S B 2235					
	S B 2235		S H 8925			
I-1 期	古					
	新					
I-2 期	古					
	新					
I-3 期	古					
	新					
II-1 期	古					
	新					
II-2 期	古					
	新					
II-3 期	古					
	新					
II-4 期	古					

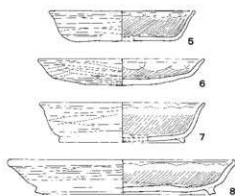
第28図 共存する須恵器・灰陶器類(1)(1:6)

II-4期	新	 S K 8066	 S D 6750
III-1期	古	 S E 4050上層	 S E 4050上層
	中	 S E 2000	 S E 2000
	新	 S K 7770	 S D 3890
		 S K 8407	 <白磁> S E 9835
III-2期	古	 S E 8391	 S E 8391
	中	 S E 7600	 S E 7600
	新	 S K 1074	 S E 7600
III-3期	古		 S K 1730
	新	 S K 10139	 S E 0720
			 S K 6658
III-4期		 S K 2480	 S K 9026
IV-1期	古		 S K 8110
	新		 S K 7873
		 S K 3803	 S K 7873
IV-2期	古	 S K 6140	 S X 7420
	新	 <古瀬戸> S X 6975	
IV-3期	古		 S X 6534
	新	 S B 6810	 S K 8039
		 S B 6810	 S B 6810
V-1期			
V-2期			

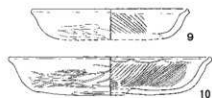
第29図 共存する須恵器・灰軸陶器類(2)(1:6)



齋宮跡 S K 5102 (第70-1次 I-2期古)



平城京左京三衆三坊七・八坪長屋王邸土跡 S D 4750 (平城Ⅱ)



齋宮跡 S K 10213 (第167次 I-3期古)



平城京 S K 820 (平城Ⅲ)



齋宮跡 S K 6030 (第86次Ⅱ-1期古)



齋宮跡(仮)土坑 1・2 (第162-3次Ⅲ-2期古)



齋宮跡 S K 9026 (第143次Ⅲ-3期新)



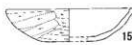
齋宮跡 S H 9001 (第143次Ⅱ-1期中)



平安京左京北辺三坊六町 (内膳町) S K 18 (京Ⅳ新)



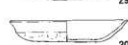
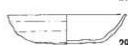
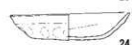
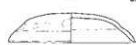
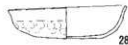
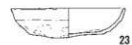
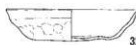
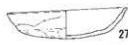
齋宮跡 S K 9028 (第143次Ⅲ-3期新)



長岡京左京南一衆三坊三町 S D 8903 下層 (京Ⅱ中)



平安京墨華院跡 4次井戸 12 (京Ⅵ古)



齋宮跡 S X 6666 (第95次Ⅱ-4期古)

第30図 編年比較資料 (1:4 錢貨のみ 1:2) ※各報告書等から再トレース

第22表 「2000年編年」と今回試案の比較

実年代	《2000年編年》		《2018年試案》		
	第1期	第2期	第1期	第2期	
640			直前期		
660					
680	第1期	第1段階	第1期	第1段階	古新
700				第2段階	古新
720				第3段階	古中新
740				第4段階	古中新
760	第2期	第1段階	第2期	第1段階	古中新
780				第2段階	古新
800				第3段階	古中新
820				第4段階	古新
840	第3期	第1段階	第3期	第1段階	古中新
860				第2段階	古新
880				第3段階	古中新
900				第4段階	古新
920	第4期	第1段階	第4期	第1段階	古新
940				第2段階	古新
960				第3段階	古新
980				第4段階	古新
1000	第5期	第1段階	第5期	第1段階	古新
1020				第2段階	古新
1040				第3段階	古新
1060				第4段階	古新
1080	第6期	第1段階	第6期	第1段階	古新
1100				第2段階	古新
1120				第3段階	古新
1140				第4段階	古新
1160	第7期	第1段階	第7期	第1段階	古新
1180				第2段階	古新
1200				第3段階	古新
1220				第4段階	古新
1240	第8期	第1段階	第8期	第1段階	古新
1260				第2段階	古新
1280				第3段階	古新
1300				第4段階	古新
1320	第9期	第1段階	第9期	第1段階	古新
1340				第2段階	古新
1360					

(5) 斎宮跡Ⅳ～Ⅴ期の土器

杯D・皿Dが中世で通有となる皿・小皿に、甕Aが南伊勢系鍋に変化し、これに山茶碗を加えたものが基本的な構成になる。このⅣ期以降は、山茶碗や、斎宮近辺で生産された南伊勢系土師器鍋の編年研究が進んでおり、これらは比較的生産から消費のサイクルが短いと考えられることから、これらの編年研究も参考に段階設定をした。

Ⅳ-1期の古相には、S K 7873(118次)で第5形式の尾張型山茶碗を、新相ではS K 3803(53-14次)で瀬美系山茶碗の2 a形式が共存していることから、Ⅳ-1期を12世紀末から13世紀第1四半期に位置づけられる。杯Dの後裔である中世化した皿は、S K 7873(118次)・8010(118次)・9826(153次)、S E 8010(118次)・9014(143次)、S D 4495(68次)で、口径12～17.5cmの幅を持つが、その中でも14～15cmに分布の中心がある(約71%)。径高指数0.20で、全体のプロポーシオンはまだⅢ-4期の杯Dに近い。

Ⅳ-2期は、皿・小皿は器形に変化が乏しく、S K 9035(143次)・10114(159次)、S X 6533(93次)・6652(95次)、S D 9652(155-5次)で、口径11.5～15cmとなり、口径の分布はⅣ-1期に比べてバラつきが大きくなると思われるものの、径高指数0.20と変わらない。口径15cm程度のやや大型品と11cm台のものが混在し、Ⅳ-1～3期の過渡的な様相とみることもできる。Ⅳ-2期の良好な資料は、現時点では中世墓からの一括資料以外は少ないことも関係するかもしれない。これは、鎌倉期に入り、亀山天皇の愷子内親王が文永九(1272)年に退下して以降、斎王がこの地に群行していない事とも無関係ではないだろう。Ⅳ-2期には、全般的に第6形式の山茶碗が共存する他、比較的古相とみられるS K 9035(143次)に龍

泉窯系の青磁碗が、新相のS X 6975(101次)には第1段階b型式の南伊勢系鍋と、灰釉を施した古瀬戸とみられる菊花碗が共伴する。S D 9652(155-5次)からも皿・小皿に伴って第1段階b型式の南伊勢系鍋が多数出土している。

IV-3期も良好な一括資料は中世墓からのものが目立つ。S K 3414(54次)・8039(123-6次)、S X 6976(101次)では、皿の口径が10~12cmと小型化する。そのため、径高指数も0.23と嵩高のプローションとなる。全般的に第7型式の山茶碗が共伴するS B 6810(71次)、S K 8039(123-6次)などとともに、S X 6976(101次)では、皿・小皿に第2段階a型式の南伊勢系鍋が共伴する。こうしたことからIV-3期は13世紀後半に位置づけられる。

V期は基本的に鎌倉時代末期以後と考えているが、良好な一括資料は少なく、史跡西部の古里地区での出土量が多いようである。V-1期としたS K 6692(97-1次)は皿・小皿と南伊勢系鍋の第2段階c型式が伴い、13世紀末から14世紀前葉に位置づけられる。皿の口径はすべて11.5cm前後で、径高指数は0.23である。仮にV-2期としたS E 7560(110-2次)の資料は、皿・小皿に第4段階b型式の南伊勢系鍋・羽釜・茶釜を伴い、15世紀中葉前後のものとみられる。皿の口径はすべて8cm台で、径高指数も0.27と大幅に器高増が進む。S K 6692とS E 7560の土器群の間には2~3段階分の時期差があるとみられ、今後の資料の補強と段階設定の整理が必要だろう。

註

- (1) 「斎宮跡の土師器」『三重県斎宮跡調査事務所年報1984 史跡斎宮跡発掘調査概報』三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 1985
- (2) 駒田利治・倉田直純・泉雄二「第四章 斎宮跡の土器編年」『斎宮跡発掘調査報告I』斎宮歴史博物館 2001
- (3) 「記念シンポジウム“斎宮の土器・みやこの土器”」『斎宮歴史博物館研究紀要十』斎宮歴史博物館 2001
- (4) 水橋公忠「光仁・桓武朝の斎宮造営と鍛冶山西地区」『斎宮歴史博物館研究紀要十二』斎宮歴史博物館 2002
- (5) 竹内英昭「土師器@斎宮-斎宮で使われた土師器-」『斎宮歴史博物館研究紀要十三』斎宮歴史博物館 2003
- (6) 竹内英昭「Ⅱ 第143次調査」『史跡斎宮跡平成16年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2006
- (7) 大川勝宏「斎宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究」『斎宮歴史博物館研究紀要十九』斎宮歴史博物館 2009
- (8) 渡辺博人「斎宮跡出土の美濃須賀瀬産須恵器」『斎宮歴史博物館研究紀要十四』斎宮歴史博物館 2005
- (9) 前掲(5)
- (10) 下村登良男「12 国指定史跡 水池土器製作遺跡」『明和町史 資料編第一巻』自然・考古 2004
- (11) 大川勝宏「研究ノート 斎宮跡で出土する瓦鉢類について-斎宮における仏教的要素への視点の形成-」『斎宮歴史博物館研究紀要二十一』斎宮歴史博物館 2013
- (12) 前掲(8)
- (13) 上村安生「考古資料からみた『続日本紀』天平二年七月癸亥条について」『斎宮歴史博物館研究紀要九』斎宮歴史博物館 2000
- (14) 前掲(4)
- (15) 既存の報告の中では、第21-1次調査のS K 1098、第38次調査のS K 2198、第62次調査のS K 4130・4152、第63次調査のS K 2358、第69次調査のS K 4585、第88次調査のS K 2798・6210・6220・6225・6226・6227・6228、第111-1次調査のS B 7465、第130次調査のS D 8299などがI-3期新相にあたると考えている。これらはS K 2198のみ史跡西部の古代伊勢道沿いで、あとは全て史跡東部の平安時代の方格地割の範囲内に分布する。その中でも特に方格地割中心部付近のS K 1098と第88次調査区内の土坑出土の土器群が圧倒的に大量に出土している。

- (16) 『IV 第88次調査』『史跡斎宮跡 平成2年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1991
- (17) 巽淳一郎「奈良時代の風・塵・正・由加一大型貯蔵用須恵器の器名考証—」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1995
- (18) 前掲(5)
- (19) 猿投窯の棧敷窯から「淳和院」の刻銘のある緑釉陶器焼成用のサヤが見つまっていることや、初期の緑釉陶器が嵯峨院跡・淳和院跡・冷泉院跡から出土していることから、緑釉陶器の生産への「院」の関与が想定されている。本文中掲載のS K 2695・7430以外でも、Ⅱ-3期のS K 2650(44次)・10230(167次)やS D 0337(9-1次)でも、内外面に陰刻花文を施す碗が出土していることや、嵯峨・淳和朝の斎王(仁子・氏子)はいずれも天皇息女であることから、緑釉陶器の斎宮への導入自体は若干遅る可能性はある。
- 尾野善裕「平安時代における緑釉陶器の生産・流通・消費」『国立歴史民俗博物館研究報告 第92集』2002 参照
- (20) 三重県埋蔵文化財センター『朝見遺跡(第1・2次)発掘調査報告』2014
- (21) この他の斎宮での火災記事として下記のものがある。
- ・承和六(839)年 度会斎宮で百字焼亡(『類聚国史』)
 - ・貞観九(867)年 官舎十二字延焼(『日本三代実録』)
 - ・延喜二十二(922)年 斎宮寮失火(『扶桑略記』)
 - ・長元四(1037)年 寮頭館の禿倉二字焼失(『太神宮諸雜事記』)
 - ・長暦四(1040)年 藏部司藏一字焼失(『奉記』)
- (22) 大宰府市教育委員会編『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』2000
- (23) 大川勝宏「斎宮方格地割の変遷・両期についての素描」『斎宮歴史博物館研究紀要二十四』斎宮歴史博物館 2015
- (24) 後三条・白河・後白河は息女を斎王としている。
- 『特別展 中世の斎宮—斎王と中世王権—』斎宮歴史博物館 1997
- (25) 前掲(6)

参考文献

- 都城や東海地方の須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器の編年研究の成果については、下記の文献を参考にした。
- ・小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究—日本律令の土器様式の成立と展開、7～19世紀—』京都編集工房 2005
 - ・古代の土器研究会編『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』1992
 - ・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業Ⅰ 古代 猿投系』愛知県 2015
 - ・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業Ⅱ 中世・近世瀬戸系』愛知県 2007
 - ・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業Ⅲ 中世・近世 常滑系』愛知県 2012
 - ・東海土器研究会『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の再構築』2000
 - ・豊田市教育委員会『来世古窯跡群—10世紀～13世紀の窯跡 灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗—』2008

第4章 遺物編総括

第1節 出土土器群からみる柳原区画

第2章の第1・2節や、既刊の概要報告から柳原区画の出土遺物について概観してみたい。

土器類は、時期的にはⅡ-1期古相からⅣ-1～2期まで切れ目なくみられるが、特にⅡ-1～2期は全体量だけでなく、一遺構からの出土量も多い。代表的な遺構として第20次調査のSK1045(Ⅱ-2期)、第143次調査のSH9001(Ⅱ-1期)、第152次調査のSK9785(Ⅱ-1期)・9786(Ⅱ-2期)がある。これらの遺構からの出土土器類は、他地区の同時期の一括資料に比べて須恵器と灰軸陶器の割合が高いことはすでに第2章でふれた。また、土師器が98～99%を占めるような他の一括資料は、土師器も杯A・皿A等に偏る傾向があるのに比べ、SH9001を除いて杯Bや碗B・高杯・蓋といった多彩な土師器を含んでいるという特徴がある。これらの遺構出土の須恵器・灰軸陶器の主体はいずれも杯・碗・皿等の供膳具であり甕類や壺類は極めて少ない。これらのことから、この土器群は祭祀というよりも饗応のような場での土器の大量使用を反映したものではないかと考えられる。

一方、Ⅱ-3～4期は、既存の報告を含めても土器の出土量が減少する。また、遺構出土のものも細片が多くなり、Ⅱ-1～2期の廃棄土坑の様相とは異なる。「内院」牛茱東区画や鍛冶山西区画では、Ⅱ-3～4期の土器が大量に出土しているのとは対照的である。遺構変遷の画期でいうと、柳原区画のC期からE期に相当するが、四面庇付建物を正殿とする、「寮庁」としての機能はB期から継続しつつも、D期には建物の棟方向が、正方位からN2°Eと大きく変化する。これは柳原区画だけでなく、東接する西加座南区画や西接する御館区画と一体となった変化であり、斎宮の建物配置に大きな変革期があったと考えられる。E期は2つの小期に分けているが、その間、建物の重複関係から正殿が無かった時期が想定される。このような遺構変遷の在り方は、土器群の変化と関連づけられるのではないかと考えられる。

Ⅲ-1～2期の土器も少ないが、これは第3章でも触れたように斎宮全体の傾向でもある。その後、柳原区画ではⅢ-3～4期には土器の出土量の増加がみられるが、第10次調査のSK0555(Ⅲ-4期)、第143次調査のSK9026・9028(Ⅲ-3期)などのように、土師器杯D・皿D、高杯あるいは器台にロクロ土師器の供膳具を中心として、これに若干の灰軸陶器碗や無軸陶器碗(山茶碗)を伴う器種構成が多く、また一括で大量に出土する例が多い。また土師器皿には「内院」である牛茱東区画同様、わずかながら京都系土師器を含む点も注目される。この変化を、第3章でも上皇を頂点とした王権の強化に伴う、院政期の斎宮への財政的な補強の結果ではないかと考えている。柳原区画の遺構の変遷の上でF期からG期にかけての段階に相当するが、それでもG期には、区画中央の正殿に相当する5間×2間の東西棟SB9753は残るものの、その他の建物は、区画南部に、南辺区画道路に向けた東西棟がみられるのみになっていく。Ⅳ-1期以降は、わずかに土器類は出土するが、遺構は確認されておらず、斎宮の施設としての柳原区画は終焉を迎える。Ⅲ-3期～4期にかけての土器群は、歴史的には、院政期の斎宮再興の反映であるとともに、柳原区画が衰退・廃絶していく中で大量に廃棄された一括資料でもある。

第2節 柳原区画を特徴づける遺物からみた柳原区画の性格

第2章の第3節でみた、柳原区画の性格を反映する可能性のある出土遺物を整理すると次のような特徴がうかがわれる。

- ①高級陶磁器類では、緑釉陶器は方格地割内の他区画に比べて量的に多くはなく、質的にも大きな特徴がない。しかし、貿易陶磁は9～11世紀の越州窯系青磁や白磁に優品が比較的にみられる。また、SK1045出土の須恵器鏡のような特殊品も出土している。
- ②硯類の出土数が方格地割内の他区画と比べて少ない。
- ③方格地割内における近隣の区画と比べ、小型模造品などの祭祀的な性格を帯びた出土品が少ない。
- ④官司名を墨書・刻書したとみられる土器がほとんどない。
- ⑤金属製品そのものの出土量は決して多くないが、輪羽口や炉壁、真土など金属加工に関連した遺物が出土している。

柳原区画の性格については、すでに『遺構編』で、方格地割造営期のA期(本書でのI-3期新相からII-1期古相)は、区画全体を区画溝により均等に四分割し、倉庫とみられる建物や井戸をそれぞれ配置した曹司的な性格を持つと考えている。そして、B期(II-1～2期)からG期(III-3～4期)にかけては区画の正殿となる四面庇付建物等を中心に、斎宮寮の儀礼と饗応を行った「寮庁」としての機能するようになったと考えている。上記の①②④の特徴から「外院」と呼ばれた実務的な官衙域とは一線を画すものであることがうかがえる。③からは神部司や、『延喜斎宮式』に記載される忌火・庭火祭や電神祭との関係は薄いと考えられる。このように、柳原区画は遺構だけでなく出土遺物の上でも他の区画からの一定の優位性を示すとともに、実務官衙とも異なる性格が表れているといえよう。斎宮跡において、方格地割の一区画の性格について、遺構の検討と出土遺物の検討を整合させられた、現段階では数少ない事例ともいえるだろう。

斎宮跡、とりわけ平安時代を中心とした方格地割内の機能とその変遷については、「内院」の解明などを中心に、調査研究が進められてきたところであるが、全体像の解明にはまだまだ道半ばと言える。そして、発掘調査の継続とともに、今回のように未報告資料の整理と検討もまた、新たな発掘調査に匹敵する成果をもたらすだろう。700年近くにわたって存続し、古代から中世にかけての国家の神祇政策や伊勢地方への関与を知ることができる全国で唯一の性格を持つ斎宮跡の歴史・文化的価値をつまびらかにし、さらに高めていく上で、斎宮跡の調査研究という歴史的事業が今後も継続していく必要性が痛感される。

参考文献

- ・大川勝宏「斎宮と方格地割」『律令国家と斎宮』ニューサイエンス社 2016
- ・大川勝宏「斎宮跡の祭祀と出土遺物」『三重県史 資料編 考古2』三重県 2008
- ・榎村寛之「斎王と斎宮」『律令国家と斎宮』ニューサイエンス社 2016

PL 1 柳原区画出土遺物 (1)



PL 2 柳原区画出土遺物（2）



PL 3 柳原区画出土遺物 (3)



報告書抄録

ふりがな	さいくうあとほくつちょうさほうこく に							
書名	斎宮跡発掘調査報告Ⅱ							
副書名	柳原区画の調査 出土遺物編							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	大川勝宏							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-7027							
発行年月日	西暦 2019年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
斎宮跡	多気郡明和町 斎宮・竹川	24442	210	34° 31′ 55″ ～ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ～ 136° 37′ 37″	197403 ～ 20100909	約12,000 ㎡	学術調査 ほか
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
斎宮跡 柳原区画	官 衙	奈良～平安	掘立柱建物 土坑・溝 道路跡	土 師 器 須 恵 器 緑釉陶器 灰軸陶器 貿易陶磁 金属製品		方格地割中央部の 柳原区画の総括		
要 約	<p>史跡整備事業の実施にあたり、事業計画地である史跡東部方格地割の柳原区画で実施した昭和49年度から平成22年度までの調査成果(出土遺物)の総括を行った。</p> <p>柳原区画は、平安時代に入り、区画中央に四面庇付建物が何度も建替えられており、前面の空閑地(「ニワ」とあわせて、平安時代を通した斎宮の政治的・儀礼的空間であったと考えられ、「寮庁」の一面であったと判断されるようになった。</p> <p>また、これまでの発掘調査の総括として、斎宮跡出土の土器編年の再検討を行った。</p>							

齋宮跡発掘調査報告Ⅱ

柳原区画の調査
出土遺物編

2019年3月

編集・発行 齋宮歴史博物館
印刷 共立印刷株式会社